
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

紀要

2009



2011年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(表紙) 戦国時代の猿形水滴 (美濃焼)
：鹿田遺跡第20次調査 (B地点)

(裏表紙) 弥生時代後期の線刻土器 (縮尺約1/4)
：鹿田遺跡第19次調査

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2009

2011年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

2009（平成21）年度は、岡山大学創立60周年の節目にあたりとともに本学の位置する岡山市が4月1日に政令指定都市に移行するなど、地域にとっても変化の大きい時期でした。本センターでは6月から3月まで3件の発掘調査を実施し、調査に追われる1年となりました。

津島岡大遺跡第32次調査（教育学部剣道場新営）では、比較的小規模ではありましたが縄文時代後期の貯蔵穴が12基確認されるなど大きな成果がありました。鹿田遺跡では、第20次調査A地点（中央診療棟新営共同溝地点）と同B地点（中央診療棟新営本体工事地点）の比較的大規模な調査を実施し、中世後半を中心に豊かな資料を確認しています。

また、創立60周年記念事業の一環として、岡山市デジタルミュージアムで企画展『水と人の環境史—岡山平野の五千年—』を、2009年8月5日から23日の17日間にわたって、岡山大学大学院環境学研究科などの多くの部局の協力を得て開催しています。これは、2008年度の第11回岡山大学キャンパス発掘成果展『水と循環』を発展させるとともに、総合大学としての特色を生かし、学際的な研究のいっそうの推進をめざしたものです。

考古学の分野では、過去の文化・文明が環境への対応を誤ったために崩壊の道をたどった例が、イースター島や、マヤ文明、カンボジアのアンコール遺跡群をはじめとして、最近注目されるようになってきています。森林の伐開が進むと土壌の流出や水資源への影響を引き起こし、気候の大きな変動がひとたび生じると、それに耐えることができなくなって一気に文明が崩壊してしまうというのです。

今回の企画展を通じて水と人とのかかわりを見つめなおしてみると、岡山平野などの地域では、水を利用し制御するシステムが少しずつ着実に整備されていっていることに驚かされます。それは、「文明」というような急激な発展ではないのですが、緻密な樹木が時間をかけて成長するように、知恵と技術が累積を続けているように見えるのです。このゆるやかではあるが着実な累積こそ、日本列島という狭い島国で豊かな文化を展開し続けることができたひとつの理由であるかもしれません。

本センターでは、引き続きこのような学際的な研究を発展させていきたいと考えていますので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願いします。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事）

北 尾 善 信

副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）

新 納 泉

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009

目 次

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節	発掘調査の概要	1
1.	津島岡大遺跡第32次調査（教育学部剣道場）	（池田 晋）1
第2節	試掘・確認調査の概要	7
1.	学童保育室新営予定地	（岩崎志保）7
2.	農学部構内植物工場新営予定地	（野崎貴博）8
第3節	立会調査の概要	11
1.	調査の実施状況	（光本 順）11
2.	津島地区環境整備・施設等案内板新設工事	（岩崎）11
3.	南北道路信号機付け替え工事	（岩崎）12
4.	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事	（光本）13
5.	文・法・経済学部旧ボイラー用煙突撤去工事	（光本）16
6.	環境理工学部公共下水道接続工事	（池田）19
7.	薬学部西水道管位置確認工事	（野崎）21
8.	その他の調査地点	（光本）21
第4節	津島岡大遺跡の研究	27
1.	津島岡大遺跡から出土したマメ圧痕土器の付着炭化物の分析	（工藤雄一郎）27

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節	発掘調査の概要	32
1.	鹿田遺跡第20次発掘調査（岡大病院中央診療棟新営）	（山本悦世・光本）32
第2節	試掘・確認調査の概要	40
1.	学生サークル棟新営予定地	（光本）40
第3節	立会調査の概要	43
1.	調査の実施状況	（光本）43

第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節	調査資料の整理・研究	（山本）45
1.	調査資料の整理	45
2.	調査資料の保存処理	45
第2節	調査成果の公開・活用	46
1.	公開・展示	（岩崎）46
2.	資料・施設等の利活用	（山本）49
第3節	2009年度調査研究員の個別研究活動	51
1.	科学研究費採択状況	51
2.	論文・資料報告	51

3. 研究発表など	51
4. 講演など	51
5. 資料収集・実態調査	52

第4章 2009年度における調査・研究のまとめ	(光本) 53
-------------------------	---------

付 編

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程	54
2. 2009年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織	56
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項	56

挿 図 目 次

第1章

図1 調査地点の位置	2
図2 南北中央断面図	3
図3 縄文時代後期検出遺構全体図	5
図4 弥生時代～古代検出遺構全体図	6
図5 調査地点の位置	7
図6 土層断面図	7
図7 調査地点の位置	8
図8 土層断面図	9
図9 土層断面図	11
図10 調査地点の位置	12
図11 土層断面図	12
図12 調査地点の位置	13
図13 土層断面図・平面図	14
図14 土層断面図	15
図15 調査地点の位置	17
図16 土層断面図	17
図17 調査地点の位置	19
図18 土層断面図	20
図19 調査地点の位置	21
図20 土層断面図	21
図21 土層断面図	21
図22 津島地区全体図	22
図23 2009年度の調査地点【1】 －津島地区－	25

図24 津島岡大遺跡から出土したマメ科種子 圧痕土器	27
図25 津島岡大遺跡から出土したマメ科種子 圧痕土器の較正年代と縄文時代後期の 各土器型式の較正年代との比較	29
図26 津島岡大遺跡から出土したマメ科種子 圧痕土器の炭素・窒素安定同位体比と 下宅部遺跡のマメ科種子との比較	30

第2章

図27 土層断面図	34
図28 A地点遺構全体図	35
図29 B地点土層断面図・遺構全体図	37
図30 調査地点の位置	40
図31 土層断面図	41
図32 北東地点の層序	42
図33 南西地点の層序	42
図34 2009年度の調査地点【2】 －鹿田地区－	44

第3章

図35 展示会場平面図	46
図36 出張講義風景	47
図37 講演会風景	48
図38 アンケート結果	48

表 目 次

表 1	2009年度津島地区調査一覧……………	22	表 4	第 9 期のPEG保存処理工程……………	45
表 2	津島岡大遺跡から出土したマメ科種子 圧痕土器の付着炭化物の分析結果……………	28	表 5	既往のPEG保存処理一覧……………	45
表 3	2009年度鹿田地区調査一覧……………	43	表 6	2009年度非常勤講師への委嘱依頼内容……	50

付 表 ・ 付 図

付表 1	1982年度以前の構内主要調査（1980 ～ 1982年度）……………	58
付表 2	2008年度以前の構内主要調査（1983 ～ 2008年度）……………	58
付表 3	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2009年度現在）……………	67
付表 4	埋蔵文化財調査室刊行物……………	69
付表 5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物（2010年 3 月末まで）……………	69
付図 1	津島岡大遺跡・鹿田遺跡とその周辺の遺跡……………	71
付図 2	2008年度までの調査地点【1】－津島地区－……………	73
付図 3	2008年度までの調査地点【2】－鹿田地区－……………	75
付図 4	2008年度までの調査地点【3】－三朝地区－……………	76
付図 5	2008年度までの調査地点【4】－東山地区－……………	76
付図 6	2008年度までの調査地点【5】－倉敷地区－……………	76

例 言

1. 本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2009年4月1日から2010年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目1-1、二丁目1-1、三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 工藤雄一郎氏（国立歴史民俗博物館）からは津島岡大遺跡の研究に関する玉稿をいただいた。そのほか本文は、池田 晋・岩崎志保・野崎貴博・光本 順・山本悦世が分担執筆し、執筆者名は目次および文末に記した。図面の作成には井上佐智・西本尚美の協力を得た。
4. 編集は新納泉副センター長・山本悦世調査研究室長の指導のもとに光本が担当した。

凡 例

1. 岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、平成14（2002）年4月1日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
 - 1）津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北を基軸とし、 $(X, Y) = (-144,156.4617\text{m}, -37,246.7496\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
 - 2）鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、 $(X, Y) = (-149,456.3718\text{m}, -37,646.7700\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区割りをを用いている。
 - 3）挿図中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、その他は磁北を用いている。
2. 岡山大学構内の遺跡名は、周知の遺跡の場合はそのまま名称を踏襲する。他の地区の調査地点は任意の名称で仮称する。
3. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものについては、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
4. 調査一覧表に記載した所属部局は、原則として各部局の頭文字を略号として用いている。
5. 付表2に記載した既往の調査一覧については、掘削深度が中世層以下に達した調査を対象とし、その他については除外した。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
6. 本文などで使用している調査番号は表と一致する。
7. 本紀要に掲載の地形図（図22）は、岡山市域図を複写したものである。

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 津島岡大遺跡第32次調査（教育学部剣道場：調査番号1、津島北AX02区）

a. 調査の成果

縄文時代後期から近代におよぶ各時代の遺構・遺物を確認した。

縄文時代後期 本調査地点の北60mに位置する第17・22次調査地点では微高地上に集落が展開することが判明しており、今回の調査によって当該微高地の南限を把握した。また、本調査地点で確認した河道は、第3・15次調査地点、第5次調査地点の河道と一連のものと考えられ、当時の自然地形を復元するデータが得られた。12基の貯蔵穴の検出は、本調査地点周辺では、第3・15次調査地点、第6・9次調査地点に次ぐもので、第17・22次調査地点の集落域を囲むように、近辺の谷や河道を利用して貯蔵穴を営んでいたことがわかってきた。

弥生時代 弥生時代前期に帰属する水田畦畔を確認した。

調査期間 2009年7月16日～10月13日

調査担当 池田 晋（主任）・岩崎志保

調査面積 383㎡

遺構・遺物

【遺構】 縄文時代後期：貯蔵穴・土坑、弥生～古墳時代：水田畦畔・溝・ピット、古代：転写畦畔、中世～近世：溝・耕作痕

【遺物】 土器類（縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器）、石器、植物遺存体（アンペラ・堅果類）、動物遺存体（ウシ・ウマ）

その他 2009年10月3日に現地説明会を開催：見学者130名

b. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

2009年度に岡山大学津島地区に教育学部剣道場の新設が計画された。計画地は、津島地区の北東部に位置する、現教育学部体育館北側の駐車場として利用されている地点で、既存の体育館を北に増築する計画である。

計画地周辺は既往の発掘・試掘調査によって、遺跡の概況が比較的判明している一帯である。計画地の位置する津島地区北東部を中心に、縄文時代後期の集落が展開していたことが判明している。また、弥生時代以降では、基本的には耕作域としての利用が進み、近代に至るまでの各時代の遺構・遺物が確認されている。

これらの調査成果から、今回の剣道場計画地においても縄文時代後期から近代におよぶ遺構・遺物の存在が予測され、発掘調査を実施することとなった。

(2) 調査の経過

発掘調査に先立ち、7月9・13～15日の4日間に、近・現代の造成土と、近代の耕作土を重機により除去した。造成土中において、東西方向に棟に向けた旧陸軍関連の建物基礎を確認した。

発掘調査は7月16日から10月13日まで実施した。経過は以下の通り。近世：7月16日～28日。中世：7月28日～

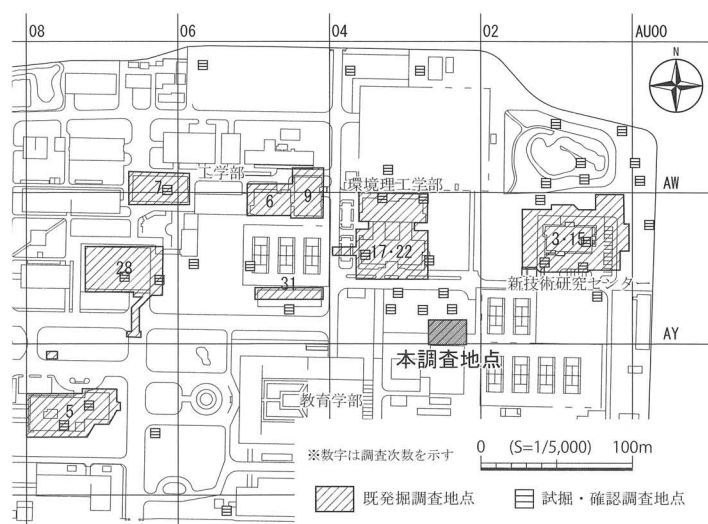


図1 調査地点の位置

津島北地区の東部、津島岡大遺跡の構内座標ではAX02区に位置する。周辺では、北60mに17・22次調査地点（環境理工学部棟）、北東70mに第3・15次調査地点（新技術研究センター）、西80mに第31次調査地点（福利厚生施設東棟）、北西110mに第6・9次調査地点（工学部6号館）が位置する。津島北地区の北東部は既往の調査地点が比較的密集しており、すでに多くのデータの蓄積がある。一方、本調査地点の南側、津島北地区の南東部は、立会・試掘調査の実施はあるものの、データの希薄な一帯になっている。

第17・22次調査地点では、微高地上に縄文時代後期の集落が展開していたことが判明している。本調査地点は、そのすぐ南側に位置しており、微高地の拡がりの確認が課題の一つであった。また、第3・15次調査地点、本調査地点の西南西220mに位置する第5次調査地点では、いずれも同時期の河道が確認されており、同一の河道であったと推定されている¹⁾。本調査地点は、両地点のほぼ中間に位置しており、河道流路に関するデータの収集も予測された。

(2) 層序と地形 (図2)

図2に、調査区内の地形の推移をよく示す中央の南北断面を示した。図の縮尺は、水平方向を垂直方向よりも圧縮して示している。確認した堆積層は、19層に大別できる。

1層：造成土。1907～1908年に実施された旧日本陸軍駐屯地造営に伴う造成土である黄橙褐色砂質土（真砂土）、および岡山大学設置以降の造成土（褐色土）を一括したもの。現地表面の標高は4.8～5.35m。

2層：明灰～青灰（グライ化）色砂質土。近代の耕作土層で、形成時期の下限が1907年である。上面の標高は4.0m。層上面に南北方向の畝痕跡が列状に並ぶ。

3～5層はいずれも砂質がつよく、似た色調・層相を呈する近世の耕作土層である。分層は色調と、鉄分・マンガンの集積面を目安とした。

3層：灰黄褐色砂質土。近世の耕作土。上面の標高は3.85m。鉄分の沈着が顕著。

4層：黄褐色砂質土。近世の耕作土。上面の標高は3.8m。4・5層からは陶磁器片が出土している。

5層：黄褐色砂質土。近世の耕作土。上面の標高は3.75m。

6層：灰黄褐色土。層上面の耕作痕から13～14世紀頃の土師質土器碗の底部片、層中から亀山焼の破片が出土していることから、中世の耕作土と考えられる。上面の標高は3.7m。色調・層相が7層と似るものの、本層が鉄分・マンガンを含むことで区分される。

7層：黄灰褐色土。層中から土師質鍋の支脚片などが出土しており、中世の耕作土とみられる。上面の標高は3.6～3.65m。

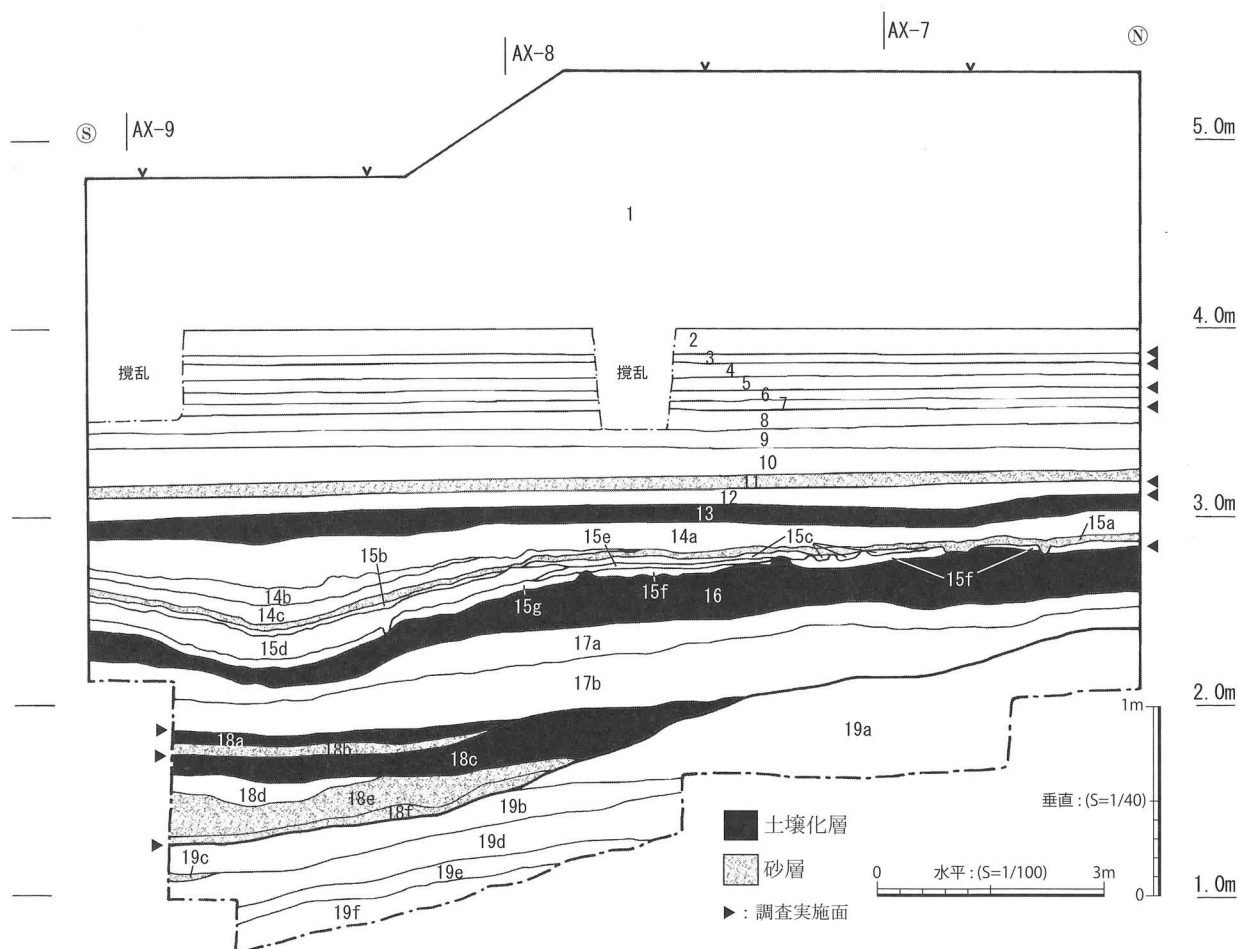
8月4日。古代：8月4日～25日。弥生～古墳時代：8月25日～9月11日。縄文時代後期：9月14日～10月13日。なお、10月3日には現地説明会を開催し、130名の参加者があった。

c. 調査の概要

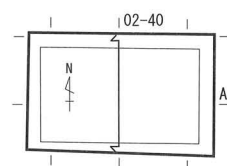
(1) 調査地点の位置 (図1)

本調査地点は津島北地区の東部、津島岡大遺跡の構内座標ではAX02区に位置する。

周辺では、北60mに17・22次調査地点（環境理工学部棟）、北東70mに第3・15次調査地点（新技術研究センター）、西80mに第31次調査地点（福利厚生施設東



断面位置



- | | | |
|--------------|---------------------|----------------------|
| 1. 造成土 | 14a. 淡灰褐色砂質～褐灰色粘質土 | 18a. 暗灰色粘質土 |
| 2. 明灰～青灰色粘質土 | 14b. 淡褐色粘質土 | 18b. 暗青灰色微～細砂 |
| 3. 灰黄褐色砂質土 | 14c. 褐灰色粘質土 (植物遺体△) | 18c. 暗灰色粘質土 |
| 4. 黄褐色砂質土 | 15a. 明黄褐色細～粗砂 | 18d. 暗青灰～灰色砂質土 |
| 5. 黄褐色砂質土 | 15b. 灰白色砂混淡灰褐色粘質土 | 18e. 青灰色細～粗砂 |
| 6. 灰黄褐色土 | 15c. 淡灰褐色粘質土 | 18f. 青灰色微～細砂 |
| 7. 黄灰褐色土 | 15d. 淡灰色粘質土 | 19a. 淡～暗黄灰色砂質土 |
| 8. 淡黄灰褐色土 | 15e. 淡褐色粘質土 | 19b. 青灰色粘質土 |
| 9. 黄灰褐色土 | 15f. 淡灰～淡褐色粘質土 | 19c. 青灰色粗砂 |
| 10. 灰色粘質土 | 15g. 灰色粘質土 | 19d. 淡青灰色粘質土 |
| 11. 灰白色砂質土 | 16. 黒褐～黒灰色粘質土 | 19e. 灰色粘質土 |
| 12. 灰色粘質土 | 17a. 暗灰色粘質土 | 19f. 暗黒灰色粘質土 (植物遺体△) |
| 13. 暗灰色粘質土 | 17b. 灰色砂質土 | |

図2 南北中央断面図

8層：淡黄灰褐色土。上面の標高は3.55～3.6m。上下層との関係から、古代末から中世前半の耕作土と考えられる。色調・層相が9層と似るものの、本層が鉄分・マンガンを多く含むことで区分される。

9層：黄灰褐色土。上面の標高は3.45～3.5m。8層と同様、古代末から中世前半の耕作土と考えられる。

10層：淡灰色粘質土。8・9層よりも細粒で、粘性がつよい。上面の標高は3.35m。10層から上層では、縄文時代以来の地形の起伏がなくなる。他の層と比較して多くの土器片・礫を含んでいる。土師器・須恵器・鉄滓が出土しており、時期は9～10世紀の範囲に収まる。色調・層相から耕作土とみられるが、土器の出土量は周辺域からの流れ込みによるものとは考えにくく、近辺に当該期の集落が存在し、その包含層を削ってもたらされた可能性がある。

11層：灰白色砂質土。上面の標高は3.15～3.25m。層厚1～5cmと薄く、地点によっては上層からの攪拌によつ

て粘質土となり、10層と同化しているものの、本来はパウダー状を呈す極細砂～細砂の氾濫堆積物（洪水砂）である。遺物は少ないものの須恵器小片などが出土しており、古墳時代後半に帰属するとみられる。

12層：灰色粘質土。マンガン・鉄分の集積が著しく、色調から耕作土とみられる。色調・層相は13層と似ており、本来は同一層であったものが耕作活動による還元化が進み、上層が脱色化したものと考えられる。出土遺物に須恵器は含まないため、形成時期はおおよそ弥生時代後期末から古墳時代前半の幅を考慮しておきたい。12層上面では転写畦畔を検出しており、10層段階の耕作面の状況を反映している可能性が高い。上面の標高は3.05～3.2m。調査区東端部が13層以前の地形を反映して最深部で15cm程度窪む。

13層：暗灰色粘質土。上下層と比べやや暗色がつよく、微弱な土壌化作用を受けているとみられる。出土遺物および周辺調査地点の成果から、弥生時代後期の堆積層と判断される。耕作土の可能性も考えられたが、畦畔は確認されなかった。上面の標高は2.8～3.1mで、縄文時代以来の地形を反映して調査区東部にたわみがみられた。

14層：14a～14c層に細分できる。14a層上面の標高は2.65～3.0m。14層の堆積により縄文時代以来の谷はほぼ埋没している。微高地から低位部に堆積する14a層は耕作土の可能性はあるが、低位部を埋める14b・14c層は自然堆積層である。上下層との関係から弥生時代中期頃と考えられる。

15層：15a～15g層に細分できる。15a層は氾濫堆積物（洪水砂）とみられ、上面の標高は2.3～2.9m。15f層は微高地の16層を覆う、16層上面の畦畔機能時の耕作土である。出土遺物は各層とも非常に少なく、堆積時期は上下層との関係から弥生時代前期末から中期までの幅に収まると考えられる。

16層：黒褐（微高地）～黒灰（低位部）色粘質土。津島岡大遺跡一帯で「黒色土」層と通称している、鍵層となる土壌化層である。上面の標高は2.0～2.7mで、調査区全体で確認された。層厚は10～30cmで、低位部に向かうほど薄く、色調も淡くなる。微高地の層上面で15f層を耕作土とする水田畦畔を検出している。周辺の既往の調査成果から弥生時代早～前期に形成された層と考えられる。

17層：17a～17b層に細分できる。17a層上面の標高は1.75～2.6m。17層は、微高地では、安定した土壌化層である16層の漸移層として位置づけられ、少なからず土壌化の作用を受けている。一方、低位部では堆積が厚く、土壌化が進行しなかったようである。遺物の出土は少なかったものの、礫の出土（円礫～亜円礫）が目立った。堆積時期は、縄文時代後期中葉以降から弥生時代早期までの時間幅が考えられる。

18層：18層は低位部のみに堆積する層で、18a～18f層に細分できる。18d～18f層は砂層を主とする河川性堆積物で、これらの堆積期間に低位部は河道として機能していたとみられる。18a・18c層は暗色・粘性がつよい微弱な土壌化層で、河道埋没後に低位部が地表面として機能していた時期があったことを示す。18a層上面の標高は1.6～1.9m、18c層上面は1.45～2.1m。微高地に向かうにつれて18a・18c層は1つの層に収斂し、分層は困難となる。また、18a・18c層は微高地側では17層と独立した土壌化層としては認識できず、削平を受けているか、一連の微弱な土壌化層として収斂していると考えられる。18b層は上下の土壌化層に挟まれた自然堆積層で、低位部の最深部のみで確認された。18a層の土壌化作用の及ばない範囲にのみ残存した層とみられる。

18f層中、および19層との層理面からはまとまった量の縄文土器が出土した。時期は後期初頭から前葉を主体とする。12基の貯蔵穴が18a・18c層の各層上面から掘り込まれており、河道が埋まった後に形成された谷を利用したものである。貯蔵穴内からの遺物は少量であったが、18a・18c層のいずれの面の貯蔵穴も後期中葉に帰属する可能性が高く、後期前葉の幅に収まる間に18a～18f層の堆積が進んだものとみられる。

19層：19層は縄文時代後期以前の堆積層（基盤層）で、平面調査の対象としたのは19層上面までである。19層上面は、微高地では土壌化層をすべて取り除いた面であり、低位部では縄文時代後期前葉の時点の河道底である。19層上面の標高は、0.8～2.4m。19a～19f層に細分できる。いずれも側溝内での掘削・観察に限られるが、19層からの遺物の出土はなかった。

(3) 遺構と遺物

①縄文時代後期（図3）

縄文時代後期の遺構検出面は、19層・18a層・18c層の各層上面である。

19層 19層上面段階では、調査区南東部に北東から南西方向に流下する河道の右岸が通っている。第3・15次調査地点の同時期の河道と同一のものとみられ、第5次調査地点の河道とも一連のものとなる可能性が高い。また、調査区北西部には落ち込みがみられる。微高地は、北東から南西方向に向かって緩やかに下がっている。

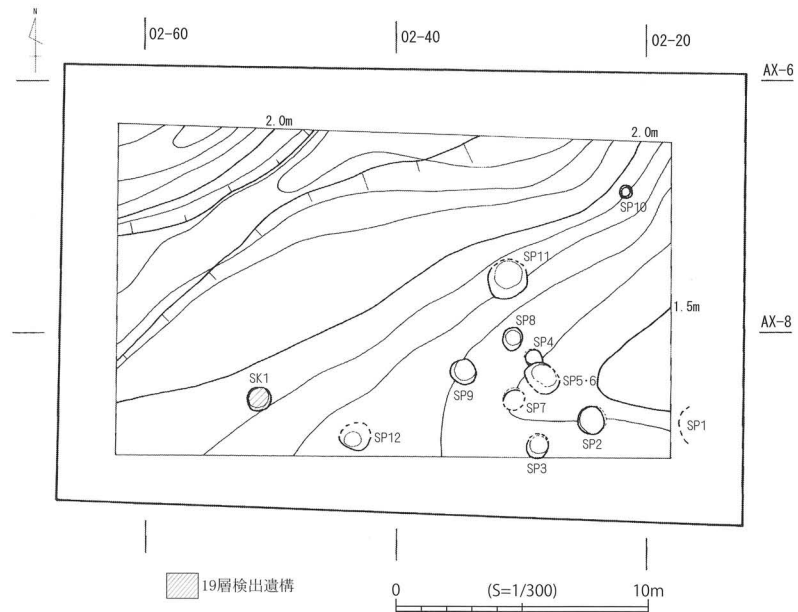


図3 縄文時代後期検出遺構全体図

19層上面の遺構は、河道の肩で検出した土坑1基（SK1）のみである。貯蔵穴とは断面形・堆積状況が異なり、用途不明の遺構である。帰属時期は検出面から縄文時代後期前葉とみられる。

18層 18層段階では、19層上面段階で調査区南東部に流下していた河道が埋没し、北東－南西に軸をもった低位部が形成される。微高地上および調査区北西部の落ち込みでは18層を認識しえなかったため、17層をすべて除去した19層上面で遺構検出を行った。そのため、低位部以外の地点の地形は19層上面段階と変わらない。

貯蔵穴12基（SP1～12）は低位部の底近くの傾斜が緩やかになった地点に、おおむね等高線に沿うような状況で検出された。先述のように、貯蔵穴には18a層上面で検出したもの（SP1～3、5～11）と、18c層上面で検出したもの（SP4・12）がある。低位部中央部に古段階のものが、斜面部に新段階のものが分布する傾向がある。いずれの検出面のものも後期中葉に帰属するとみられる。直径は0.5～1.6mのものがあり、規模にはばらつきがある。貯蔵穴内からの遺物の出土は少なく、堅果類もまばらに残存するのみであった。埋土は、ラミナの観察されるシルト～細砂で充填されているものが多く、使用後に開放状態で放棄されたまま、緩やかな堆積環境下で埋没していったと推測される。SP9の底部付近ではアンペラが比較的良好な状態で検出された。

②弥生時代～古墳時代（図4）

弥生時代から古墳時代の遺構検出面は、16層・15層・14層・13層の各層上面である。

16層上面 18層段階の低位部は16層上面においても継続しているものの、周囲の地形の埋積が進み、やや幅が狭く、傾斜の急な谷になっている。北側の微高地に加えて、調査区南東端に向かって急な傾斜の立ち上がりが確認され、南東側にも微高地が展開していたと考えられる。

微高地上において、水田畦畔および溝1条を検出した。畦畔は、傾斜に平行する北東－南西方向に2条検出しており、直交する方向のものは部分的に確認したのみである。溝1条は北側の畦畔の脇で検出された、幅10cm、深さ3cmで、畦畔に関連する遺構とみられる。既往の調査成果から弥生時代前期に帰属すると考えられる。

15層上面 調査区北西端で溝1条を検出した。調査範囲では南側の肩の一部を検出したにすぎないが、地形の傾斜と平行して北東－南西方向に掘削されている。時期は帰属面から弥生時代中期～後期頃と考えられる。

13層・14層上面 14a層上面でピット2基、13層上面でピット1基を確認した。深さは10cm程度で、いずれも

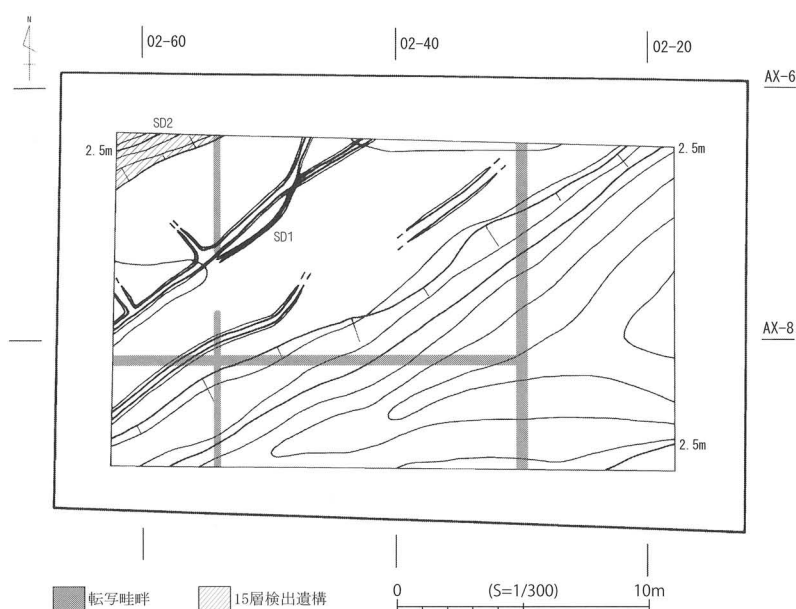


図4 弥生時代～古代検出遺構全体図

柱穴などの構造物の痕跡とはみなしがたい。時期は弥生時代後期～古墳時代と考えられる。

③古代（図4）

古代の遺構検出面は、12層上面の1面である。

12層上面 12層上面段階では、縄文時代以来の低位部は埋没し、調査区内はほぼ平坦となるが、AX02-28に向かって下がる緩やかな窪みが残存している。ほぼ正確に東西南北を指向する転写畦畔を検出した。南北方向に2条、東西方向に1条である。幅20～50cm程度の鉄分・マンガンの帯状の沈着として認

識された。02-30ラインから東側で検出されなかった要因としては、下層の影響を受けて12層上面の地形が東に向かって下がっており、鉄分・マンガンの沈着レベルが低い地点にまで達しなかったためと考えられる。11層は氾濫堆積物で、耕作活動は想定できないため、10層段階の耕作活動を反映している可能性が高いが、正確な時期の特定は難しい。02-30ラインの南北方向の畦畔痕跡の位置が、古代の坪境線とほぼ一致し²⁾、時期を検討する際の参考となる。

④中世～近世

中世の遺構検出面は、8層上面・6層上面の2面である。いずれの面でも調査区内の地形はほぼ水平で、南北方向を基本とする耕作痕を確認した。出土遺物から、8層上面は古代末～中世前半、6層上面は13～14世紀頃の耕作面とみられる。

近世の遺構検出面は、4層上面・3層上面の2面である。いずれの面でも南北方向の耕作痕を検出し、分布状況もほぼ同様である。3層上面では、調査区東端に南北方向のやや幅広の溝が1条検出されており、耕作地の区画を示す遺構の可能性はある。3～5層からは中世末～近世の遺物が出土している。

以上の成果は、整理途上の認識に基づくもので、正式報告は2010年度末刊行予定の報告書を参照されたい。

(池田 晋)

註

- 1) 山本悦世 2004「縄文時代後期の集落構造とその推移」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 池田 晋 2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡19』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第2節 試掘・確認調査の概要

1. 学童保育室新営予定地（調査番号2、津島北AV14区）

a. 調査の経緯（図5）

津島北地区に学童保育施設の新設が計画された。予定地は津島北地区の北西部、現在文学部資料館として利用されている赤レンガ建物の北側にあり現状では緑地となっている。建物の面積は130㎡で、建物の構造上、地下への影響は少ないと考えられることから発掘調査は行わず、予定地中央に1箇所の試掘調査を実施して状況を確認することとした。

周辺では赤レンガ建物の南側で小橋法目黒地点（津島岡大遺跡第1次調査：1981年：図5－※1）、東約20mの附属図書館新館建設地点（同第12次調査：1994年：図5－55）を実施している。第1次調査地点では弥生時代及び古代の大溝の存在を、また第12次調査地点では縄文時代後期から近代まで各時期の遺構・遺物を確認している。注目される遺構としては、弥生時代前期の水田畦畔、弥生時代中期～古墳時代初頭の大溝、古代の畦畔と東西方向の大溝がある。

以上の成果を踏まえ、特に縄文時代後期の地形復元と弥生時代前期の水田のひろがりの確認を主眼に調査を行うこととした。

調査は建物予定地のほぼ中央部に2m×1mの試掘坑を設定し、掘削を行った。試掘・確認調査は2009年4月9日に実施し、調査員1名が担当した。

b. 調査の成果

【層序】（図6） 本調査地点では造成土以下14枚の土層を確認した。以下順に記す。なお、いずれの層からも遺物の出土は見られなかった。

1層：造成土である。現地表面の標高は4.71mである。現地表面より1mで赤レンガとコンクリートからなる建物基礎を確認した。海拔標高3.8mにあたる。基礎は建設予定地内の北側に

東西方向に延びるように位置している。調査地点の南側に現存する赤レンガ建物と同様、旧日本陸軍の建物があったのであろう。さらに1m下までが黄褐色の砂質土からなる造成土であり、層厚1.95mである。

2層：暗灰色を呈する粘質土層である。上面の標高3.05m、近代の耕作土であり、層厚0.1mである。

3層：茶褐色を呈する砂質土層で、細砂を含む。上面の標高3.0m、近世の耕作土と考えられる。

4層：淡茶褐色砂質土で鉄分・マンガンが多く含む。上面の標高2.9m、中世の耕作土層と考えられる。

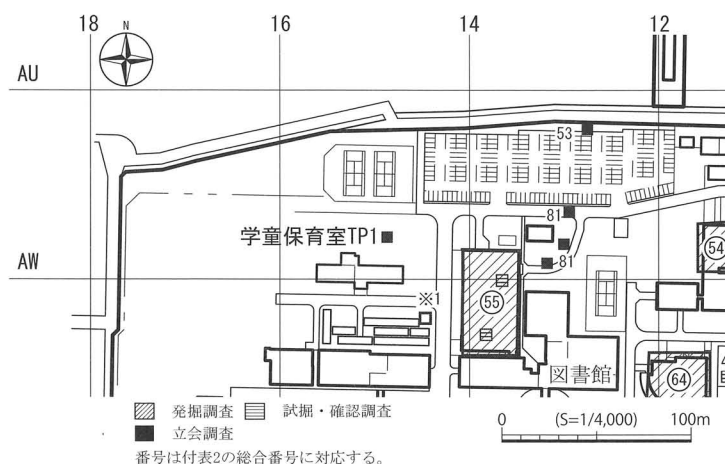


図5 調査地点の位置



図6 土層断面図

- 5層：灰褐色粘質土で、グライ化が窺える。上面の標高2.82m、中世耕作土層と考えられる。
- 6層：淡褐色粘質土で鉄分を含む。上面の標高2.6m、古代耕作土層と考えられる。
- 7層：褐色を呈する粘質土で、鉄分を多く含む。上面の標高2.5m、古墳時代層と考えられる。
- 8層：黄褐色粘質土で、鉄分を顕著に含み、細砂を混入する。上面の標高2.45m、弥生時代層と考えられる。
- 9層：淡褐色砂質土で、鉄分を多く含む。上面の標高2.37m、弥生時代後期相当と考えられる耕作土層である。
- 本層：上面では南北方向の畦畔状の高まりを確認した。
- 10層：茶褐色粘質土である。細砂を多く混入する。上面の標高2.25mを測る。
- 11層：茶灰褐色砂質土で、鉄分・マンガンが顕著に見られ、細砂を多く混入する。上面の標高2.2mである。
- 12層：暗褐色を呈する砂質土層である。細～粗砂を多く混入する。上面の標高2.0mである。
- 10～12層の時期については遺物がないことから明確にはわからないが、弥生時代前期～後期頃の可能性が高い。また細砂の混入が目立つという特徴から流水の影響が考えられる。
- 13層：暗黒褐色粘質土層である。上面の標高は1.9m、いわゆる「黒色土」層にあたり、その時期としては弥生時代前期と考えられる。通常の黒色土に比べ、粘性が高く色調が暗い。
- 14層：暗灰色を呈する粘質土～シルトである。上面標高1.7m、縄文時代後期の基盤にあたるものと考えられる。

c. まとめ

縄文時代後期、14層の堆積時には本調査地点一帯は低地状を呈していたものと考えられる。弥生時代前期には13層上面の標高は1.9mと第12次調査地点と同様の状況であり、今回確認はされていないが上面に前期水田の広がる可能性がある。13層は形成されてはいるものの、通常の「黒色土」に比して粘性が強く暗い色調を呈しており、縄文時代の環境が影響しているものと考えられる。その後12層～10層の堆積時には粗～細砂を多く含む砂質土層の堆積がみられ、おそらく弥生時代後期頃と考えられる9層段階には沖積化が進み、畦畔状高まりの存在からも窺えるように耕作地としての利用が認められる。以後、近代までほぼ水平堆積が認められる。

本調査地点は津島岡大遺跡の北西端に近く、第12次調査の成果からもこの付近一帯は北あるいは北西方向に向かって下がっていく低位部にあたるものと予想されていた。調査の結果、やはり縄文時代後期には低い地形であったことがわかった。しかし、弥生時代前期には12次調査地点と同様に水田の可能性がある地形の広がりがうかがえ、また前期～後期にかけても、土地の形成が進んだことが確認された。

(岩崎志保)

2. 農学部構内植物工場新営予定地（調査番号3、津島南BF20区）

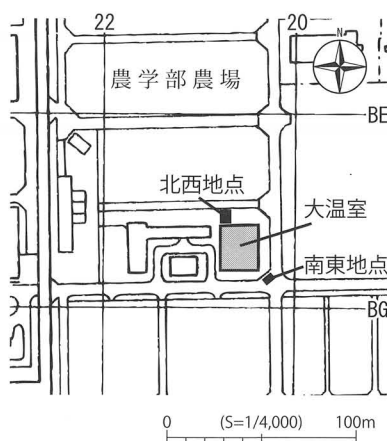


図7 調査地点の位置

a. 調査地点の位置と経緯・経過（図7）

本試掘・確認調査は、津島南地区西半部にひろがる農学部農場内への植物工場建設誘致計画にともなうものである。試掘坑は工場建設が予定された農場のほぼ中央に位置する大温室の北西角および南東角の2か所に設定し、重機によって掘削した。調査は2009年8月6日に実施し、調査員1名が担当した。

調査の結果、遺構および包含層の広がりが確認され、事業が推進された場合、発掘調査が必要となることが判明した。しかし、本事業計画が実施されなかったため、発掘調査には至らなかった。

b. 調査の成果

(1) 北西地点の調査概要

本地点では近代以降の盛土が約2mに及ぶため、上面を4.3×3.5m、

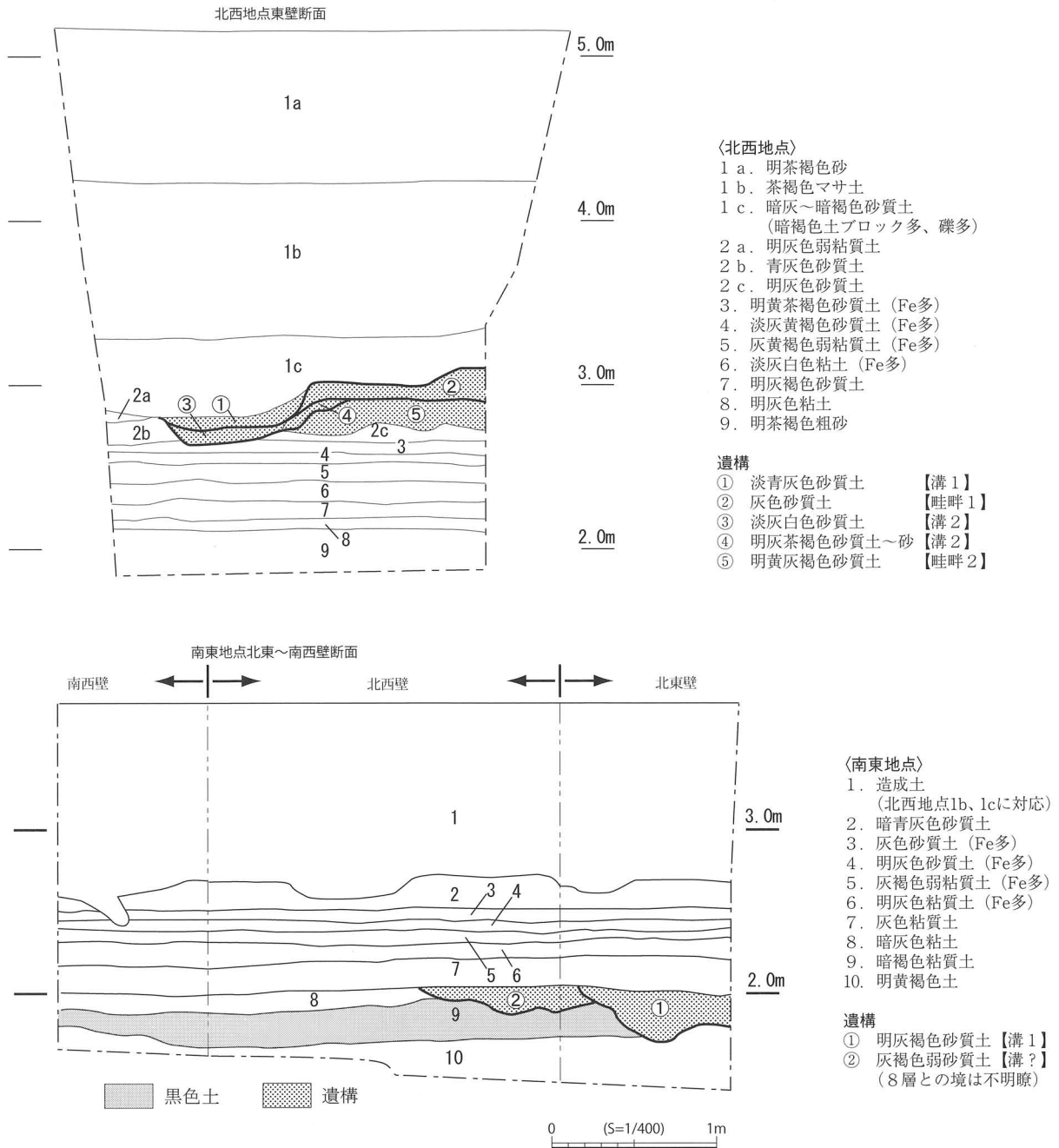


図8 土層断面図

近代層以下を2.3×1.2mの範囲で2段掘りとし、標高1.8m、GL-3.4mまで掘り下げた。なお、遺物は出土しておらず、土層の時期は周辺の調査成果を参考に推定したものである。

【層序】(図8)

1層：陸軍駐屯地造成(1907年)以後の造成土である。掘削部分は、大温室を含む農場の造成により、周辺の道路面(標高約3.7m)よりもさらに1m以上盛土を施しており、上面の標高は5mを超える。そのため造成土は3層に分層できた。1a層は明茶褐色砂、1b層は茶褐色マサ土、1c層は暗灰～暗褐色砂質土で暗褐色土ブロックや礫を多く含んだ層である。このうち、周辺の道路面よりも高いレベルで確認された1a層が農場造成時の盛

土、1 b層とその下位の1 c層が陸軍駐屯地造成以後の造成土と考えられる。

2層：陸軍駐屯地造成以前の耕作土層で、近代の土層である。調査区北側は東西方向の畦畔、中央部は東西溝となっており、その南側および畦畔の下部で確認した。上面の標高は2.86mである。

3層：明黄茶褐色砂質土で、上面は鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.64mである。

4層：淡灰黄褐色砂質土で、鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.58mである。

5層：灰黄褐色弱粘質土で、鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.52mである。3～5層は近世層と考えられる。

6層：淡灰白色粘土で、鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.4mである。中世層と考えられる。

7層：明灰褐色砂質土で、上面の標高は2.28mである。古代～中世の土層と考えられる。

8層：明灰色粘土で、上面の標高は2.18mである。古代層と考えられる。

9層：明茶褐色粗砂で、上面の標高は2.12mである。掘削は標高1.8mまで行ったが、それ以下はボーリングステッキによって堆積状況を探った。その結果、ボーリングステッキの先端が到達した標高約1mまで粗砂層が続いていることを確認した。古代以前の河道とみられる。

【遺構】(図8) 2層では、東西方向にのびる近代の溝と畦畔を確認した。溝1は幅0.86m、深さ0.2m、溝2は幅1.12m、深さ0.14m、畦畔1は幅1.15m以上、高さ0.18m、畦畔2は幅1.2m以上、高さ0.16mをはかる。遺構の上下関係から、溝1と畦畔1、溝2と畦畔2が各々同時期に機能しており、位置を踏襲しながら2段階にわたって形成されたものである。この東西溝および畦畔の構築された位置は、津島地区周辺の条里地割では坪境にあたっている。しかし、3層以下の土層は水平な堆積状態を示しており、溝や畦畔などの区画の痕跡は認められない。

(2) 南東地点の調査概要

試掘坑は大温室南東の道路面に2.5×2mの範囲で設定し、標高1.4m、GL-2.35mまで掘削した。遺物の出土はなく、土層の時期は周辺の調査成果からの推定である。

【層序】(図8)

1層：陸軍駐屯地造成(1907年)以後の造成土である。

2層：陸軍駐屯地造成以前の耕作土層で、近代の土層である。東西方向の畝の起伏を確認した。上面の標高は2.78mである。

3層：灰色砂質土で、上面は鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.52mである。

4層：明灰色砂質土で、鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.44mである。3・4層は近世層と考えられる。

5層：灰褐色弱粘質土で、鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.38mである。

6層：明灰色粘質土で、鉄分の沈着が著しい。上面の標高は2.32mである。

7層：灰色粘質土で、上面の標高は2.22mである。5・6層は中世層、7層は古代層と考えられる。

8層：暗灰色粘土で、上面の標高は2.06mである。土層の時期を決定する材料に乏しく、時期決定は困難である。

9層：暗褐色粘質土で、上面の標高は1.88mである。津島地区で広く観察される「黒色土」層であり、上面が弥生時代前期にあたる。

10層：明黄褐色土で、上面の標高は1.72mである。縄文時代後期の基盤層と考えられる。

【遺構】(図8) 8層から掘りこむ溝1を確認した。溝1の規模は幅0.94m以上、深さ0.3mである。遺物の出土はない。掘削面である8層の時期については、弥生時代中期から古代までの可能性があり、土層からも溝の時期についても絞りこむ材料に欠けている。また、溝1に切られるかたちで灰褐色砂質土を主体とする土層が認められた。8層との境界が不明瞭な部分もあるが、下半部では鉄分の沈着が著しく、粗砂を若干含んでいるため、溝の可能性が高いと考えている。
(野崎貴博)

第3節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

2009年度の津島地区における立会調査は52件が実施された。2008年度も立会調査件数が多かったが、2009年度もほぼ同様の件数となった。昨年度に引き続き、耐震のための改修工事が多くなされたことが影響している。

工事掘削によって、中世層以下の包含層および特徴的な土層を確認した立会調査として、以下の9事業（立会件数で16件）がある。すなわち、一般教育D棟改修工事・高圧ケーブル〈調査番号6〉、環境整備（施設誘導案内板）新設工事〈14〉、工学部21号館（動物飼育室）改修工事・排水管〈17〉、南北道路信号機付け替え工事〈21～24〉、総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事〈25・27・29・30・32〉、文・法・経済学部旧ボイラー用煙突撤去工事〈42〉、総合研究棟（薬学系）改修工事・電気設備工事〈48〉、環境理工学部公共下水道接続工事〈54〉、薬学部西水道管位置確認工事〈55〉である。なお、南北道路信号機付け替え工事〈21～24〉については岡山県教育委員会、薬学部西水道管位置確認工事〈55〉については岡山市教育委員会が立会調査を実施したものである。

本節では、まず縄文・弥生時代包含層および中世以前の遺構を確認した調査について個別に報告する。その後に、その他の包含層等を確認した調査〈6・17・48〉について概述する。（光本 順）

2. 津島地区環境整備・施設等案内板新設工事（調査番号14、津島BB11区）

a. 調査地点の位置と経過

本調査は津島地区環境整備の一環として施設等案内板を津島キャンパス全体で17箇所設置する工事に伴うものである。1箇所につき0.7m×1.0m、深さ1.0mの掘削を行うもので、ほとんどは造成土・既設工事内、あるいは近世層までの掘削にとどまったが、保健管理センター北東に位置する地点（BB11区）では状況が異なるものであった。ここでは地表面以下1mまでの掘削で、造成土以下6枚の土層を確認した。

本地点は、弥生時代～古墳時代の集落域が確認されている第10次調査地点（保健管理センター）の北東端にあたる。また2008年度立会調査（一般教育講義棟ガス工事）〈総合番号182〉も隣接して実施している。

b. 調査成果（図9）

1層は旧陸軍による造成土、岡山大学設立以後の造成土および既設埋土を一括したものである。2層は灰色粘質土層で近代の耕作土と考えられる。①・②層は通常、津島岡大遺跡で認められる近世層ではなく、茶褐色～淡黒褐色系の土層であり、現状では3層（茶褐色砂質土）上面からの遺構の埋土である可能性が高い。掘削範囲はごく狭小なものであったため、遺構の規模・方向なども不明である。4層は淡黒褐色粘質土で、炭化物や焼土粒を混入する土層である。2008年度立会調査A地点と比較してみると、本地点の3・4層が、A地点の5・6層にほぼ対応すると考えられる。しかしA地点の3・4層に対応する土層は認められないことから、2層により上面が削平されていることが考えられる。

c. まとめ

本調査地点は、第10次調査地点の北東約12mの位置にあたり、第10次調査地点から北側に向かって次第に高まっていく微耕地上の地形にあたるものと考えられる。狭小な範囲ではあったが、遺構・遺物が存在する可能性を強

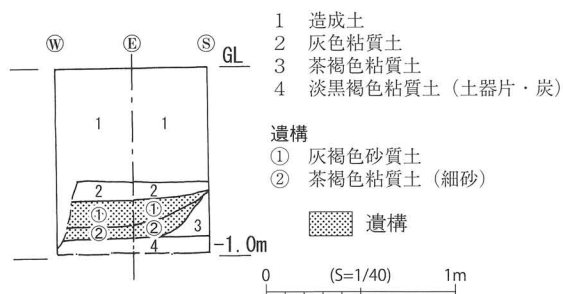


図9 土層断面図

く示唆する所見を得た。

3. 南北道路信号機付け替え工事（調査番号21～24、津島南BA～BB・BD12～13区）

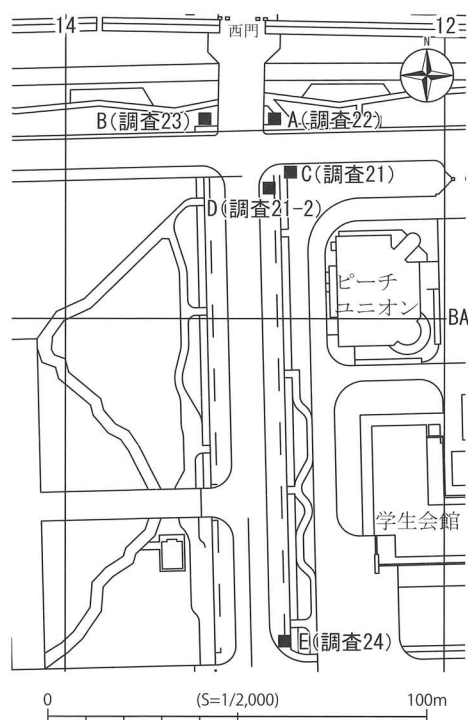


図10 調査地点の位置

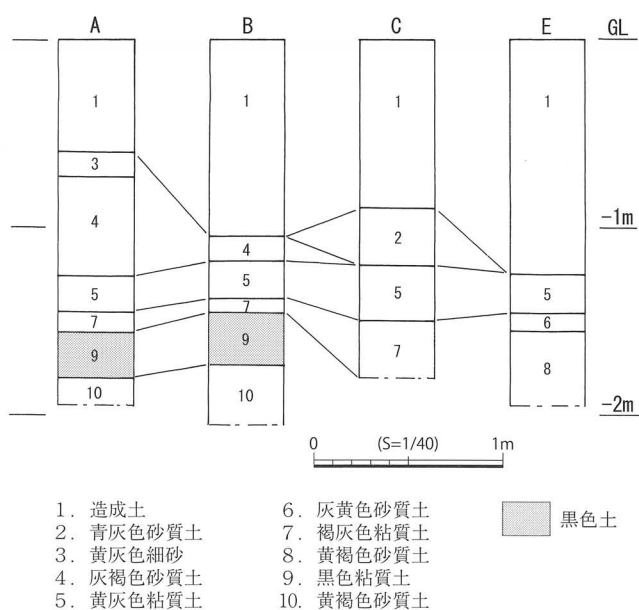


図11 土層断面図

a. 調査地点の位置と経過（図10）

岡山大学西門前交差点及び事務局前交差点で、信号機の置換が計画された。岡山県教育庁文化財課職員による立会調査に、本センター職員も立ち会った。調査は2009年8月25～27日に実施した。成果データは、同文化財課より提供されたものを掲載している。

西門前交差点ではA～Dの4地点、事務局では交差点北西の1箇所（E地点）の工事に立ち会った。

b. 調査成果（図11）

西門前交差点において、A・B・C地点はGL-200cm、D地点ではGL-120cmまで掘削した。県道北側にあたるA・B地点では造成土以下、近世～中世水田層（第3～5層）、古墳時代～古代の包含層（第7層）を確認したほか、GL-145cmで縄文時代晩期～弥生時代前期の水田層と考えられる黒色粘質土（第9層）が認められた。県道南東側のC地点では造成土下で中世水田層（第5層）、古墳時代～古代の包含層（第7層）、GL-180cmで弥生時代の可能性のある遺構上面を確認した。

D地点では掘削が造成土内に収まった。

事務局前交差点北東側のE地点ではGL-195cmまで掘削し、

GL-155cm以下で弥生時代中期以前の溝の可能性のある黄褐色砂質土（第8層）の堆積状況を確認した。なお、いずれの層でも遺物はみつからなかった。

c. まとめ

西門前交差点ではC地点の南東側に第14次調査地点が位置している。北西のA・B地点に向かって下がっていく中で、起伏があることが予想される。一方E地点付近は、これまでのデータが少ない地点で、貴重な情報を得ることができた。（岩崎）

4. 総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事（調査番号25・27・29・30・32、津島北AY～AZ02～03区他）

a. 調査地点の位置と経過（図12）

総合研究棟（教育系）の改修工事に伴い、同棟周辺の配管等の掘削工事が実施された。改修建物は美術工芸及養護教諭棟とその東隣りの音楽棟である。美術工芸及養護教諭棟北側にあたる動物室西側（以下、動物室西地点と呼称）においては、2008年度に立会調査を行っており、GL-0.80mという浅い深度において弥生時代早期～前期の「黒色土」層とその上面に畦畔を確認していた¹⁾。動物室西地点の位置は、今回報告する美術工芸及養護教諭棟東半の機械設備工事地点（調査番号31）に近い。したがって、2009年度の立会調査においても、同様の包含層等が確認されることが予想された。

工事は、美術工芸及養護教諭棟西半（25～29）と、同棟東半・音楽棟（30～32）という二区分において遂行されたものである。掘削件数が多かった点、および現地表から包含層までの造成土厚が約0.45mしかなかったことから、包含層を確認した地点が多くみられた。

中世層以下の包含層を確認した地点は以下の通りである。美術工芸及養護教諭棟西半については、ガス管（25）電気設備工事（27）、屋外排水（29）があり、同棟東半・音楽棟については屋外排水（30）、電気設備（32）がある。2つの工事区分ごとに、その調査成果について以下で概述する。

b. 調査成果

(1) 美術工芸及養護教諭棟西半（図13）

建物北側の調査が主体となったが、南側でも西半においても包含層を確認した。建物南側については電気設備工事（27）の関連で、建物から南へ約9m離れた新設基礎用の枠において、現地表から1.3mを掘削まで掘削した。その結果底面で「黒色土」層の上層にあたる弥生時代前期層（以下の層序の6層に対応）を確認した。建物南側については、明確な遺構を確認していない。

建物北側については、以下のような層序と遺構を確認した。なお、遺物がほとんどみつかっていないため、基

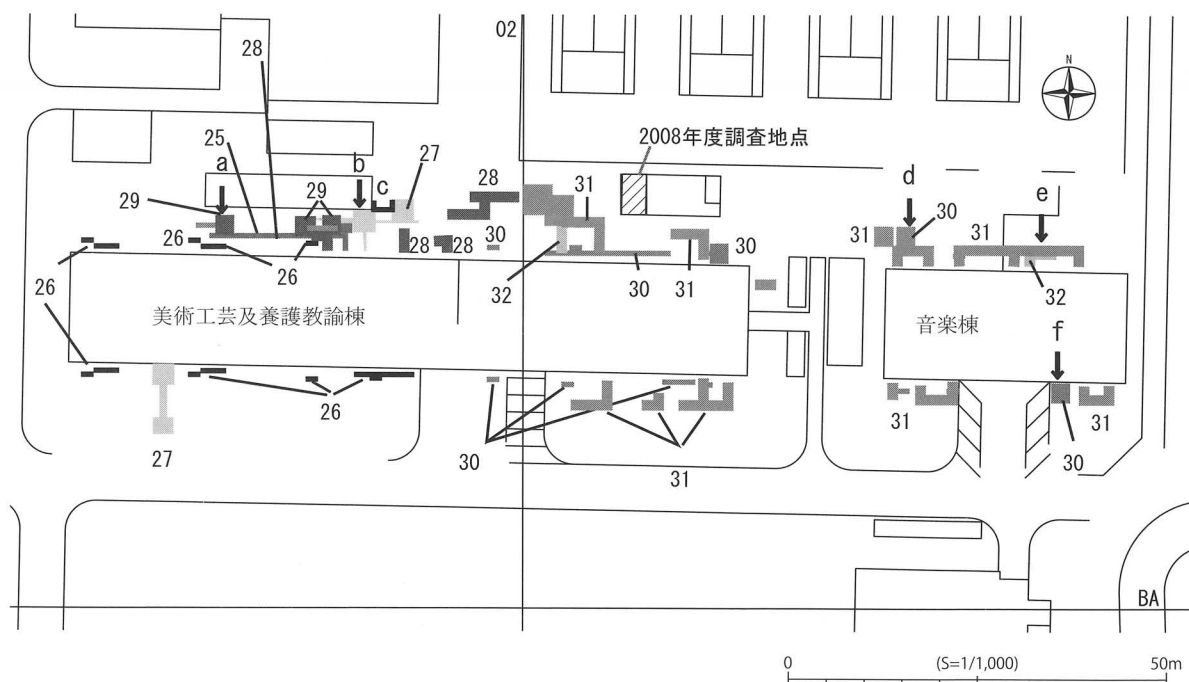
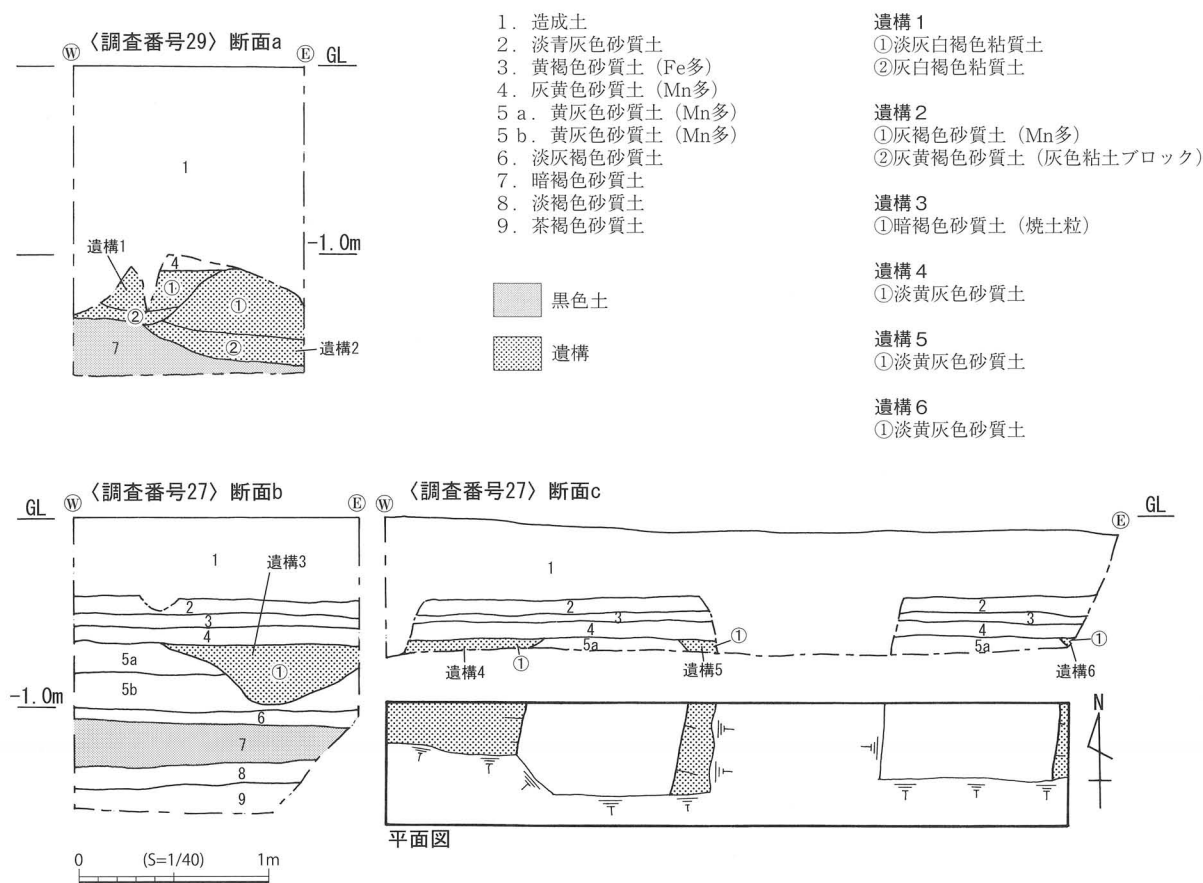


図12 調査地点の位置



本土層および遺構の時期については、層の順序および動物室西地点等を参照した。

【層序】 断面図としては包含層の状況がわかる電気設備工事〈27〉、屋外排水〈29〉を挙げた。基本層序としては電気設備工事の成果をもとに叙述する。なお、ガス管〈25〉についても、現地表から0.75mを掘削し、電気設備工事でみられた2～5 a層までの包含層を確認した。

1層：造成土。

2層：淡青灰色砂質土で、近代耕作土に該当する。

3層：黄褐色砂質土で、鉄分が多く沈着する。近世耕作土と考えられる。

4層：灰黄色砂質土で、マンガンが多く含まれる。近世ないしは中世層と考えられる。

5層：5 a層と5 b層に細分した。色調はいずれも黄灰色砂質土であり、ともにマンガンを多く含むが、マンガンの含有が5 a層の方が5 b層よりも多い。5 a層上面では、遺構を確認している。5層については、層の順序と層の厚さ、マンガンの含有状況から、動物室西地点における古代後半～中世層（9～12層）に相当するものと考えられる。なお同地点における古代後半～中世層は、「居住活動などの人為的な攪拌によって形成された堆積層」（22頁）と位置づけられている。本調査地点での土層観察では、マンガンの含み方から耕作土の可能性も考えられるが、層の厚さからみると同様の解釈も可能と考えられる。

6層：淡灰褐色砂質土、弥生時代早期～前期の「黒色土」層の上層にあたる。色調は次の7層を淡くした感がある。弥生時代前期と考えられる。

7層：暗褐色砂質土で、弥生時代早期～前期の「黒色土」層に対応する。

8層：淡褐色砂質土で、6・7層と土質が類似する。

9層：茶褐色砂質土で、縄文時代の基盤層と考えられる。

【遺構】 美術工芸及養護教諭棟西半のうち、建物北側において6基以上の遺構を確認した。いずれも5層上面から形成されたものである。遺構1・2は屋外排水〈29〉、3～5は電気設備工事〈27〉でみつかったものである。遺構1：5層上面にあたる面から構築されている。断面形は逆台形を呈するものと考えられる。埋土は1層が淡灰白褐色粘質土で2層が灰白褐色粘質土となる。中世段階の溝と考えられるが、その延びについては反対面が攪乱であったため不明である。

遺構2：遺構1に切られる形となる。基本土層の5a・5b層に対応する可能性も残るが、溝状の断面形状をなすことから、遺構と判断した。5層上面から形成されたものと考えられる。埋土は1層が灰褐色砂質土でマンガンを多く含み、2層が灰黄褐色砂質土で灰色粘土ブロックを多く含む。

遺構3：電気設備工事〈27〉の柵の北壁で確認した。5層上面から形成されている。幅は現状で1.05m、深さ0.31mを測る。断面形状は逆凸形に近い。埋土は暗褐色砂質土で、1cm大の焼土粒を含む。形状から溝の可能性が考えられる。なお、すべて遺構と確定しうるかわからないものの。同様の土質でかつ焼土を含む埋土を、本遺構付近に3箇所確認した。

遺構4～6：3つの遺構は電気設備工事〈27〉の管路部分で確認した。検出面は5層上面である。いずれも南北方向にのびる溝と考えられ、埋土は淡黄灰色砂質土である。

(2) 美術工芸及養護教諭棟東半・音楽棟 (図14)

音楽棟北側と南側とで包含層の堆積状況に差がみられた。屋外排水〈30〉では、音楽棟の北側(北地点)・南側(南地点)にそれぞれ新設樹設置のための掘削がなされたが、前者においては前述の美術工芸及養護教諭棟西半と同様に「黒色土」層を確認したのに対し、後者では時期比定が難しいものの河道堆積が認められた。後者については、河道堆積の時期が弥生時代にまで遡らない可能性もあるため、「黒色土」層が存在しないことをただちに意味するものではない。

以下では、音楽棟北側と南側に分けて、調査概要を叙述する。なお両地点とも遺構・遺物はみつかっていない。

〈音楽棟北側〉 調査番号30断面d・32断面e

【層序】

1層：既設工事による埋土である。

2層：2a層と2b層に分かれる。2a層は淡灰色砂質土で、美術工芸及養護教諭棟西半の5a層に対応するも

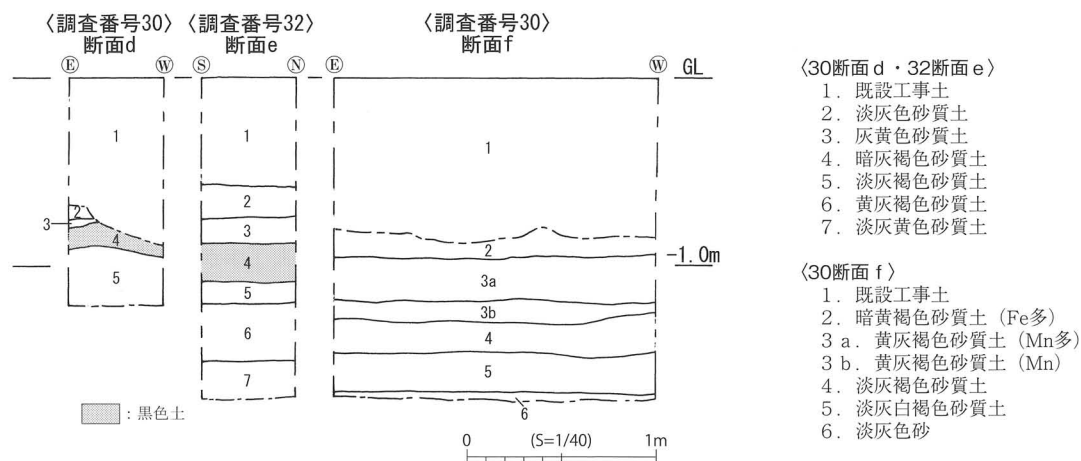


図14 土層断面図

のと考えられる。2 b層は灰黄色砂質土で、同西半5 b層に対応するものと考えられる。

3層：暗灰褐色砂質土で、「黒色土」層に該当する。美術工芸及養護教諭棟西半の7層に対応する。

4層：淡灰褐色砂質土で、美術工芸及養護教諭棟西半の8層に対応する。「黒色土」層に関連する土層。

5層：黄灰褐色砂質土で、美術工芸及養護教諭棟西半の9層に対応する。縄文時代の基盤層と考えられる。

6層：淡灰黄色砂質土である。縄文時代層と考えられる。

〈音楽棟南側〉調査番号30断面 f

【層序】

1層：既設工事による埋土である。

2層：暗黄褐色砂質土で鉄分を多く含む。津島岡大遺跡における近世耕作土の可能性はある。

3層：黄灰褐色砂質土である。土質から3 a層と3 b層に区分した。3 a層の方が3 b層よりもマンガンを多く含む。こうした3層が、美術工芸及養護教諭棟西半の5層に対応するかどうかは判然としない。ここでは中世～近世の耕作土と捉えておきたい。

4層：淡灰褐色砂質土である。鉄分は含まれるがマンガンは明瞭でない。古代～中世の耕作土の可能性はある。

5層：淡灰白褐色砂質土で、土質としては4層に近い。古代～中世の耕作土の可能性はある。

6層：淡灰色砂層である。河道堆積層と考えられる。時期を特定することは困難である。

c. まとめ

2008年度の動物室西地点の調査に引き続き本調査によって、これまで実態がよくわからなかった教育学部周辺における遺跡の様相が明らかとなってきた。包含層の堆積状況からみると、音楽棟南側を除けば、美術工芸及養護教諭棟一帯には縄文時代以来の微高地と「黒色土」層が広がっていたものと推定される。また、動物室西地点において特徴的に認められた古代後半～中世層も、音楽棟南側地点以外については確認され、遺構として認識される掘り込みも認められた。近辺において古代後半～中世段階における集落域の存在を示唆するものと考えられる。一方、音楽棟南側地点の包含層の様相は、河道堆積だけでなく、それより上位の層についても他とは異なるものと考えられる。このことは、縄文時代以来の旧地形の南端が、音楽棟南側地点付近にあたることを示唆するものといえるかもしれない。

(光本)

註

- 1) 池田 晋2010「教育学部体育館他耐震改修工事（動物室）」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』pp.20-23
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

5. 文・法・経済学部旧ボイラー用煙突撤去工事（調査番号42、津島北AX16区）

a. 調査地点の位置と経過（図15）

津島北地区の西端付近に所在する、文・法・経済学部旧ボイラー用煙突の撤去工事が2009年度に実施されることとなった。この煙突は、地下構造として5 m四方・深さ2.5mのコンクリート基礎を有するものであり、今回の工事ではその基礎部分についても撤去を行うこととなった。撤去に際しては、7.4×6.2mの範囲を基礎底面まで掘削する必要性が生じたため、掘削範囲の四周壁面部分を中心に、包含層まで掘削が及ぶことが予想された。そのため、立会調査を実施することとなった。撤去に伴う立会調査は2009年11月4・9日に実施した。

b. 調査成果

煙突基礎撤去に伴い、GL-2.5mまで基礎周囲を掘削した結果、北・西・東壁面付近において近代～縄文時代

までの包含層を確認した。包含層の残存範囲は四周の壁から約0.4m幅であり、それよりも内側については基礎およびその掘り形埋土であった。ただし、西壁については、地表から-1.95m付近まで攪乱が及んでいた。南壁については、基礎南辺が露出する程度の範囲の掘削であったため、包含層への掘削は及ばなかった。

壁面調査の結果、以下のような包含層および遺構を確認した。

【層序】(図16) 以下、調査区内でもっとも包含層が良好に残存していた東壁の調査成果をもとに、層序について概説する。なお、出土遺物がみられなかったため、層の帰属時期については津島地区における既往の調査成果をもとに推定したものである。

- 1層：造成土。
- 2層：青灰色粘質土で、近代耕作土と考えられる。
- 3層：黄褐色砂質土で、鉄分を多く含む。近世層と考えられる。
- 4層：灰黄褐色砂質土で、鉄分・マンガンを含む。中世～近世層と考えられる。
- 5層：4層に類似した灰黄褐色砂質土であるが、4層よりもマンガンを多く含む。中世～近世層と考えられる。
- 6層：灰白色粘質土でマンガンを多く含む。古代～中世層と考えられる。
- 7層：6層に類似する灰白色粘質土であるが、6層よりもマンガンが少ない。古代～中世層と考えられる。

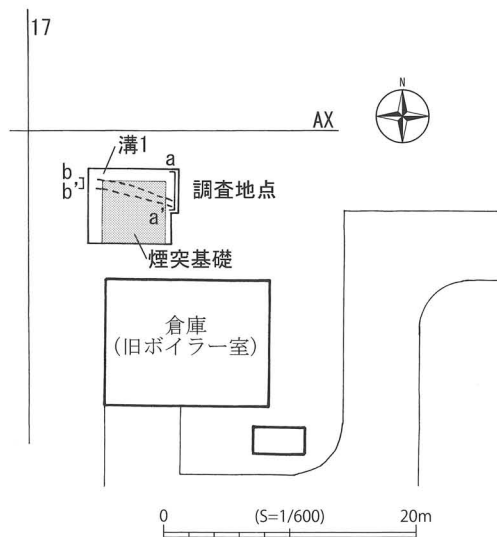


図15 調査地点の位置

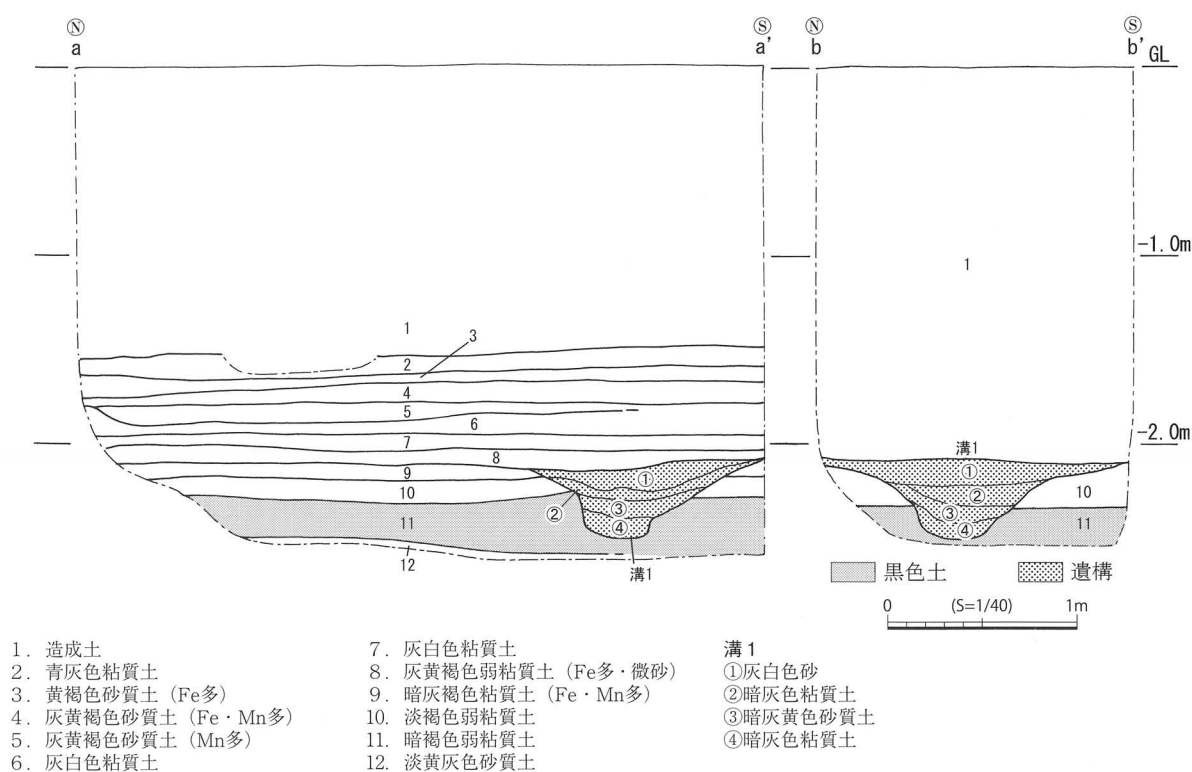


図16 土層断面図

8層：灰黄褐色弱粘質土で、鉄分を多く含み、微砂を含む。弥生時代後期～古墳時代と考えられる。

9層：暗灰褐色粘質土で、鉄分・マンガンを多く含む。また10層をブロック状に含む。東壁でみると、本層上面レベルは後述する溝1より南方が高くなる。この傾向は、以下の10層～11層でも同様といえる。弥生時代中期～後期と考えられる。

10層：淡褐色弱粘質土で、マンガンを多く含む。津島岡大遺跡における「黒色土」層の上層に対応するもので、弥生時代前期と考えられる。

11層：暗褐色弱粘質土で、鉄分・マンガンを含む。津島岡大遺跡における「黒色土」層に対応するもので、弥生時代早期～前期と考えられる。

12層：淡黄灰色砂質土である。縄文時代後期と考えられる。

【地形】（図16） 以上の東壁における土層観察から考えると、9～11層段階までの旧地形は、南がやや高く、北へ向かって落ちる形状を呈していたものと考えられる。したがって、弥生時代早期～中・後期段階には、南側に微高地状の土地が形成されていたものと考えられる。そして8層段階において、地形がいったん水平化する傾向が窺え、以後に継続するものと考えられる。

【遺構】（図16） 溝1：東西両壁面において、9層上面から掘り込まれるかたちで溝1条を確認した。両壁面において確認した溝は、検出面・規模・形状・埋土ともに類似するものであり、同一遺構と考えられる。溝1の位置は、東壁で調査区の南寄り、西壁で北寄りとなっており、北西－南東方向に伸びる溝と考えられる。9層が北から南へ落ちる変換点に本溝が構築されたものと考えられる。東壁では、幅1.25m、深さ0.42mを測り、底面レベルがGL-2.42mとなる。西壁では、幅1.57m、深さ0.42m、底面レベルがGL-2.40mとなる。両壁面の底面レベルは、ほぼ同一となる。溝の断面形は逆凸形であり、下半については北側面の方が南側面よりも段差が大きい傾向が読み取れる。

埋土は4層に区分した。1層は灰白色砂層で、鉄分および白色微細を多く含む。こうした砂層は基本土層にはみられず、本溝の上層としてのみ存在する。基本土層8層形成段階で溝上部が削平された可能性もある一方で、1層は最終的に溝が自然に埋没する過程で生じた可能性も高いものと考えられる。2層は暗灰色粘質土である。3層は暗灰黄色砂質土で灰黄色砂質土ブロックを多く含む。4層は暗灰色粘質土で、灰色粘土ブロックおよびブロック状となった基本土層11層を含む。このように、本溝は砂層/砂質土と粘質土が互層となる傾向が窺える。

東西で溝の底面レベルが現状のデータにおいてほぼ同一となるものの、逆凸形の形状や埋土の特徴から、本溝の機能としては水路としての性格を想定することが妥当と考えられる。

溝埋土から遺物が出土していないことと、9層の時期が定かでないことから、溝の時期について絞り込むことは困難であるが、およそ弥生時代中期～後期に埋没したものと考えられる。

c. まとめ

溝については、津島岡大遺跡において、弥生時代中・後期にかけて微高地縁辺に溝がめぐる状況が明らかにされてきた。今回確認した溝1もまた、地形との関係からみても、同様の性格を考えることが可能である。西壁の状況が攪乱によりわからない部分が多いものの、溝が北西－南東方向にのびることから考えると、弥生時代中・後期以前の微高地の平面形状もまた、およそ北西－南東方向に微高地北辺ラインがのびるものと推定される。

（光本）

6. 環境理工学部公共下水道接続工事（調査番号54、津島北AU03区）

a. 調査地点の位置と経過（図17）

本調査は、津島北地区の北東部に位置する環境理工学部棟の北側に計画された、公共下水道の接続工事に伴うものである。津島地区の東北隅は遺跡保護区として管理しており、当初計画は保護区内の北西端を縦断するものであった。また、掘削深度も最深部で道路面から2.3mと大きかったため、設計変更の協議を行った。その結果、保護区への干渉を最小限にとどめるため、新設桝2箇所を保護区外西側に移し、管路についても迂回させることとなった。

本調査地点の南側約50mでは、第9次調査（工学部生物機能工学科棟）、第17・22次調査（環境理工学部棟）を実施している。2箇所の新設桝は1.8m四方で、深さが北側のもので道路面から2.3m、南側で2.4mの掘削である。管路部分は幅1.0mで、深さが1.7～2.0m。調査期間は、2010年3月16・17日である。

b. 調査成果

【層序】（図18）断面を記載する地点の位置関係を図17に示す。本調査地点では、「黒色土」層までの、大きく17枚の層の堆積を確認した（図18上）。なお、出土遺物は皆無であったため、以下に記載する各層の帰属時期は周辺の調査成果との対比によって求めたものである。

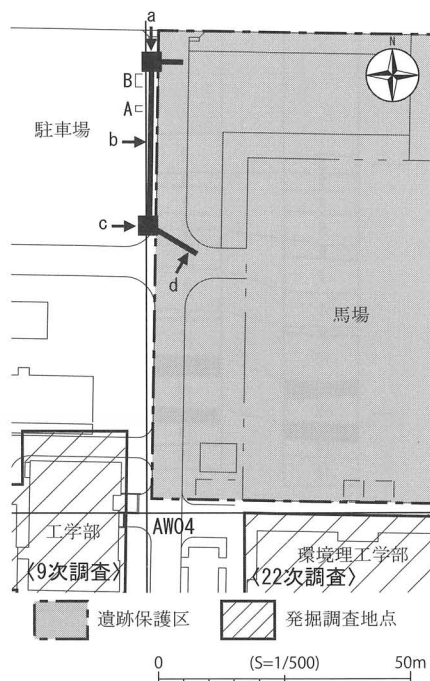


図17 調査地点の位置

1層は、旧陸軍による造成土および岡山大学設立以後の造成土を一括したものである。2層は明灰色砂質土で、近代の耕作土である。地点によってグライ化により暗灰色を呈している。3層は明灰黄褐色砂質土、4層は暗灰黄褐色砂質土、5層は淡灰黄褐色砂質土で、いずれも近世の耕作土である。鉄分・マンガンの集積・攪拌の度合いによって分層される。6層は淡灰黄色土、7層は明灰色粘質土で、いずれも中世の耕作土とみられる。8層は灰色粘質土で、上下層と比べ粒径が小さい堆積物からなり、粘性もつよい。古代の耕作土である。9層は白灰色砂（細砂～極細砂）で、氾濫堆積物とみられる。層厚3cm程度と薄いため、地点によっては攪拌によって粘質土化しており、上下層との区分が困難であった。堆積時期は、古墳時代後期から古代前半までが考えられる。10層は灰褐色粘質土で、古墳時代の耕作土とみられる。上層ほど漸移的に色調が明るくなり、耕作活動の影響により還元化が進んだものとみられる。11層は暗灰色粘質土で、いわゆる暗色帯として認識される、12層を母材とする微弱な土壌化層である。白灰色砂のブロックをまばらに含む。弥生時代後期に相当するとみられる。12層は灰色粘質土で、攪拌を受けているとみられることから耕作土の可能性はある。13層は暗灰色粘質土で、やはり暗色帯として認識される微弱な土壌化層である。11層と同様に、白灰色砂のブロックを含む。形成時期は弥生時代中期が考えられる。14層は北側で淡灰色粘質土、南側では砂質がつよくなり橙褐色砂質土となる。鉄分の沈着が著しく、淡褐色砂ブロックを少量含むことから、攪拌・土壌化の影響を多少とも受けているとみられ、13層の漸移層として位置づけられる。15層は北側で褐色砂質土、南側では淘汰の悪い淡褐色砂（粗砂～中砂）である。ラミナは観察されず、北側ではより耕作土化しているとみられるものの、本来は氾濫堆積物と考えられる。弥生時代中期か。16層以下は南側の桝（c地点）のみで確認した。16層は暗灰色粘質土である。耕作活動によって17層が還元化・攪拌を受けて形成された層とみられ、弥生時代前期の耕作土層と考えられる。17層は黒灰色粘質土で、「黒色土」と通称している、鍵層となる安定した土壌化層である。層上面において乾痕が観察された。形成時期は弥

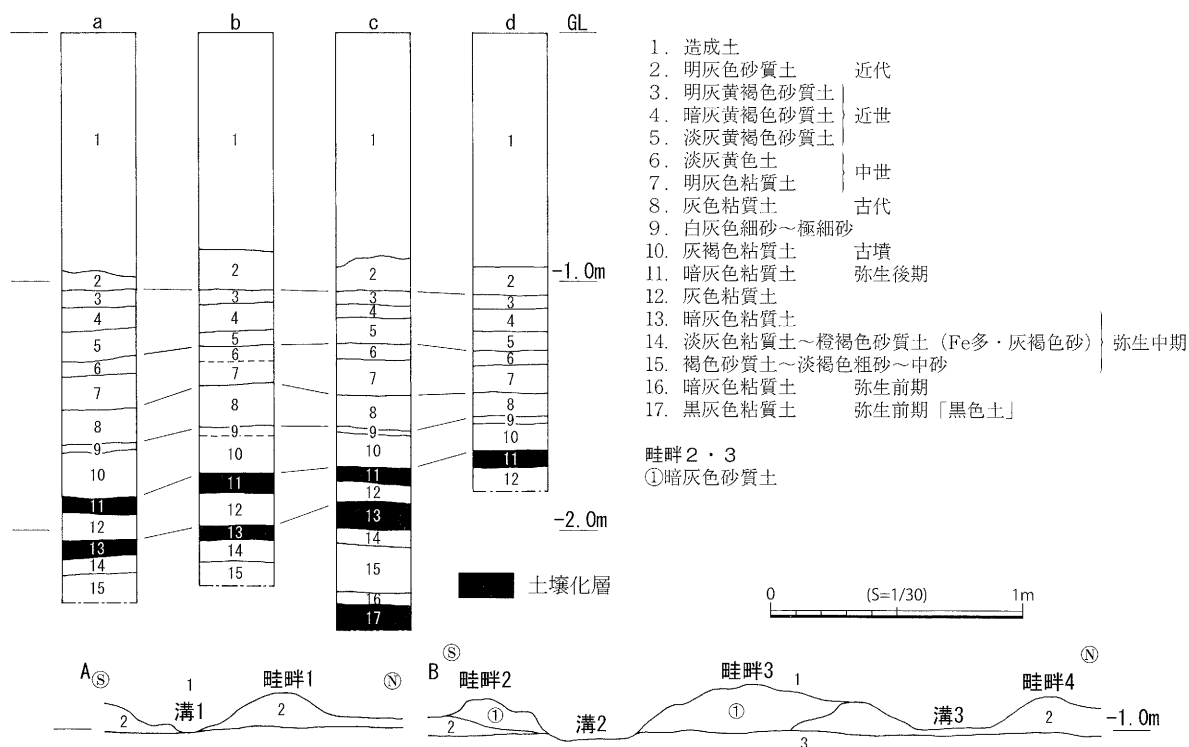


図18 土層断面図

生時代早期から前期と考えられる。

【地形】 既往の調査成果から、第17・22次調査地点を中心に縄文時代以来の安定した微高地が存在し、その北側には第6・9次調査地点で確認された谷が展開することが判明している。本調査地点での「黒色土」層の観察は1地点のみに限られたものの、11層・13層の2枚の土壌化層は縄文時代以降の旧地形をある程度反映している可能性が高い。いずれの土壌化層も北に向かうほど緩やかに標高が低くなっており、本調査地点は、谷を挟んだ北側に位置する微高地がさらに北に向かって緩やかに下がっていく地点にあたるとみられる。また、第17・22次調査地点の微高地の南側には縄文後期の河道が南西に流下していることがわかっており、もう少し大局的にみれば、本調査地点一帯は第17・22次調査地点を中心とする自然堤防の北側に展開する後背湿地にあたる可能性が高い。本調査地点周辺の微地形が旭川の支流による沖積作用の影響を多分に受けているのは間違いないにしても、一方では半田山の谷から伸びてくる扇状地の影響も一定の考慮が必要となる地点である。

【遺構】 (図18下) 図17のA地点・B地点において、畦畔4条と溝3条を確認した (図18下)。2層上面で確認したもので、1層によって埋没している。畦畔1と溝1、畦畔2・3・4と溝2・3はそれぞれセットとなる遺構である。図化した西壁と反対の位置の壁面においても遺構の存在を確認したため、いずれも東西方向の遺構である。畦畔1と畦畔3の芯々距離は5.5mを測る。条里との関係を検討したが、いずれも1町・半町のラインには関係しない。

c. まとめ

本調査地点周辺ではすでに部分的な試掘調査を実施してきているが、今回の調査は結果として遺跡北東端でトレンチ調査を実施したような格好となり、地形の変化を連続的に観察できた点は有意義であったといえよう。

(池田)

7. 薬学部西水道管位置確認工事（調査番号55、津島南BC18区）

a. 調査地点の位置と経過（図19）

2010年3月、岡山大学津島南地区の薬学部西側において、岡山市が管理する水道管の位置確認のための掘削が必要となった。岡山市水道局が原因者となるため、掘削に伴う立会調査は岡山市教育委員会が実施し、本センター職員は調査時に立ち会うこととなった。

調査は3月23日に実施された。調査地点は2010年度に予定されている薬学部新校舎建設地点に隣接している。掘削の規模は、平面形が上端で約1×1.5m、深さは現地表面から約1.9mであり、縄文時代の基盤層と考えられる黄褐色土層まで掘削がおよんだ。なお、本報告に記載した柱状図および土層註記は岡山市教育委員会より提供を受けたものである。

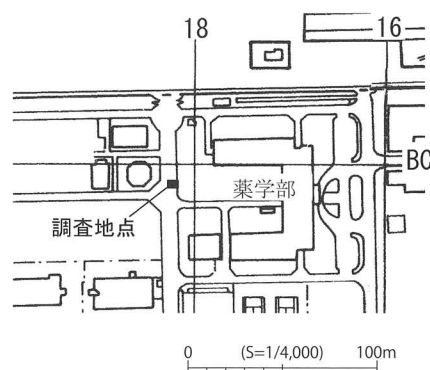


図19 調査地点の位置

b. 層序（図20）

以下では岡山市教育委員会提供の資料をもとに、見学時の所見を加えて土層の堆積状況を記す。1層は近代以降の造成土、2層は暗灰色粘土で近代の耕作土である。3・4層の砂層は近世の耕作土、5・6層の粘土は古代・中世の耕作土とみられる。7層は明橙色を呈する鉄分の沈着層、8層は津島地区で「黒色土」層と呼称する暗褐色土で、上面が弥生時代前期にあたると考えられる。9層は黄褐色粘質土で縄文時代の基盤層とみられる。2～6層までは、周辺の既往の発掘・立会調査で確認されていた土層に類似し、耕作地の広がりを示すものであった。

（野崎）

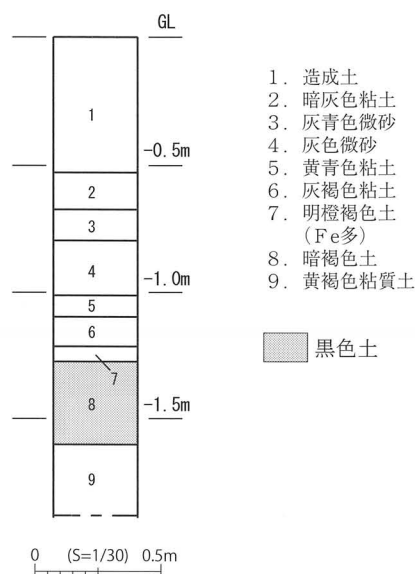


図20 土層断面図

8. その他の調査地点（図21）

上述した以外で、中世以前の包含層、および特徴的な土層を確認した立会調査地点として、総合教育棟Ⅲ期（共通教育）改修工事・高圧ケーブル〈調査番号6〉、工学部21号館（動物飼育室）改修工事・排水管〈17〉、総合研究棟（薬学系）改修工事・電気設備工事〈48〉を挙げうる。ここでは、包含層の堆積がよく観察した後二者について柱状図を示した。

津島北地区の工学部21号館（動物飼育室）改修工事・排水管〈17〉においては、造成

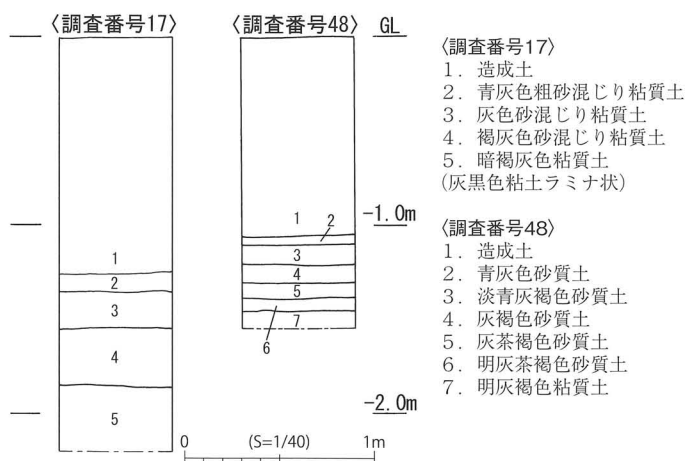


図21 土層断面図

土より下位の層がいずれも河道埋土と考えられる粗砂～細砂混じりの層を確認した。時期については出土遺物が見られないため定かでないが、層序から近世以前のものと推定される。

総合研究棟（薬学系）改修工事・電気設備工事〈48〉では、アース板設置に伴い、北側3箇所でGL-1.5mほどの掘削がなされた。結果、中世層と考えられる明灰褐色粘質土（7層）を確認した。

なお、総合教育棟Ⅲ期（共通教育）改修工事・高圧ケーブル〈6〉では、桝部分においてGL-1.3m掘削し、底面付近において中世層を確認している。(光本)

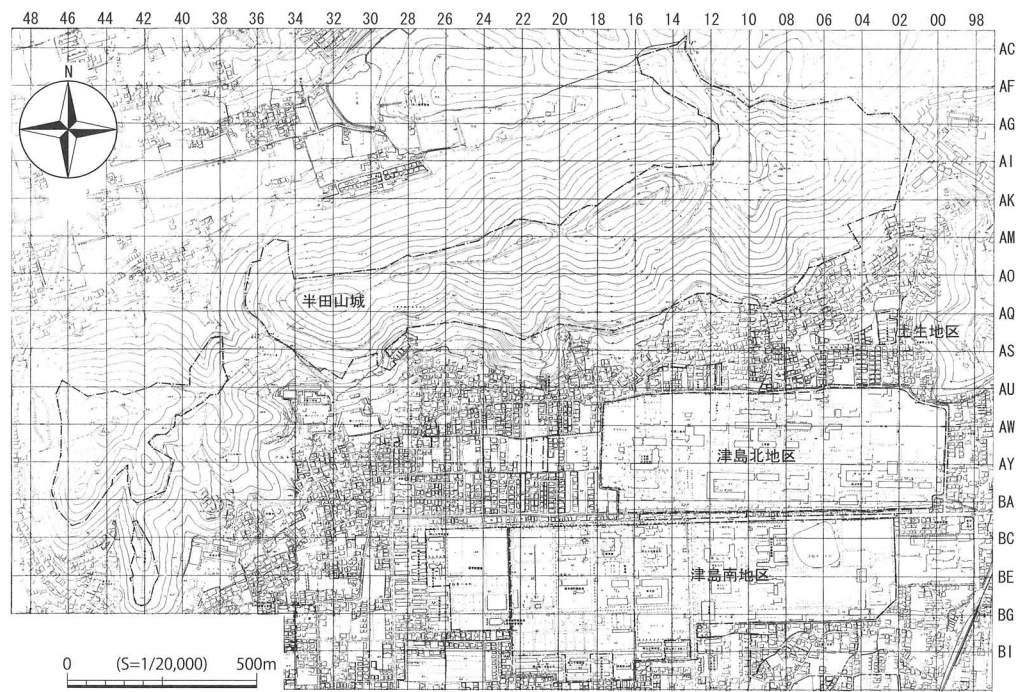


図22 津島地区全体図

表1 2009年度津島地区調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	細目調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内 容
1	発掘	津島北	AX02	教	教育学部剣道場新営【津島岡大遺跡第32次発掘調査】		7.16～10.13	4.6	縄文時代後期～近代の遺構・遺物。縄文時代後期貯蔵穴。
2	試掘・確認	津島北	AV14	事	学童保育室新営予定地		4.9	3.24	縄文層まで確認。
3	試掘・確認	津島南	BF20	農	農学部構内植物工場新営予定地		8.6	北西3.28。南東2.33。	縄文層まで確認。溝・畦畔確認。
4	立会	津島南	BE-BF20	般	総合教育棟Ⅲ期（共通教育）改修工事	仮設電柱	4.27	1.2～1.3	3箇所、既設・造成土内。
5	立会		BE09-08			耐震補強基礎	5.15	0.8	
6	立会		BE-BF04～08			高圧ケーブル	6.10・18・19	管路0.7～0.8、桝1.3	管路：既設・造成土内。桝2箇所：中世層および近世層まで。
7	立会		BD08・BD09・BE08・BE09			外灯	7.27・28	1.15・1.2	既設土内、および近代層まで掘削。
8	立会		BE09			受水槽（配管・桝）	6.29	1.2～1.3	桝3箇所：既設・造成土内。
9	立会		BE08			配管	10.19・21・22	0.6～1.0	既設土内
10	立会		BE09			植栽	11.5	0.5	造成土内

第3節 立会調査の概要

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	細目調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内 容
11	立会	津島北	AV15	事	学童保育室新営	樹木抜根	5.11	0.4～0.5	造成土内
12	立会		AV14			給水管	5.11	0.5～0.75	造成土内
13	立会		AU14			仮設電柱	5.19	0.9	造成土内
14	立会	津島	AX10・AY12・AZ13・BA12・BB10・BB08・BB11・BC13・BB16・BC11・BD07・BD10・BD11・BD13・BD16・BD18・BF13	事	環境整備（施設誘導案内板）新設工事		7.1～3・6・7	0.8～0.95	造成土内、一部近代層確認。保健管理センター付近で弥生？遺構埋土確認。
15	立会	津島北	AU-AX03	教	津島岡大遺跡第32次調査に伴う仮設電柱		7.13	1.0	造成土内
16	立会	津島北	AU06	工	工学部21号館（動物飼育室）改修工事	ガス管	7.21・22	0.8～0.9	既設土内、一部弥生？包含層確認。
17	立会		AU06・07			排水管	7.21～23	0.65～0.9、北東部2.2	既設・造成土内。北東部で河道埋土確認。
18	立会		AU06			スロープ	1.12	0.75	造成土内
19	立会		AU06・07			機械設備工事	2.18	0.65～1.2	造成土内
20	立会	津島南	BB08	校	一般教育A棟ヒューム管改修工事		8.10	0.7	既設土内
21①	立会	津島北・南	BB12	岡山県	南北道路信号機付け替え工事	西門南東	8.25	1.8	中世～弥生層まで掘削。底面で遺構埋土確認。
21②								1.2	造成土内
22	立会		BA12			西門北東	8.25	2.0	縄文層まで掘削。黒色土確認。
23	立会		BA13			西門北西	8.27	2.05	縄文層まで掘削。黒色土確認。
24	立会		BD12			事務局前北東	8.27	1.95	縄文層まで掘削。
25	立会	津島北	AY-AZ02-03	教	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修工事	ガス管（美術工芸及養護教諭棟西半）	7.23	0.8	弥生層確認。
26	立会		AZ02-03			基礎掘削（美術工芸及養護教諭棟西半）	8.25・26・9.3	0.87～1.10	8箇所。既設内。
27	立会		AY01・AZ03			電気設備（美術工芸及養護教諭棟西半）	10.1・2・5	アース埋設1.65、管路0.8、外灯0.8～1.3	アース埋設：縄文層まで掘削、黒色土・中世以前の遺構埋土確認。管路：弥生包含層・遺構埋土確認。外灯：黒色土まで掘削。
28	立会		AY-AZ02			機械設備（美術工芸及養護教諭棟西半）	10.6・8・9・13	0.6～0.75	既設土内～近代層まで掘削
29	立会		AY02-03			屋外排水（美術工芸及養護教諭棟西半）	10.14・15	1.15	黒色土・弥生遺構埋土確認
30	立会		AZ00-02			屋外排水（美術工芸及養護教諭棟東半・音楽棟）	11.9・12・13	管路0.8～0.9、樹1.2・1.7	管路：包含層・畦畔・小溝確認。北側樹：縄文層まで掘削、黒色土確認。南側樹：縄文層まで掘削、黒色土無し。
31	立会		AY-AZ00-01			機械設備（美術工芸及養護教諭棟東半・音楽棟）	11.20・24・25・27	0.3～1.15	既設土内、一部近世層まで掘削。
32	立会		AZ00・AY-AZ01			電気設備（美術工芸及養護教諭棟東半・音楽棟）	1.26・27	アース埋設1.7、管路0.8～0.9、外灯1.3	アース埋設：縄文層まで掘削、黒色土確認。管路：包含層・土師器小片確認。外灯：既設土内。
33	立会	津島南	BD13	岡山県	南北道路樹木移植		9.9・10	移植元0.95、移植先0.85～0.95	いずれも既設・造成土内
34	立会	津島北	AW05	工	工学部5号館スロープ工事		8.24	0.9	既設土内
35	立会	津島南	BD17	薬	薬学部プレハブ設置工事	電気工事	9.28	1.05～1.15	造成土内～近代層まで掘削
36	立会		BD16-17			給排水工事	9.29・10.1	0.6～0.8	造成土内
37	立会	津島北	AU11-12	事	福居宿舍改修工事	ガス管	9.30、1.27・28	0.7～0.9	既設・造成土内、一部近代層まで掘削。
38	立会		AT-AU11			接地極	12.21	0.8	造成土内
39	立会		AU11			電柱	12.21	2.4	既設土内
40	立会		AT-AU11			排水管	1.18～22・25	0.4～1.2	造成土内、一部近世層まで掘削。

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

番号	種類	調査 地区	構内座標	所属	調査名称	細目調査名称	調査期間	掘削深度 (GL-m)	内 容
41	立会	津島北	AW-AX16-17	文法経	文法経ボイラー用煙突撤去工事	樹木移植	10.2	0.6~0.8	造成土内
42	立会		AX16			煙突撤去	11.4・9	2.5	縄文層まで掘削、弥生中・後期溝1条確認。
43	立会	津島南	BD11-12	学	大学会館インバート構		11.16	0.75~0.92	既設土内
44	立会	津島南	BC16	薬	総合研究棟（薬学系）改修工事	樹木	12.3	0.3	造成土内
45	立会		BC-BD16-17			屋外基礎	12.8・11・18	0.85~1.0	既設土内、一部近代層まで掘削。
46	立会		BC17			給排水	12.16	0.7	造成土内
47	立会		BC17			ガス管	2.22	0.5~0.9	造成土内、一部近代層まで掘削。
48	立会		BB16・BC17			電気設備	3.1・5	管路1.45、アース板1.50~1.54	管路：近世層・近代溝確認。アース板：包含層（中世？）確認。
49	立会		BC17			機械設備	3.1・10	0.65~0.8	既設・造成土内
50	立会		BC16-17			排水管・樹	3.8・10・11・15	0.7~1.4	既設土内、柵の一部で近世・近代層確認。
51	立会	津島南	BB16	薬	薬学部防犯カメラ支柱設置工事		12.17	0.9	造成土内
52	立会	津島北	AY99	NTT	馬術部BOX東電話柱設置工事		2.16	1.45	包含層確認
53	立会	津島北	AX-AY13	事	津島基幹整備（施設誘導案内板）新設工事	樹木	3.1	0.8~0.9	造成土内
54	立会	津島北	AU03	環	環境理工学部公共下水道接続工事		3.16・17	1.7~2.4	黒色土上面まで掘削。近代の畦畔4条と溝3条を確認。
55	立会	津島南	BC18	岡山市	薬学部西水道管位置確認工事		3.23	2.7	岡山市教育委員会文化課対応。縄文層まで掘削、黒色土確認。

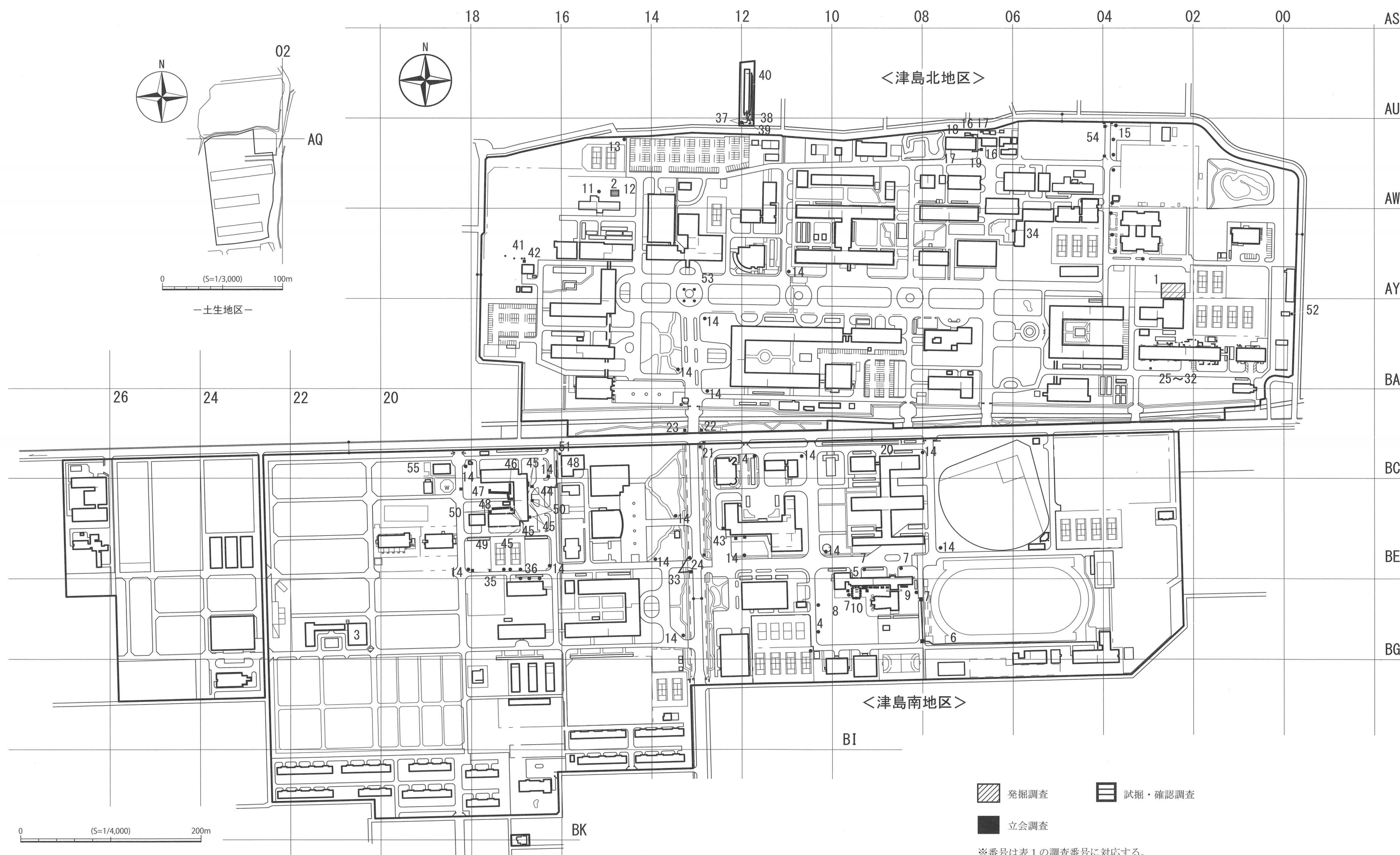


図23 2009年度の調査地点【1】—津島地区—

第4節 津島岡大遺跡の研究

1. 津島岡大遺跡から出土したマメ圧痕土器の付着炭化物の分析

工藤 雄一郎（国立歴史民俗博物館）

a. はじめに

津島岡大遺跡の第5次調査で見つかった縄文時代後期の河道（阿部編、1994）から出土した土器片の外面に、マメ科種子の圧痕（ワクド石タイプ）が観察された。縄文時代の植物利用を考えるうえで重要な資料であるが、文様等の型式学的特徴がない無文の胴部の破片であるため、所属時期が不明瞭であった。この土器の内面には炭化物が付着していたため、筆者は、この付着物を用いて¹⁴C年代測定を実施することにした。また、土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比とC/N比の分析をあわせておこない、この土器で煮炊きした内容物についても検討を行った。

b. 分析試料と分析方法

1) 分析試料

分析した土器は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターにて保管されていた津島岡大遺跡出土の縄文土器の胴部破片である。この土器片は第5次調査の際に縄文時代後期の河道である、第27b層（砂礫層）から出土した資料である。第27b層からは縄文時代後期中葉とされる土器が出土している（阿部編、1994）。また、同じ河道内からは、縄文時代後期中葉と推定される貯蔵穴と晩期と推定される貯蔵穴が見つかった。後期の貯蔵穴群からは、アラカシやコナラなどの果実が出土している。

採取した土器付着物には、津島岡大遺跡からTO-1という試料名をつけ、試料番号とした。土器内面には炭化物がかさぶた状に付着していたことから、炭化物は何らかの有機物を煮炊きしたときにできた、「お焦げ」であると考えられる（図24）。この付着炭化物を、金属製スパーテルを使って土器表面から削り落とし、分析試料とした。

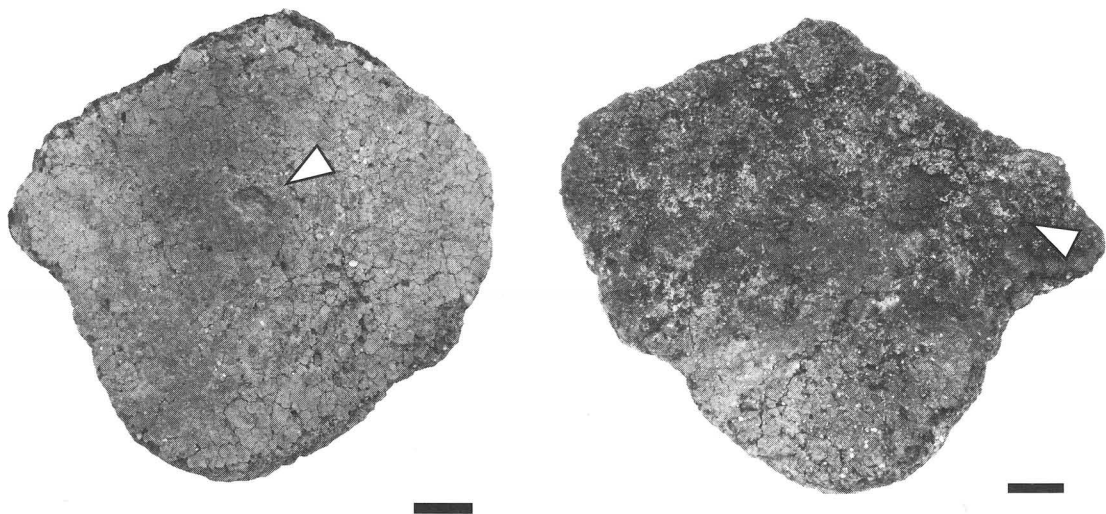


図24 津島岡大遺跡から出土したマメ科種子圧痕土器

左：外面。中央にマメ科種子の圧痕が確認されている（三角印部分）。

右：内面。厚さ1 mm程度の炭化物が広範囲に付着している。右上が年代測定および同位体分析試料の採取位置（三角印部分）。

図中のスケールは1 cm。

2) 分析方法

試料は国立歴史民俗博物館の年代測定室に持ち帰り、実体顕微鏡下で可能な限り混入物を除去した後、写真撮影を行った。今回の試料には土壌や胎土などの混入がなく、非常に保存状態が良好な炭化物であった。その後、試料約60mgを遠沈管に入れ、蒸留水で超音波洗浄を行い、試料に付着した土壌やホコリなどを除去した。次に、埋蔵中に生成・混入したフミン酸や炭酸塩などを溶解・除去するため、酸-アルカリ-酸（AAA）処理を行った。アルカリ処理は、試料の状態に応じて0.001～1.2M水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液により、室温～80℃の処理を行った（吉田、2004）。徐々にNaOHの濃度を濃くして、水溶液が着色しなくなるまでこの操作を繰り返し、最終的に80℃、1.2Mの濃度まで処理を行った。AAA後の試料は乾燥後、秤量した。

乾燥したAAA済の試料のCO₂化からグラファイト化までは（株）パレオ・ラボに委託し、同社の加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）で¹⁴C濃度の測定を行った。機関番号はPLDである。

炭素・窒素安定同位体比およびC/N比の分析は、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に設置されているEA-MSシステム（MICROMASS社製、The IsoPrime EA System）（装置の概要と測定方法については、國木田ほか（2009）を参照）を用いて、炭素・窒素安定同位体比の測定を行った。炭素同位体比の測定には試料0.2mgを、窒素同位体比の測定には3.4mgを用いた。炭素・窒素同位体比は原則1回の測定を行い、誤差は標準試料のばらつきで評価している。誤差は $\delta^{13}\text{C}$ 値で最大 $\pm 0.2\%$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 値で最大 $\pm 0.2\%$ 程度と考えられる。

c. 分析結果

¹⁴C年代測定結果を表2に示した。¹⁴C年代はAD1950年を基点として何年前かを示した年代であり、半減期はLibbyの5568年を使用した。得られた¹⁴C年代は、OxCal4.1（Ramsey、2009）を用いてIntCal09（Reimer et al.、2009）の較正曲線を使用して較正した。表1には、較正年代の確率分布の2 σ の範囲を示した。

¹⁴C年代測定結果は3530 $\pm$ 20 ¹⁴C BP（PLD-16364）であった。IntCal09による較正年代では、3885～3720 cal BP（2 σ ）であり、およそ3800 cal BP前後（約1850 cal BC前後）に位置づけられた。

炭素・窒素安定同位体比の結果は、それぞれ -24.7% 、 5.0% で、陸上動植物起源の有機物の値とほぼ一致した。また、C/N比は20.3であった。

表2 津島岡大遺跡から出土したマメ科種子圧痕土器の付着炭化物の分析結果

試料番号	遺物番号	種類	¹⁴ C年代 (BP)	較正年代 (2 σ) (cal BP)	較正年代 (2 σ) (cal BC)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰)	C/N比 (mol)	機関番号
TO-1	T5-75 TOG0042	土器付着炭化物	3530 $\pm$ 20	3880-3810 (43.5%) 3800-3720 (51.9%)	1935-1860 (43.5%) 1855-1770 (51.9%)	-24.7	5.0	20.3	PLD-16364

d. 考察

近畿・中国・四国地方の縄文時代後期の各土器型式の¹⁴C年代測定例はあまり多くないが、国立歴史民俗博物館の学術創成研究グループによって、いくつかの遺跡で土器付着物や炭化材の¹⁴C年代測定が行われている（西本編、2009）。これらのデータと比較すると、津島岡大遺跡の圧痕土器の年代は、縄文時代後期中葉の彦崎K2式や元住山I式頃の年代とほぼ同時期のようなのである（図25）。

阿部芳郎氏は津島岡大遺跡第5次調査で出土した後期中葉の第IV群土器を、27b層の古段階、25a層の新段階に区分し、27b層を堀之内2式期の終末、25a層を加曽利B1式初頭と平行するとした（阿部、1994）。筆者らが行った東京都下宅部遺跡の縄文時代後期の土器付着物の年代（工藤ほか、2007）と比較すると、堀之内2式最終末段階の測定結果は得られていないものの、およそ後期中葉の加曽利B1式の年代範囲と一致する。圧痕付着土器が出土したのは27b層であるが、時期的には27b層の主体となる堀之内2式の終末段階よりはやや新しい土器のようである。

一方、炭素・窒素安定同位体比とC/N比を見てみると、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は陸上動植物の範囲内であり、 $\delta^{15}\text{N}$ 値も5.0‰と高い値は示していない（図26）。このことから圧痕付着土器の炭化物には、海の魚や貝類などの海洋起源の有

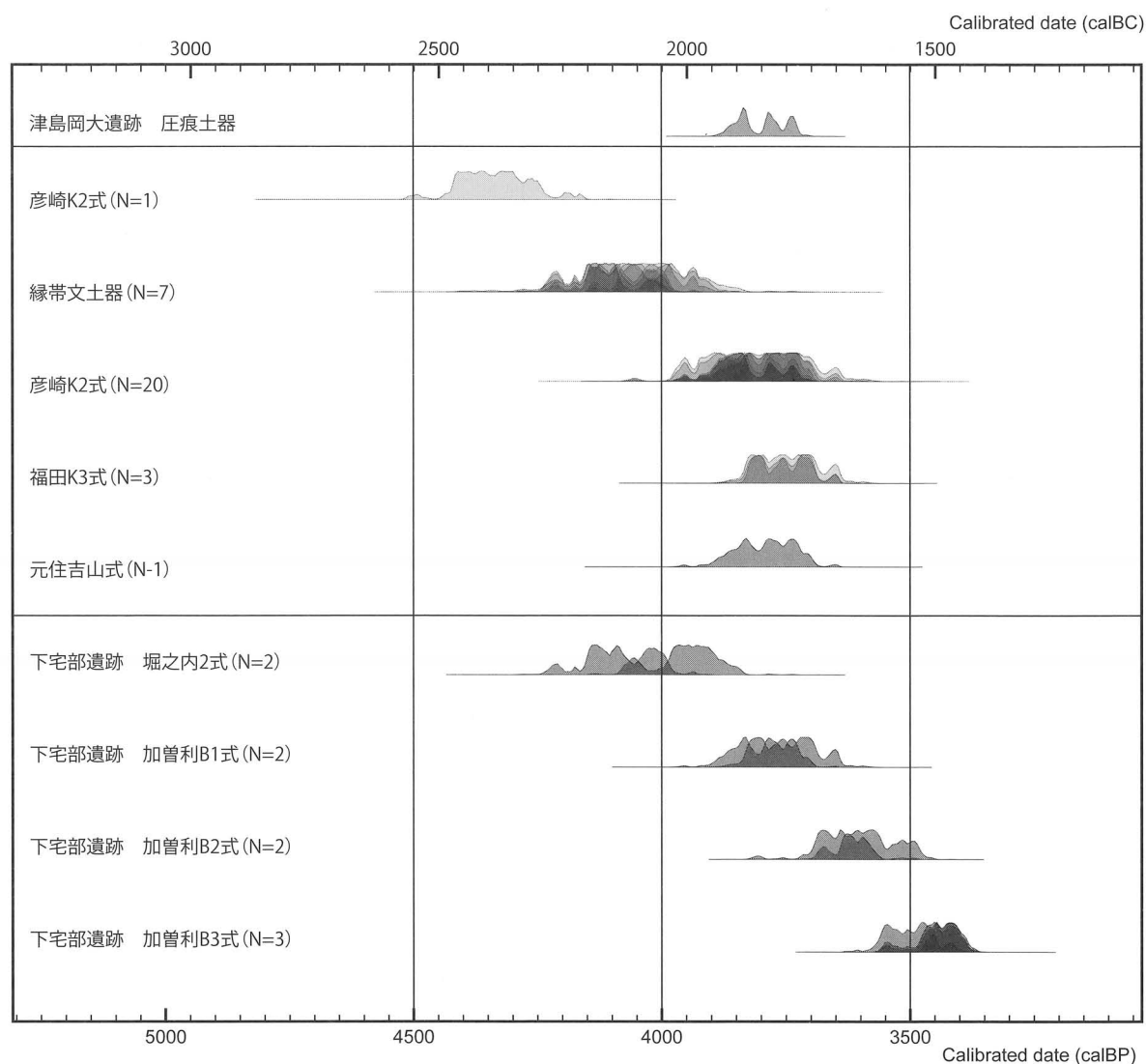


図25 津島岡大遺跡から出土したマメ科種子圧痕土器の較正年代と縄文時代後期の各土器型式の較正年代との比較
近畿・四国・中国地方の後期土器の年代は、西本編（2009）に記載されているデータを用いた。

機物は含まれていないと考えてよいだろう。また、C/N比をみると、圧痕付着土器の土器付着物には窒素がある程度含まれてはいるが、動物性たんぱく質の値よりはC/N比が高い。吉田邦夫らの実験データを見ると、シカやタヌキ、クマなどの陸上動物起源の炭化物は、C/N比が10%前後あるいはそれ以下で、窒素含有率が高い。圧痕土器の付着炭化物のC/N比はそれらの動物起源の有機物の値とは異なることから、動物起源の有機物は圧痕土器の付着炭化物に含まれておらず、炭化物の元となった有機物は、 C_3 植物起源であると推定される。

問題は、このマメ科種子圧痕土器に付着した炭化物が「マメ」を煮炊きしたものなのか、それ以外の有機物を煮炊きしたものなのか、という点である。これまで筆者が行った、下宅部遺跡出土のマメ科種子3点の安定同位体比のデータを図26に示した。マメ科種子の安定同位体比の傾向としては、 $\delta^{13}C$ 値が $-25 \sim -24\%$ 程度で、 C_3 植物の中ではやや $\delta^{13}C$ 値が高い傾向があり、今回の圧痕土器の $\delta^{13}C$ 値も類似している。 $\delta^{15}N$ 値については、下宅部遺跡のマメ科種子（工藤・佐々木、2010）の値よりもやや高いが、おおよそ類似した傾向にあるといえるかもしれない。

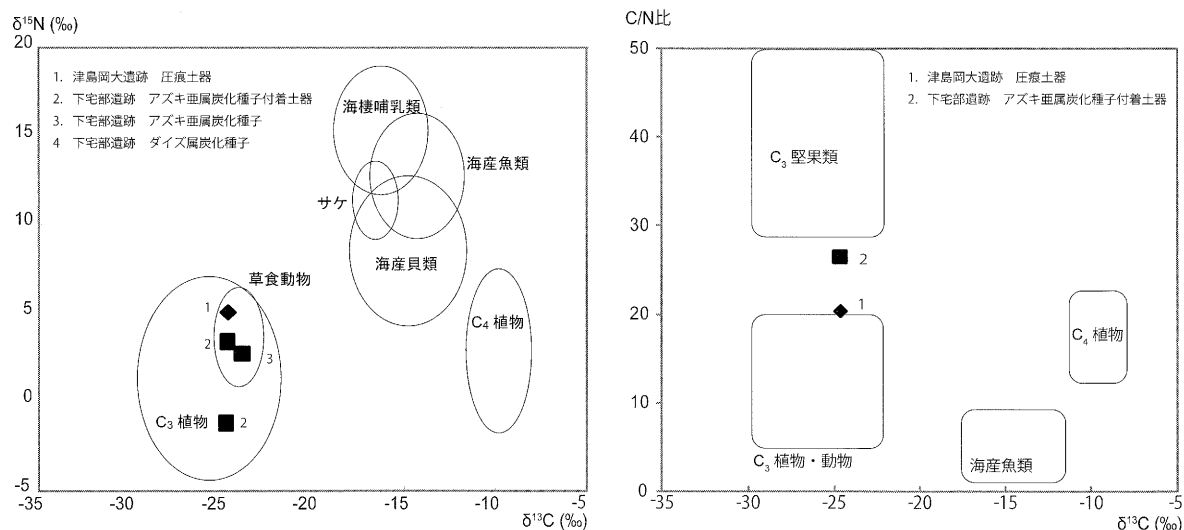


図26 津島岡大遺跡から出土したマメ科種子圧痕土器の炭素・窒素安定同位体比と下宅部遺跡のマメ科種子との比較
左：食料資源の各グループの安定同位対比の目安の円は、吉田（2009）に基づく。

吉田邦夫ら（吉田、2006；吉田・西田、2009）による現生の動植物の煮炊き実験データをみると、筆者らによるマメ科種子や今回の圧痕土器のように、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が -25‰ よりも高いものはないようである。下宅部遺跡の土器付着植物遺体の分析（工藤・佐々木、2010）では、編組製品付着土器から採取した炭化物や繊維付着土器から採取した炭化物に、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が -25‰ よりも高い値を示すものが多かった。これらの編組製品や繊維と一緒に煮炊きした内容物までは特定できていないが、植物起源の土器付着炭化物のなかには、マメ科種子のように $\delta^{13}\text{C}$ 値がやや高い値を示す一群があるようである。

吉田邦夫らの実験データでは、 C_3 植物のうち、ノビルなどの鱗茎類やアズキ、サトイモやヤマイモなどの根茎類に窒素がやや多く含まれており、C/N比も20以下である。ただし、筆者らが行った下宅部遺跡の土器付着物の分析では、鱗茎付着の試料のC/N比が高い値を示しており、吉田らの実験データとは異なる傾向を示した（工藤・佐々木、2010）。また、炭化して残ることがまずない根茎類について遺跡出土資料に基づいて議論することは極めて難しいため、現時点では根茎類についてこれ以上言及することはできない。

以上のデータからみて、圧痕付着土器の起源となった有機物の候補としては、 C_3 植物のなかでも堅果類は除外されることは明確である。それ以外の C_3 植物の候補として、マメ科種子や根茎類などが候補の一つとして挙げられるが、特定するのは困難である。

今後、遺跡出土植物遺体のうち、可食部位が残っている場合には、それらの安定同位体比とC/N比の分析を行い、基礎データを蓄積していくことが必要である。

謝 辞

貴重な試料を提供していただいた、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの山本悦世先生、分析のきっかけをいただいた熊本大学の小畑弘己先生に心よりお礼申し上げます。また、炭素窒素安定同位体比の分析設備を使用させていただき、分析についてご指導いただいた東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室の吉田邦夫先生と宮崎ゆみ子氏、東京大学北海文化研究常呂実習施設の國木田大博士にお礼申し上げます。

なお本研究は、平成22～25年度科学研究費補助金若手研究（B）「縄文時代の植物利用史に関する年代学的研究」（研究代表者：工藤雄一郎）の一部を使用して実施した。

引用・参考文献

- 阿部芳郎編1994『津島岡大遺跡4－第5次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 阿部芳郎1994「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」阿部芳郎編『津島岡大遺跡4－第5次調査－』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊，pp.261－277，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 工藤雄一郎・小林謙一・坂本 稔・松崎浩之2007「下宅部遺跡における¹⁴C年代研究－縄文時代後期から晩期の土器付着炭化物と漆を例として－」『考古学研究』53－4，pp.51－71
- 工藤雄一郎・佐々木由香2010「東京都東村山市下宅部遺跡から出土した縄文土器付着植物遺体の分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』158，pp.1－26
- 國木田大・吉田邦夫・辻誠一郎2009「押出遺跡のクッキー状炭化物」『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』pp.241－249，日本考古学協会
- 西本豊弘編2009『弥生農耕の起源と東アジア－炭素14年代測定による高精度編年体系の構築－平成16～20年文部科学省・科学研究費学術創成研究費 研究成果報告書』，国立歴史民俗博物館
- Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. 2009. IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51, pp. 1111–1150.
- Ramsey, B. C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51–1, pp.337–360.
- 吉田邦夫2004「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」新潟県立博物館編『火炎土器の研究』pp.17–36，同成社
- 吉田邦夫2006「炭化物の安定同位体分析」『新潟県立研究紀要』7，pp.65–68
- 吉田邦夫・西田泰民2009「考古学がさぐる火炎土器」新潟県立歴史博物館編『火炎土器の国 新潟』pp.87–99，新潟日報事業社

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第20次発掘調査（岡大病院中央診療棟新営：調査番号1 a・1 b、鹿田BZ～CC31～40区、BS20～23区、BT～BW20～24区、BX～CD13～25区）

a. 調査成果

- ①弥生時代～古墳時代初頭：地形復元と集落端部の状況確認
- ②古代後半～中世前半：集落構造の復元
- ③中世後半～近世初頭：濠で囲まれた屋敷地の確認

調査期間 2009（平成21）年6月1日～2010（平成22）年3月8日

A地点（共同溝地点・鹿田BZ～CC31～40区）：2009年6月1日～2009年8月24日

2009年6月1日～16日（表土掘削）、6月18日～7月31日（発掘調査）、2009年8月5日～24日（基礎下調査）

B地点（中央診療棟建設地点・鹿田BS20～23区、BT～BW20～24区、BX～CD13～25区）

：2009年9月7日～2010年3月8日

2009年9月7日～10月13日（表土掘削）、10月15日～2010年2月22日（発掘調査）、

3月1日～8日（基礎下調査）

調査体制 調査主体 岡山大学（学長 千葉喬三）

調査担当 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（センター長 北尾善信）

調査員 A地点：光本 順（助教、調査主任）、野崎貴博（助教）

B地点：山本悦世（教授、調査主任）、岩崎志保・野崎貴博・池田晋（助教）

調査面積 A地点：632㎡、B地点：2,482㎡

検出遺構

A地点：井戸3基（鎌倉時代3）、溝13条（弥生時代1、鎌倉時代8、室町～戦国時代4）、

土坑9基（弥生後期～古墳初頭2、室町～戦国時代7）・柱穴約10基（室町～戦国時代）

B地点：掘立柱建物1棟（鎌倉時代1）、井戸22基（平安時代後半～末3、鎌倉時代12、室町～戦国時代7）、

溝18条（弥生後期～古墳初頭6、鎌倉時代9、室町～戦国時代3）、

土坑18基（弥生後期～古墳初頭1、鎌倉3、室町～戦国時代14）、ピット約300基（鎌倉～戦国時代）

出土遺物量（27ℓ容量の箱を換算して）

A地点：総数 22箱

＜内訳＞ 土器類 11箱（平安時代～江戸時代、弥生土器少量）、木製品 4箱（木簡、井戸枿材、曲物他）、
金属器・骨（牛馬骨）1箱、石 4箱、サンプル 1箱

B地点：総数 278箱

＜内訳＞ 土器類 138箱（弥生後期～古墳時代初頭…10箱、平安時代後半～戦国時代…106箱）
木製品 60箱（井戸枿材、曲物など）、
金属器・石器・サンプル 80箱（石 63箱：砥石等製品も含む）

現地説明会：2010年1月23日開催 見学者数160名

b. 調査に至る経緯と調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、岡山大学病院中央診療棟改築に伴う発掘調査である。同工事にあたっては、予定敷地内に建つ病棟や厨房棟を撤去する必要があった。病院機能を損なわないように同建物類の解体あるいは建設工事を進めるため、調査対象範囲を2期に分けて発掘することとなった。1期目は2007(平成19)年度(2007年9月～2008年3月)に、第18次調査として調査を行った。その範囲は建設予定地の北東部にあたり、872.2㎡の面積を対象とした。その後、既存建物の解体あるいは諸施設の付け替えなどを経て、2009年度には、2期目の調査が予定された。その面積は、最終的にA地点が632㎡、B地点は2,482㎡となり、調査員は2名と4名がそれぞれ担当することとなった。

(2) 調査の経過

【A地点】

まずは、A地点である共同溝部分から調査を開始した。2009年6月1日～16日に表土掘削を完了し、続いて6月18日からは本格的な発掘調査となった。表土掘削に際しては、旧病棟の基礎構造が非常に大形で強固であるため、その撤去に伴う遺跡の破壊を危惧し、特に大形の基礎部を残すこととした。その結果、大規模な既設工事による破壊の中での調査となったが、そうした状況にも関わらず、狭小の範囲ではあるが、平安時代後半～江戸時代の遺構が残される箇所も比較的多く認められた。基礎間をぬっての調査は、土の搬出などの作業環境の悪さや基礎設置に伴う攪乱による遺構の分断そして土質の変色などからくる調査の複雑化など、様々な点で困難な状況下での作業となった。

2009年7月31日に基礎部分以外の調査終了後、8月5日から基礎の撤去工事を行いつつ、その下部の遺構を調査し、8月24日に全ての作業を終了した。

【B地点】

表土掘削 本体工事地点にあたるB地点では、A地点の調査と並行して既存の病棟建物の解体工事が進められ、表面上は更地となっていった。A地点の調査終了後、B地点へと調査地点を移動し、2009年9月7日から調査員1名の立会のもとに表土掘削を開始した。

B地点では北半に旧厨房そして南半に旧病棟建物があったことから、大形基礎の広がりが見込まれ、A地点と同様に大形基礎の撤去を避けた結果、調査区南半部では43箇所にコンクリートの塊が並ぶこととなった。ただし、その破壊の度合いは予想を遙かに超えるものであり、基礎の規模の大きさや密度の高さ、それに加え、基礎部のみならず建物敷地全体を基礎下面まで掘削するという建物工事時点での工法の違いから、A地点以上に広範囲でそして調査終了面以下にまで及ぶ深い破壊が、調査区の南半部を覆っていることが判明した。さらに、東側では大形の浄化槽等設置に伴う大規模な破壊も加わり、こうした破壊が及ぶ状況下では、包含層は全く残っておらず、破壊部下面で確認された数基の井戸と大溝を残して、全ての遺構は消失していた。

包含層の残存度が高いのは、旧建物敷地外にあたる調査区南端部の幅約1mの範囲、あるいは中央部や北側部に島状に残る高まり部のみであった。また、BXライン以北では、基礎部は全て撤去することができ、破壊深度も多少浅いことから、弥生時代対応の土層は残されることとなった。

表土掘削は10月13日に終了した。

発掘調査 発掘調査は2009年10月15日から開始した。調査にあたっては、対象地域を形状に合わせて南北に大きく区分し、さらに南部分を東西に二分し、北区・東区・西区の3区に分けて、遺物の取り上げや記録などに対応することとした。

まず、広範囲にひろがる攪乱部分の清掃を行った。その多くは基盤層におよぶ破壊であったため、作業過程において多くの井戸あるいは溝を検出することとなった。発掘調査開始段階の全景写真を撮影したのち、近世土層から順次各時期の調査に入るのが本来の手順ではあったが、攪乱底部で検出された遺構の保存が懸念された上、

遺構の時期確定が困難な状態であったため、時期の異なる遺構の調査も同時に進めざると得ないと判断し、作業を進めた。

比較的包含層が厚く残る部分では、戦国期に埋没した溝あるいは土坑などの調査を終え、鎌倉時代そして平安時代後期の土層へと掘り進めた。遺構の密集地区での遺構の検出は難しく、複数の時期の遺構を同一面で確認するという状況となった。その段階で、残存度の高い北区を中心に柱穴群・井戸・溝群を、そして東区・西区では掘削深度の深い井戸や大形の溝を順次調査し、平安時代後半～戦国時代の全景を写真撮影した。

弥生時代後期～古墳時代初頭段階の面まで掘り進むと、高低差のあった調査区はほとんど平坦となり、特に北半部では破壊の影響は姿を消した。第18次調査の成果を踏襲する形で、地形の落ち部分に遺物の集中を確認したほか、溝の続きを検出することができた。また、調査区南半部においても、あらたに溝などが検出された。それらの調査を2月19日に終え、22日に補足の記録を行い発掘調査を終了した。

その後、調査区内に残る基礎43箇所の撤去に伴う調査を3月1日から開始し、調査員1名が対応した。その下面を調査する作業の中で、溝・土坑の重複関係などの情報を得た。3月8日に作業を終了した。なお、工事の都合から調査区の北西部に一部狭小な範囲で未調査部分が残ることとなり、次年度に対応することとなった。

平安時代後半～戦国時代の調査終了段階で、1月23日に現地説明会を開催し、160名の見学者があった。

c. 調査地点の位置

発掘調査地点は、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する岡山大学鹿田キャンパス内に位置する。岡山平野を南流する旭川西岸の比較的河口に近い立地である（付図1）。

調査地点は本体工事地点（B地点）と共同溝地点（A地点）に分かれる。両地点は同敷地の南東部に位置し、B地点の西側にA地点が設定された。岡大病院の東西病棟あるいは厨房棟が建っていた地点である。鹿田地区に設置した構内座標では、A地点はBZ～CC31～40区、B地点はBS20～23区、BT～BW20～24区、BX～CD13～25区にあたる（図34）。

岡大の鹿田キャンパス内では、既に全域にわたって調査がなされている。B地点周辺では、北東側で第18次調査（中央診療棟建設地：厨房跡地）、南側で第9～11次・第14次調査（病棟建設地）が隣接して実施され、弥生時代～近世集落の様子が断片的に見つかっている。本地点は、それらをつなぐ場所にあたる。また、少し北側に目を向けると、NMR-CT室（第2次調査地点）さらに北西部に外来診療棟（第1次調査地点）において、弥生時代に遡る集落の広がり確認されている。（山本悦世）

d. 各地点の調査概要

(1) A地点

【層序】（図27） 調査区で確認した基本層序は以下の通りとなる。

1層（大正期以降の造成土）：上面は現地表面にあたる。上面標高は約2.3mである。本層の多くは、1917（大正6）年の岡山医学専門学校建設時における造成土である。

2層（近代）：黒灰色粘質土で、調査区の一部に残存する。

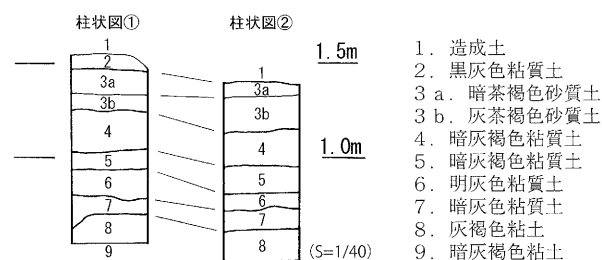


図27 土層断面図

3層（中世）：3層はa・bの二層に分層した。3 a層は暗茶褐色砂質土であり、上面において、ピットを少数確認した。3 b層は灰茶褐色砂質土である。

4層（中世）：暗灰褐色粘質土である。中世遺構の多くは本層上面で検出した。

5層（古代～古墳か）：暗灰褐色粘質土である。

6層（古墳か）：明灰色粘質土である。

7層（弥生後期）：暗灰色粘質土である。本層から

は弥生時代後期の土器が出土した。

8層（弥生中期～後期）：灰褐色粘土である。遺物は出土していない。

9層（弥生中期以前か）：暗灰褐色粘土である。遺物は出土していない。無遺物層と考えられる。

【遺構・遺物】（図28） 本調査地点では弥生時代、中世、近世の遺構・遺物を確認した。以下その概略を示す。

<弥生時代>

弥生時代には、北側に微高地、南側に低位部が広がっていたことを、土手の一部で確認した。南の低位部へと落ちる緩斜面からは、弥生時代後期の土器片が出土した。

弥生時代の遺構は、土坑2基、溝1条を確認した。土坑は、南西隅付近で確認した（SK10・11）。現状では小型で浅いもので、遺物の出土はない。溝は南北方向にのびる小型のものとなる。

地形と遺構・遺物から、当該期の本調査地点は集落域の縁辺にあたるものと考えられる。

<中世：鎌倉時代>

井戸3基、土坑2基、溝11条（畝溝3条含む）、ピットを検出した。遺構の時期については幅があり、少なくとも12世紀中頃～14世紀までのものを確認している。調査区北半の状況については、包含層ののこりが悪いため、検出遺構の多くは南半に位置する。以下に示す遺構・遺物の内容から、本調査地点は屋敷地の一角をなすものと考えられる。

南半でみつかったピット群は、調査区南の病棟地点で検出されたピット群に連なるものと考えられる。井戸は調査区南東部に2基（SK1 古相・新相として記録）、中央付近に1基（SK3）がみられる。南東部の2基の井戸は、12世紀中頃と13世紀中頃の井戸が切り合う形となる。これらの井戸は、掘形の平面形が多角形をなすことに特徴がある。調査区中央の井戸（SK3）については、土手部分で一部が残存していたものである。井戸上半が別の土坑（SK4）によって切られるが、井戸として認識した上半部自体も土坑4と平・断面形が類似している。したがって、SK3上半もまた土坑である可能性がある。

溝については、調査区中央の南北大型溝（溝1）を軸に、西に1条（溝9）、東に1条（溝6）がのびる。溝6・9は出土遺物からいずれも14世紀代と考えられる。両溝の溝1への接続位置が異なるため、溝1を軸に十字形の区画とはならないことが特徴的といえる。南北大型溝の底面からは、木簡片1点がみつかった。

畝溝と認識した遺構は、調査区南西隅において、東西方向に3条確認した。これらは、埋土がいずれも黄褐色系の砂質土で共通している。おそらく、当該箇所において耕地が形成されていたものと考えられる。

<近世・近代>

近世遺構としては、土坑5基、溝4条を検出した。およそ36～37ラインの幅に位置する南北大型溝（溝1）を

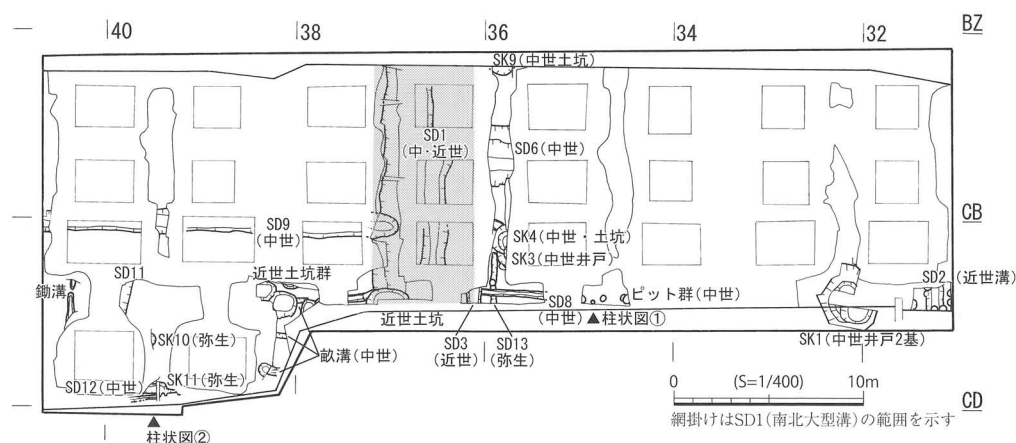


図28 A地点遺構全体図

軸として、その西方に土坑群が形成された。こうした遺構配置からは、近世段階の本調査地点はおおむね耕作域であったものと考えられる。

土坑の内、長方形プランの1基からは、その底面において古銭1点が出土した。

南北大型溝は、掘削の開始は中世段階まで遡るものである。南北大型溝の東肩を切る形で、南北溝が構築されている（溝3）。溝3については、中世以降のものと考えられる。その他、調査区東端において、南北方向の溝（溝2）があり、出土遺物はないが検出面から近世にまで降る可能性がある。

近代については、耕作土と考えられる包含層（2層）を確認したが、多くは造成以降の建物建設の影響で失われていた。近代に属する遺構は確認されなかった。（光本）

(2) B地点

【層序】（図29）

1層：鹿田キャンパスに、岡山医学専門学校が大正6（1917）年に建設された際の土地造成盛り土が約80cm程度、それに、以後の堆積土が加わって構成される。上面は標高2.4m前後に位置する。

2層：砂が大量に含まれる灰色土層で洪水後の攪拌を想起させる。上面は、調査区の北半部では標高2～1.9m、南半部では同約1.7m程度が一部で確認されるが、上部が削平されている可能性が高い。

3層：近代（明治・大正期）の耕作土にあたる。明るい灰白色土を基調とする均質性の高い土層である。上面は、北半部では標高1.8～1.88m、中央部では同1.7m前後、南端部では同1.6～1.65mを測り、南に向けて低くなる様子が窺われる。大規模な攪乱の存在によって、上面ラインがどのように繋がっていくのかを確認することはできないが、耕作土であることを考慮すると、そこに耕作面の段差を想定することは可能であろう。

4層：やや青緑色を帯びた暗灰（褐）色土あるいは砂質土である。上面で検出される遺構（大溝など）の時期などから、中世前半から中世後半までに堆積した土層と判断される。上面は、北半部が標高1.7～1.75m、中央部では同1.6m前後、南端部では同1.5m前後を測る。この数値変化は3層と共通した南への下降を示しているが、近世層の存在が明瞭でない点から、3層形成時における土地改変が本土層上面及んだ結果と見なすほうが妥当であろう。ただし、調査区南端部へ下降する地形を否定するものではない。

一方、調査区北東部では、上面は同約1.4mの数値を示す。同地点で3層は残存していないため不明確な部分もあるが、3・4層段階に低い地形であったことが予想される。ただし、本土層は周辺の調査において近世および中世後半の土層にわけられる場合もある点は注意が必要である。

5層：上面で多くの遺構が検出されており、その時期から中世前半の堆積土と判断される。淡灰褐色粘質土あるいは砂質土で、南端部はやや砂質を強める。上面が高い部分は、BXライン以北で、その範囲の中央部西寄りを北西から南東に向かうラインの東側である。高さは標高1.55～1.6mを測る。さらに、その西側～南側に向けて地形は緩やかに下降し、同1.4～1.5mで安定的な広がりが見込まれる。一方、北東部あるいは南東端部周辺は、同1.2（北東部）～1.4m（南東部）まで下がっており、東端部が低いという地形は4層と共通する。

6層：黄灰褐色粘質土で調査区南端ではやや砂質を帯びる。鉄分の沈着が顕著である。出土遺物から中世前半の土層と考えられる。上面が高い部分はBXライン以北で、5層と同じ範囲である。標高1.4～1.5mを測る。同高まりの西側そして調査区中央部は標高1.3～1.4m、南端部で同1.2～1.3mを測り、高まり部から周囲に向けて緩やかに下降する傾向が窺われるが、全体的には安定的な平地の広がりとも言えそうである。一方、調査区北東部は、同1.1m前後まで下降する。全体に5層と共通する地形である。

7層：出土遺物から古墳時代初頭の時期が想定される。暗茶灰褐色土～砂質土である。高位部はBXライン以北で、その範囲の中央部西寄りを北西から南東に向かうライン上の帯状の高まりであり、その東側ではない点が6層とは異なる。標高1.45～1.5mを測る。同高まりの東側・西側・そして調査区中央部さらに南端部までは標高1.2～1.35mを測り、高まり部から周囲に向けて緩やかに下降しつつも、安定した平面の広がりが見られる。一方、

調査区北東部は、同1m前後まで下降する。以上のように、高まりの範囲以外は、5層と共通した地形を呈する。
 8層：7層に類似した黒茶灰褐色土砂質土で、一部では粘性が多少強い部分もある。帯状に高い地点は、上面が1.4～1.5m、やや低い広がり同1.1～1.2m、そして北東部の最深部が同0.9～1.1mをそれぞれ測り、全体の地形は7層と共通する。

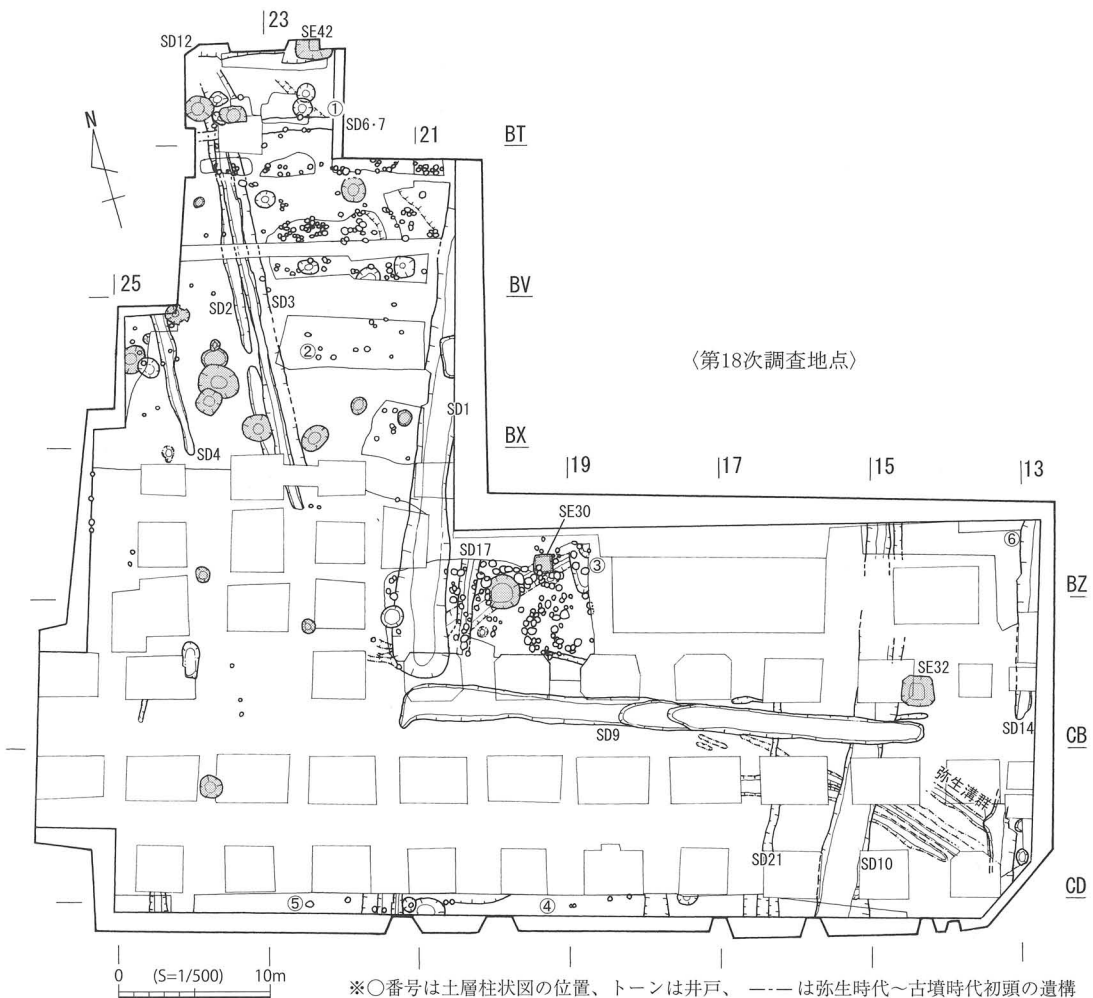
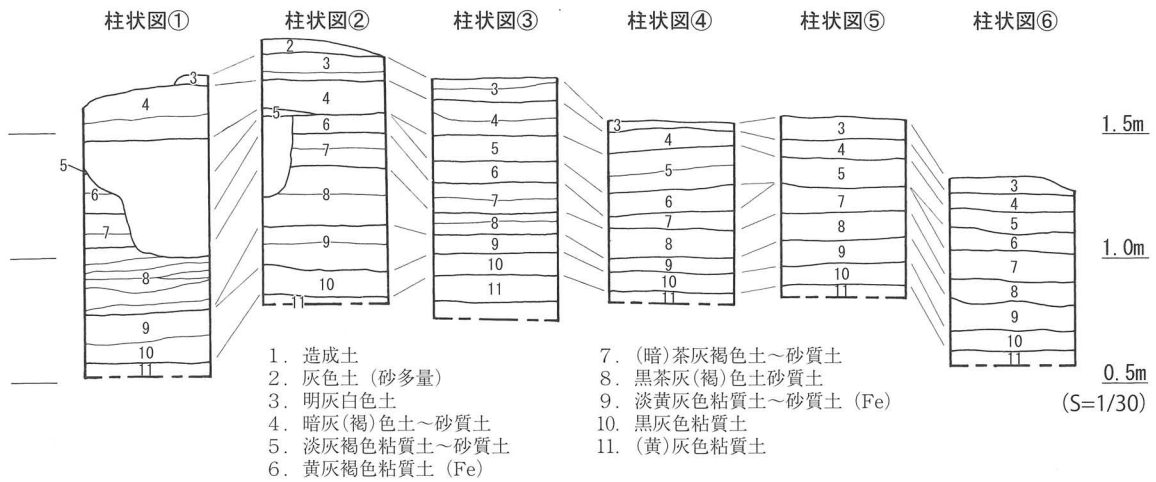


図29 B地点断面図・遺構全体図

本土層上面では、明確な遺構は確認されていないが、高まり部の東側には「落ち」が広がっており、その斜面に弥生時代後期の土器が点在して出土する。こうした遺物から弥生時代後期の時期に属する可能性を考えている。9層：堆積が確認されない箇所もある。淡黄灰色粘質土～砂質土で、鉄分の沈着が特徴的である。上面は、標高1.05～1.18mを測る調査区中央部から調査区南端西半部が高く、その北側周辺が同1m前後、そして調査区東側が同0.8m前後の数値を示す。東側への下降が予想される。基本的には8層と共通した地形である。

上面では遺構が検出されており、弥生時代後期までの堆積と判断される。

10層：黒灰色粘質土で8層との類似性が高い。7・8層と共通した地形を呈する。BXライン以北の調査区中央を斜めに走る高まりは標高1～1.2mを測るが、北の方が高い傾向を持つ。同様の高まりは調査区南端部西半でも同1m前後の高まりとして確認される。その周囲は同0.9m前後で安定的である。一方、調査区北東部は同0.68～0.75mの数値が示すようにやはり低い地形が窺われる。また、8層と同様に、北側の高まりの東側に「落ち」が存在する。

上面・下面では遺構が検出されたが、堆積時期は弥生時代としか現状では判断できない。

11層：弥生時代の基盤層にあたる。(黄)灰色粘質土である。上面は、調査区全体に標高0.9～1m前後に認められるが、調査区北東部では同0.6m前後となる。地形の低さが際立つ。

以下の堆積土は灰色系の粘土を主体としていることが、一部の断面で確認される。

また、4～8層は、それぞれ細分が可能であるが、詳細については今後の検討が必要であり、ここでは、基本土層について述べるにとどめておきたい。

【遺構・遺物】(図29)

<弥生時代後期～古墳時代初頭>

7～10層が本時期に対応する。北側に広がる微高地端部に位置する18次調査の周縁部に位置しており、同端部をめぐる「落ち」が、本調査地点内の8・10層にも及び、北西から南東に向けてその存在が確認される。一方、西側では多少の高まりが認められるが、安定的な状況を窺うことはできない。その背景には、弥生時代の基盤層と考えられる11層以下で確認される島状の高まりや、「落ち」部が複雑に散在するという起伏のある地形が影響していると考えられる。

検出された遺構は土坑3基・溝7条である。調査区北端部においては、東側への「落ち」部斜面に遺物が比較的多く出土しているが、全体に希薄な状態といえそうである。

土坑2基と溝3条は調査区中央部BZライン付近において9層・10層上面で検出された。溝は第18次発掘調査地点において北東から南西に向かう溝の続きにあたる。西端部についてはいずれも攪乱によって断ち切られているため確認できない。時期は弥生時代後期の可能性が高い。そのほかの溝4条は、調査区南東隅から調査区中央部に向かうもので、一部で重複関係を有する。大規模な攪乱下面での検出であるため、本来の掘削面あるいは時期など詳細は不明確であるが、一部の壁面で10層下面掘削の可能性も残す溝が1条あり、溝群の上限時期を示す。残る土坑1基は、BXライン上で24区に位置する。すり鉢状の土坑である。攪乱下面での検出であり、機能・時期などは不明である。「落ち」は8層・10層で確認されたが、第18次調査で調査された溝27などに対応する可能性が高い。あるいは、その縁に形成された溝の可能性も残す。

<平安時代後半～末>

本時期を示す土層の堆積は確認できないため、地形の復元は困難である。

検出遺構は、井戸3基(井戸30・32・42)のみであり、掘削深度が深いことから大規模な攪乱や土層の削平による消失を免れたことは明らかである。井戸は、調査区東部(CA14区)・中央部(BY19区)・北端部(BS22区)にそれぞれは約30m前後の距離をもって点在する。いずれも方形の掘り方内に桟木と縦板材の木枠を据えた構造が特徴的であり、改修の様子を残す井戸も注目される。井戸枠内からは曲物や土師質土器碗などが出土したほか、

大量の炭が堆積するものも含まれており、埋め戻しの際のマツリの様子を窺わせる。

<鎌倉時代>

5・6層が本時期に対応する。第18次調査地点の西側周辺を中心に、調査区北側がやや高い傾向を示すが、東端部を除いては、全体として安定的な広がりを見せる。井戸12基・土坑3基・溝9条・柱穴群が確認された。これらの時期は13～14世紀と考えられ、長期間にわたる集落の継続性を窺うことができる。

溝の方向は、真北に近い軸を示すものが3条（溝2～4）、北方位の軸が東に傾く現在の地割りに沿ったものは南北方向に3条（溝10・17・21）と東西方向に3条（溝6・7・12古段階）があげられる。

鎌倉時代前半では、方向軸の異なる溝が確認された。特に、溝2～4は鹿田遺跡では特異な方向となっており、その形成時期あるいは他の溝との関係などが注目される。溝6・7は東西方向の区画溝を構成する。

鎌倉時代後半では溝2条（溝10・溝21）が、現地割りに沿って南北方向に検出された。特に、溝10は幅4.5m・深さ1.5mを超える規模が復元され、13世紀後半頃の溝の大形化を示す。さらに、第18次調査地点と第14次調査地点にも続いており、その規模の大きさと相まって、土地を南北に区切る重要な溝であったことは明らかである。東側が低い地形もそれに対応する。東西方向では、調査区北端を走る溝12があげられる。

<室町時代～戦国時代>

4層で検出した井戸7基・溝4条・土坑14基・柱穴群が本時期に属する。本地点では、近世層が削平された可能性が高い。

溝は、南北方向の2条（溝1・14）と東西方向の2条（溝9・12新）が注目される。その内、溝14は前段階に属する溝10と同様に14次調査でも確認され、本地点からさらに北に延びる状況を呈する。また溝の規模や形状からも、溝10に代わって鹿田キャンパスを南北に区切る溝として評価できよう。東西方向の溝では、鹿田キャンパス敷地内の溝の配置から、溝12が南北方向の重要な溝となる可能性を持つ。一方、溝1と同9は、それぞれ南西部隅で端部を形成し、繋がった状態ではないが、同時性やL字形を形成する位置関係あるいは底面レベルを含めた形態的特徴の共通性などから、関連性の極めて高い一連の溝であることは明らかである。調査区北端部に一部がかかる溝12をのぞいた3条の溝は、少なくとも幅4.5m・深さ1.5mに及ぶ大きさであることが復元される。これらの溝によって、敷地は東西南北を濠状の大形溝で区切られた屋敷地の存在が浮かび上がる。その敷地規模は溝の中心距離で約40mを測る。

井戸は、同屋敷地内外に5基が見つかった。内部からは、15～16世紀の備前焼や17世紀初めの国産陶器・明の染め付けのほか、美濃焼の猿の意匠をこらした水滴が出土している。現状では、詳細な時期が確定できない遺構も多く、大溝の内側と外側との関係などの検討は今後の課題であるが、少なくとも有力者の存在を示す資料としては十分といえるであろう。

江戸時代には、溝・井戸などは姿を消し土坑を中心とした耕作地へと移り変わると考えられる。

e. 調査成果

【弥生時代後期～古墳時代初頭】 鹿田遺跡では、敷地の中央部に当たる1次調査地点において弥生時代中期後半に集落が形成されている。続く後期には、その周囲にあたる2次・5次調査地点まで集落は拡大しているが、全域に展開するのは弥生時代後期末～古墳時代初頭に下る。A・B両地点において、その時期の微高地周縁部の地形と遺構の状況を確認した。また、比較的安定した地形の形成が後期の段階に進んだ可能性を窺うこともできた。後期集落の拡大が限定的であった背景の一つに、そうした土地形成の問題があったことが予想される。また、集落端部にあたる地域での土地利用に関して、9～14次調査では水田の広がりが予想されたが、本地点の溝群もそれに関わる遺構として評価される。一方、18次調査の微高地東端部から繋がる溝とは、方向を大きく違えており、それらの関係は今後の課題である。

【平安時代後半～末】 古墳時代以降断絶していた集落の再開が確認される。B地点では井戸3基が約30mの等間

隔で配され、全てに板材を用いた井戸枠を有し整備された状況を示す。これは、井戸の配置に規則性が見えにくく井戸枠をもたない傾向が認められる鎌倉時代以降とは、やや異質な感を受ける。この3基の井戸には大きな時期差を認めたいことから、計画的な屋敷地の配置が整然と行われていた可能性も想定される。また、改修痕を残す井戸の状態は、一見大形に見える井戸の評価に新たな視点を向けることができるかもしれない。

【鎌倉時代】 A・B調査区全体に井戸が点在しており集落の広がりを見ることができる。ここで特に注目されるのはB地点の溝の方向である。鹿田遺跡では「鹿田条里」ともいわれる南北軸を東に傾けた土地区割りが中心をなすが、真北の軸方向を示す溝が5mの間隔をもって2列が並行する状態が調査された。同溝は、本地点の南側にも伸びることが第9・11次調査から窺われる。さらに、北の方向をたどると、岡大津島キャンパスの中央部を南北に走る条里の基準線にあたる可能性が高い点を考えると、注目すべきデータと評価される。

【室町時代～戦国時代】 濠状の溝で囲まれた屋敷地を確認できた。B地点では、敷地の四方を囲む大溝の確認によって、約40m幅の区画単位を想定することができる。また、本時期の遺構は、鹿田キャンパス全域に広がる前段階とは異なり本調査地点を中心に限定的な広がりを示す傾向をみせており、集落景観の変化を窺わせる。

おわりに

本地点の調査では、弥生時代の集落南端の状況に加え、平安時代末から継続する集落が近世初頭にまでおよぶことが明らかとなった。その中で、時代ごとに集落景観が変化する状況を窺うことができる。最終段階となる近世初頭の時期は、岡山城下町の形成時期とも重なる。城下町からは外れているとされる本地点の調査によって、農村風景とは異質な感をもつ濠で仕切られた集落の存在が明らかとなったことから、今後、この時期の具体像も考古学的に探求していくことが求められよう。

(山本)

第2節 試掘・確認調査の概要

1. 学生サークル棟新営予定地（調査番号2、鹿田CR70-71・CW75区）

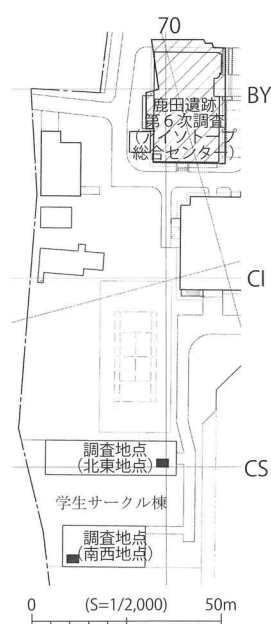


図30 調査地点の位置

a. 調査の経緯（図30）

老朽化した鹿田地区学生サークル棟の建て替え工事が、2009年度に実施されることとなった。新営建物はプレハブ2階建てで、既存のサークル棟を取り壊した後に、同箇所にて建てられる。建て替えに際しての地下の掘削工事は、既設建物基礎よりも上部（現地表より60～70cm）で収まるものであり、遺物包含層まで達しないことが予想された。そのため、既設建物基礎の取り壊しおよび新営建物基礎設置に際しては、立会調査で適宜対応することとした。いっぽうで恒久的建物の新営にあたって、埋蔵文化財の状況を調査することとし、新営建物の敷地内において2箇所の試掘・確認調査を実施することとなった。

試掘・確認調査は、2009年8月25日に2箇所実施し、調査研究員1名がそれにあたった。なお、同月26日には、調査地点のGPS測量を当センターで実施した。

2箇所の試掘箇所は、北東地点と南西地点からなる。試掘箇所の設定にあたっては、以下の点を調査のねらいとした。北東地点については、その北方に位置する鹿田遺跡第6次調査（アイソトープ総合センター）において確認された中世南北溝群が当地点まで伸びるかどうかを確認することを主な目的とした。一方、南西地点においては、鹿田キャンパス南西隅における旧地形および遺構・遺物のひろがりについて

て確認することを主な目的とした。

b. 調査の成果

(1) 北東地点

【層序】(図31・32) 北東地点の層序については以下の通りとなる。全体として、本地点の層序は鹿田地区における標準的な層と言い難く、津島地区で見られる耕作土との類似が目立つものであった。なお、土層の時期については、ほとんどの層で遺物が出土していないため、層の順序からの推定を行った。

1層：1922（大正11）年の岡山医科大学建設時における造成土である。上面は現地表面にあたる。上面標高は約2.0～2.2mである。厚さは0.65～0.85mを測る。

2層：淡青灰色粘質土で、上面標高は1.36mである。近代耕作土と考えられる。

3層：茶灰色粘質土で、鉄分・マンガンを多く含む。上面標高は1.27mである。土質から耕作土と考えられる。時代は、出土遺物がみられないものの、層序から中・近世と推定される。

4層：灰色粘質土で、層の中間に鉄分の沈着がみられる。鉄分が多くマンガンがやや少ない。土質から耕作土と考えられる。上面標高は1.14mである。中世の土師質土器碗小片を僅かに含む。中世頃の層と推定される。

5層：黄灰色粘質土で、層上半に鉄分、下半にマンガンが多く沈着する。上面標高は1.0mである。4層と同様の灰色系の粘質土であり、土質から耕作土と考えられる。時期についても中世段階のものと推定される。

6層：茶灰白色砂質～粘質土で、相対的に上半については砂質が強く、下半に関しては粘性が強いいため、二層に細分することも可能である。鉄分は多いものの、マンガンは少ない。上面標高は0.90mである。2～5層と同様に、耕作土の可能性もあるが判然としない。時期については、遺物が出土していないため、古墳時代～中世の広い範囲で捉えることが妥当と考えられる。

7層：灰褐色砂質土であるが、下層の8層と同様にやや白みがかかる。鉄分は多く、3～5cm大のブロック状に含まれる一方で、マンガンは少ない。上面標高は0.70mである。

8層：暗灰白色粘質土で、鉄分は多いものの、マンガンはみられない。上面標高は0.65mである。下層との関連で考えれば、湿地的な層と考えられる。

9層：暗灰色砂混じり粘質土である。砂混じりである点が本層の特徴であり、下層の砂層である10層との関連が窺える。上面標高は0.45～0.53mである。鹿田地区の既往の調査から判断すると、弥生時代中期以前に堆積した

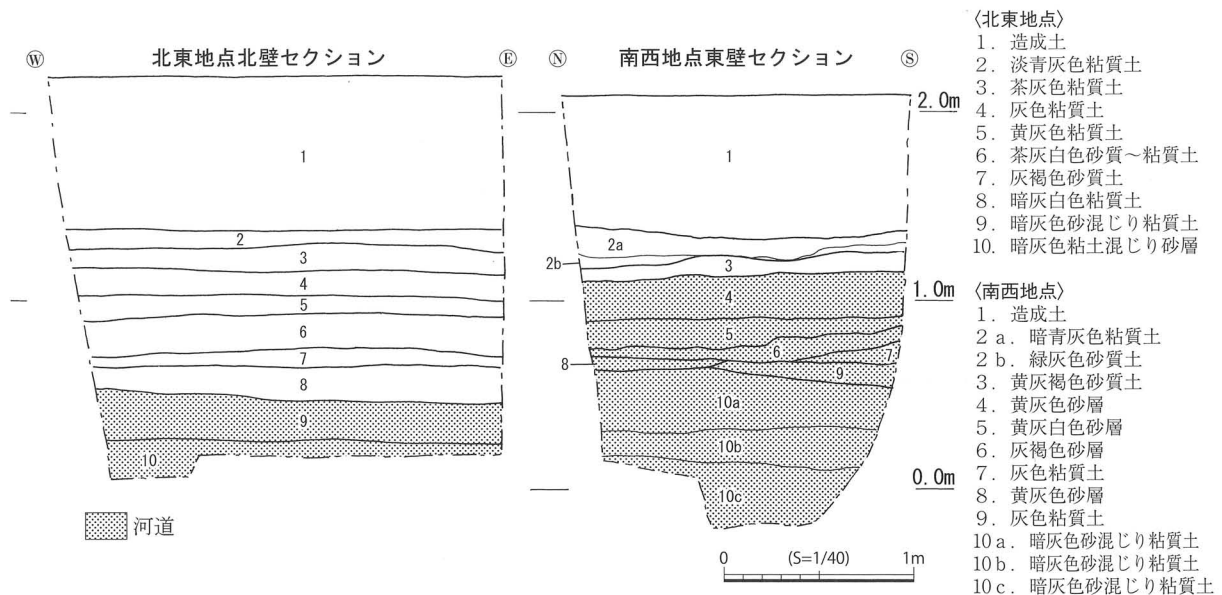


図31 土層断面図



図32 北東地点の層序

河道由来の層と考えられる。

10層：暗灰色粘土混じり砂層である。本層は水分が多く含まれ、調査底面からは湧水が認められた。上面標高は0.23mである。9層同様に、弥生時代中期以前に堆積した河道層と考えられる。

【遺構・遺物】(図31・33) 本地点では遺構が認められず、遺物も極めて希薄であった。調査のねらいであった中世

段階の南北溝についても、本地点では認められないため、当該溝が本地点まで伸びないことが判明した。

(2) 南西地点

【層序】(図31・33) 南西地点の層序については以下の通りとなる。本地点の層位は河道堆積層が主体となることが特徴である。なお、土層の時期については遺構・遺物がみられないため判然としない。

1層：1922(大正11)年の岡山医科大学建設時の造成土。上面は現地表面で標高約2.2m、厚さは0.88mを測る。

2層：近代耕作土と考えられる土層で、2a層(暗青灰色粘質土)および2b層(緑灰色砂質土)に区分しうる。2b層下面には鉄分の沈着が認められる。上面標高は、2a層が1.32m、2b層が1.24~1.30mとなる。

3層：黄灰褐色砂質土で鉄分が多く、マンガンも含まれる。上面標高は1.17~1.26mである。上面に緩やかな凹凸がみられ、本層を加工して近代に畦畔が作られていた可能性がある。その場合、上層の2b層が伴うものと考えられる。本層の形成時期については判然としないが、近世前後のものと推定される。

4層：黄灰色砂層で、上面標高は1.15mを測る。鉄分・マンガンを多く含む。白色・灰黄色細砂を層全体に多く含む。本層~6層については、洪水砂と考えられる一連の砂層である。6層底面の高さが南から北に向かって低くなることから、おおむね東西方向に河道状の地形が広がっていたものと考えられる。層の順序から判断すれば4~6層は中・近世あたりに堆積した可能性が高い。

5層：黄灰白色砂層で上面標高は0.90mを測る。鉄分および白色・灰黄色細砂を層全体に多く含む。

6層：灰褐色砂層で、上面標高は1.15mを測る。鉄分を多く、下層由来の灰白色粘土ブロックを含む。

7層：灰色粘質土で、多くは上層の洪水砂で失われている。上面標高は0.68~0.78mを測る。7~9層については、灰色を基調とするもので、一連の層の単位と考えられる。7・9層の粘質土と8層の砂層からなる河道堆積層と考えられる。上記4~6層と同時期に形成されたか、あるいはそれ以前の形成層と考えられるが、時期の特定は困難である。

8層：黄灰色砂層で、鉄分を多く含む。上面標高は0.70mを測る。

9層：灰色粘質土で、黄灰色砂ブロックを含む。上面標高は0.68mを測る。

10層：暗灰色砂混じり粘質土で、暗灰色砂ブロックの含み方から3層に細分した。10a・c層は暗灰色砂ブロックを多く含み、10b層は少ない。上面標高は、10a層が1.14m、10b層が0.83m、10c層が0.69mを測る。10c層底面は水がにじみ出る状況であり、湧水層に近いものと考えられる。土質から10a~c層もまた河道堆積層と考えられる。時期については判然としないが、標高から弥生時代にまで遡る可能性が高い。



図33 南西地点の層序

(3) 調査の成果

北東地点・南西地点の2箇所の試掘・確認調査では、いずれも遺構は認められず、遺物も極めて希薄な状況が判明した。2つのトレンチから想定しうる、学生サーク

ル棟新営地点の旧地形および土地利用の様相は次のようになる。まず弥生時代においては、集落およびその周辺に広がるような微高地が形成されていたとはいいがたく、全体として河道ないしは湿地状の土地であったことが推定される。古墳時代～中世頃まで、南西地点では河道を示す地形が続く一方で、北東地点付近では微高地状の土地を形成する。そして北東地点では、少なくとも中世以降において耕作域が展開したものと考えられる。近世段階には、南西地点にみられた河道が埋没し、北東地点もあわせて全体で耕作域が広がったものと考えられ、その様相は近代まで継続する。このように推定される旧地形の状況を遺構・遺物の希薄さとあわせて考えると、学生サークル棟新営地点は、弥生時代中期以降の鹿田集落の外縁にあたるものと推定される。

鹿田地区における既往の調査状況に照らせば、北東地点でみつかった中世頃の耕作土の存在が判明したこと、鹿田遺跡第6次調査の中世溝が今回の調査地点まで伸びるものではないということ、旧地形を知る手がかりが得られたことが、本調査の重要な成果といえる。（光本）

第3節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

2009年度の鹿田地区における立会調査は17件が実施された。学生サークル棟新営工事および2件の発掘調査（第20次A・B地点）が実施されたことにより、2008年度立会件数（6件）よりも増加したものと見える。立会調査において中世層以下まで掘削が及んだ箇所は、鹿田遺跡第20次調査A地点の矢板打ちに伴う掘削（調査番号3）であるが、それについては本章第1節に同地点の発掘調査概要を掲載しているため、本節では省略する。（光本）

表3 2009年度鹿田地区調査一覧

番号	種類	構内座標	所属	調査名称	細目調査名称	調査期間	掘削深度 (GLm)	内容
1a	発掘	BZ-CC31-40	病	中央診療棟新営に伴う発掘調査（共同溝地点）【鹿田遺跡第20次発掘調査A地点】	共同溝地点	6.18～7.31（発掘調査）、 8.5～24（基礎下調査）	1.84	弥生時代～近世の遺構・遺物
1b	発掘	BS20-23、BT-BW20-24、 BX-CD13-25	病	中央診療棟新営に伴う発掘調査（本体工事地点）【鹿田遺跡第20次発掘調査B地点】	本体工事地点	10.15～2.22（発掘調査）、 3.1～8（基礎下調査）	1.88	弥生時代～近世の遺構・遺物
2	試掘 確認	CR70-71、CW75	事	学生サークル棟新営に伴う試掘・確認調査			北 東2.12、 南西2.29	
3	立会	CB30、CB40	病	鹿田遺跡第20次調査A地点の矢板打ちに伴う掘削		5.22・28	1.1～1.3	中世層まで掘削。または既設内
4	立会	DA-DG37	事	プール配管改修工事		6.19	0.6	既設・造成土内
5	立会	AD24、AF50、AG49-50、 BJ51、CK11-12、CJ47	事	案内誘導板設置工事		6.25・29	0.6～0.9	既設土内
6	立会	CE-CG70-74、CK-CV68-69、 CT71、CV-W68-70、 CS-CW75-76	事	学生サークル棟新営工事	屋外配管	8.17・20	樹0.75 ～ 0.95、管路 1.15～1.38	管路：近代層まで掘削。樹： 造成土内
7	立会	CK62、CK69、CQ68			電気ハンドホール	8.24・25・31・9.3	0.9	造成土内。東西溝（時期不明） 確認。
8	立会	CS75.76			その他工事	11.19	0.9	近世層まで掘削。
9	立会	CS72			電気設備	11.19	0.75	既設土内
10	立会	CLCJ64-66	医	自然生命科学支援センター（動物資源部門） 改修工事	機械設備空調工事	7.30、8.3	0.9～1.1	既設土内
11	立会	CK-CM44-66			ガス配管	8.4～8.7	0.85～0.9	造成土内～近世層まで掘削
12	立会	BZ25	病	中央診療棟本体調査地点・矢板位置確認		8.31	0.9	既設・造成土内
13	立会	BT-CD25-30	病	中央診療棟共同溝地点・排水管柵		9.1・2	0.8～0.9	近世層まで掘削。
14	立会	AC-AV67-69	病	西側団障改修		9.3	0.3～0.7	造成土内
15	立会	BY-BZ45-46	事	排水管取り替え工事		10.22	1.0	近世層まで掘削。
16	立会	BH34、BM34、 BD-BV35-42	病	高精度放射線治療棟	ガス配管	12.14・15・17・22・24、 1.25・28	0.8～1.3	既設・造成土内、一部近代層・ 包含層確認。
17	立会	BG32、BH35、BL35			旧矢板位置確認	1.25・28	1.0	既設土内、旧矢板位置確認。
18	立会	AG-AM25-27	病	外來診療棟周辺外構改修工事		1.13・14	0.7	造成土内
19	立会	BD-BJ57-59	医	構内浄化槽（汚物槽）撤去他工事・配管		2.17・18	0.9～1.1	包含層（近世・近代？）確認



図34 2009年度の調査地点【2】－鹿田地区－

第3章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理・研究

1 調査資料の整理

2009年度の調査資料の整理は、鹿田遺跡14次調査（岡大病院病棟）の接合のほか、鹿田遺跡17次調査（医学部基礎棟）・同18次調査（岡大病院中央診療棟）出土遺物の洗浄、鹿田遺跡第19次調査（岡大病院渡り廊下）の貝塚部分の洗浄を中心に行った。これらは、いずれも鹿田キャンパスの発掘調査資料であり、平安時代～鎌倉時代の資料を中心に弥生時代～古墳時代の遺物を含む。中でも、鹿田遺跡第19次調査の貝塚資料は、弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものであるが、その特殊性から過酸化水素水を用いて、貝や骨などを極力痛めないような洗浄を試みた。

報告書の作成については、鹿田遺跡第13次および第15次調査（総合教育研究棟）の図面作成・写真撮影から文章作成・編集までの作業を年度末までに終了し、2010年度当初に刊行する準備を整えた。また、津島岡大遺跡第31次調査（大学生協建物）に関しては、報告に必要な頁数が比較的少ないことから、本紀要への掲載によって正式報告とすることとなり、図面作成から文章化そして編集までの作業を行った。

2 調査資料の保存処理

a. 木製品のPEG保存処理作業

本年度における調査資料の保存処理として、木製品のPEG保存処理作業を実施した。第9期にあたる。その開始時期は2010年2月であり、8期終了から大幅に作業間隔があくこととなった。これは、前年度（2008年8月）に、第8期の保存処理作業を終了し、次の保存処理の準備期間中に、PEG含浸槽に不具合が生じ、本体を本センター外部に搬出しての大きかりな修理が必要となったためである。

含浸槽の修理終了後、第9期の保存処理を、年度末も近い2010年2月9日から開始し、本年度は40%の状態を

表4 第9期のPEG保存処理工程

期	年月日	作業内容
第9期	2010年2月5日	濃度40%：処理開始

表5 既往のPEG保存処理一覧

期	処理期間（延べ期間）	処 理 対 象 調 査
第1期	1992年2月～1993年11月 （1年9ヶ月）	鹿田遺跡第1次（附属病院外来診療棟）、第2次（NMR-CT室）
第2期	1994年6月～1996年8月 （2年2ヶ月）	鹿田遺跡第3次（医療短期大学部校舎）・第4次（医療短期大学部校舎周辺配管）・第5次（管理棟）、津島岡大遺跡第3次（男子学生寮）・第5次（大学院自然科学研究科棟）・第6次（工学部生物応用工学科棟）
第3期	1996年12月～1999年6月 （2年7ヶ月）	鹿田遺跡第3次、津島岡大遺跡第3次・第6次
第4期	1999年7月～2000年12月 （1年5ヶ月）	鹿田遺跡第3次・第4次、津島岡大遺跡第3次
第5期	2001年1月～2002年3月 （1年2ヶ月）	鹿田遺跡第3次・第4次、津島岡大遺跡第3次・第9次（工学部生体機能応用工学科棟）・第10次（保健管理センター）・第12次（附属図書館）・第13次（福利厚生施設北棟）
第6期	2002年11月～2004年8月 （1年10ヶ月）	鹿田遺跡第7次（医学部基礎棟）、津島岡大第19次（コラボレーション・センター）・第22次（環境理工学部校舎Ⅱ期）
第7期	2005年11月～2007年8月 （1年9ヶ月）	津島岡大遺跡第23次・24次（文化科学系総合研究棟）
第8期	2007年8月～2008年8月 （12ヶ月）	津島岡大遺跡第23次調査：縄文時代の杭・流木、同遺跡第15次調査：弥生時代前期杭

保つこととなった。保存処理の対象となった遺物は、津島岡大遺跡第22次調査の木製品（平安時代の大溝出土）と同第30次調査の杭（近世・近代の用水路出土）である。また、本年度は外部委託による保存処理の実施はなかった。（山本）

第2節 調査成果の公開・活用

1. 公開・展示

a. 岡山大学60周年記念事業企画展「水と人の環境史—岡山平野の五千年—」

2009年度は、2009年8月5日～23日までの17日間、岡山市デジタルミュージアムを会場に、企画展「水と人の環境史—岡山平野の五千年—」を開催した。本企画展は岡山大学創立60周年記念事業の一環として、大学の支援のもとに環境理工学部との共催に加え、環境学・自然科学・教育学・社会文化科学などの各研究科の協力を得たものである。本学の環境学、農学、森林学、地理学、地質学、歴史学、考古学といった異分野の研究成果を総合的に展示するという点で、これまでにない取り組みが可能となった。見学者は合計で2,200名を数えた。

全体テーマは「水」をキーワードに、縄文時代から現代までの人と環境との関わりを、様々な視点の研究成果を通じて描き出し、将来への展望を見いだすことにあった。

b. 内容

展示会は、会場展示・ワークショップ・出張講義・講演会・タイアップ食事会という構成である。

①会場展示（図35） 岡山平野の海岸線の変化を映像で大きく映し出す映像展示を冒頭に設定した。縄文時代～中世までの岡山平野における海岸線の動きや地形の変化を見事に描き出すインパクトのある映像は、来場者の注目を集め、アンケートでも好印象であったことが示された。

次いで「農耕と環境」、「温暖化と社会変化」、「城下町と農村」、「水への想い」の4つのコーナーにおいて、水田・水路が生み出す環境と人との関わり、森林や都市の環境問題、そして将来の水資源の危機等を取りあげた。
農耕と環境 水田・水路に注目し、発掘調査で出土した杭や水門などの構造物を、実物を組み立てて展示し、技術的な進歩を具体的に示すなかで、自然環境に即した人間の営みを考える展示とした。水田畦畔を剥ぎ取った床面展示も本コーナーを特徴づけるものとなった。併せて環境理工学系の研究成果から、水田・水路が周辺の環境に果たしている役割やその影響を科学的なデータを含めたパネル展示で示した。水田は、食糧生産だけでなく洪水予防機能や新たな生態系を生み出す役割を担っている。しかし自然をうまく利用しつつ整えられてきた水田環境は、現在失われつつあり、そうした現代社会の問題点や、今後人間と環境とが共存する可能性についても目を向けてもらう展示を目指した。

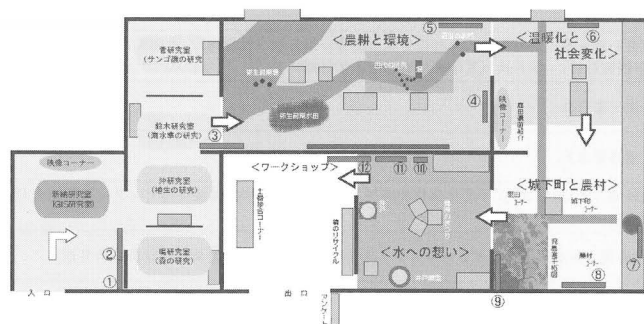


図35 展示会場平面図

温暖化と社会変化 かつて温暖化を経験した奈良・平安時代には、畑作がさかんに奨励されたことが文献資料に窺える。一方、発掘調査でイネ以外の畑作物の増加や食器の変化が見られ、農業環境の変化を考古資料から窺うことができる。また歴史学から古代・中世の戸籍の分析成果より、当時の人びとの平均余命の短さ（男性32歳、女性27歳）や、多産多死の社会であったことが示され、当時の過酷

な状況が印象付けられた。その要因のひとつとして気候温暖化と食糧難に注目し、農業の問題について考える展示とした。

城下町と農村 江戸時代の岡山城下町と周辺農村との物資の循環について、文献資料と発掘調査で出土した野壺を復元、展示した。近世に入ると、年貢米以外に現金収入を得られる綿花や煙草などの商品作物の栽培が行われるようになるが、そのためには「施肥」が必要不可欠である。発掘調査からは、そのことが堆積した耕作土の質の違いや多数の野壺の出現として現れており、野壺の展示はこの点に注目したものである。城下町で集められた金肥（人糞等）が周辺農村で利用され、農村の産物が城下町で消費されるといった城下町と農村の間のリサイクルから、持続可能な循環型社会のあり方について考えた。

一方、人間の生産活動が活発になるにつれ、人里に近い森林では徹底した収奪が進み、禿げ山となっていた事実や、海辺でも干拓による耕地拡大により干潟が消失し、生態系が大きく変化していた状況を示した。近世社会が環境に優しい「循環型社会」と言われる一方で、里山・里海では環境破壊がかなり進んでいたことにも改めて注目した。

水への想い 「地下水」に注目したコーナーである。井戸から出土した考古資料、具体的には井戸枠や井戸に入れた多くの出土品を展示し、井戸で行われたまつりの状況をイラストもまじえて復元し、いにしえの人々が地下水を如何に大切にしてきたかをアピールした。対照的に現在問題となっている地下水汚染の実情を環境理工学部の研究成果データを併せて紹介し、地下水への人びとの意識の変化を印象づけた。最後に、気候変動と水資源の問題など、将来の水利用の危機について示し締めくくりとした。

キーワードの「水」をイメージさせることを目的として、会場の床に川や用水路を色の違うカーペットで示した。デジタルミュージアムでは小学生や親子連れも多く来場が見込まれることから、この床面展示を利用した子供向けクイズを用意し、展示とともに楽しめる企画を設定した。

②ワークショップ 展示会場内に銅鏡のリサイクル体験として、破鏡を使用したペンダント作りコーナーを設置した。リサイクル体験から資源の有効活用を考えることを主なねらいである。体験コーナーはセンター展示会の恒例ともなっており、来場者の方がレプリカとはいえ実際の遺物に触れ、親しみを感じられることを目指した企画である。

③出張講義 展示会場内に設定した4分野の研究ラボ展示コーナーで、期間中に6回の「岡山大学夏休み出張講義」を行った。

「もりは緑のダム？」（大学院自然科学研究科・嶋一徹准教授）では森林が生態系に果たしている役割・機能についてわかりやすく解説、「珊瑚礁の成り立ちと人びとの生活」（同教育学研究科・菅浩伸教授）では、温暖化による海水面の上昇によってどのような問題が起こっているか、多数の写真パネルとともに説明された。「岡山平野の地層が語る海進や海退」（同自然科学研究科・鈴木茂之准教授）

では地質学の分野から、また「現在の外来種は将来の自生種？」（同環境学研究科・沖陽子教授・中嶋佳貴助教）では植生の変化をとりあげた最新の研究成果が、各教員によってわかりやすく説明された。毎回30～40名のほぼ参加者があり、なかには毎回の講義に訪れる熱心な聴講者もみられた。

④講演会 最終日には「岡山平野の環境と社会」をテーマに記念講演会をデジタルミュージアム講義室において開催した。講師は千葉喬三岡山大学学長、永井明博大学院自然科学研究科教授、新納泉大学院社会文化科学研究科教授の3名に依頼した。まず永井教授が「自然界における水の循環」のテーマで流域水文学の分野より、水循環について地球レベルから人間の暮らしに身近な水との関わりまでをわかりやすく述べた。さらに地球温暖化による洪水・渇水の頻発や地下水の過剰利用などを例にあげ、現在の水に関わる問題を認識する必要性を説き、締



図36 出張講義風景（嶋准教授）



図37 講演会風景（千葉学長）

れた生態系である森林と水との関わり、森林の利用の歴史的な推移について述べられた。最後に水田耕作の特色をとりあげ、水と人との密接な関係性を強調し、記念講演会に相応しい締めくくりとなった。

講演会には110名を超える熱心な参加者が会場を埋め尽くした。

⑤タイアップ食事会『ランチで味わう旧児島湾の海の幸』

児島湾を例に里海的环境変化を体感するという企画である。一例をあげると、縄文時代以来貝塚で多数出土するハイガイのように、旧児島湾での名産であったものが環境変化により減少・絶滅している。そうした事実を学ぶとともにそれらに関連する食材を使った料理を味わうことを目的とした。また現在の児島湖環境保全活動についての紹介も同時に行い、過去から現在の環境変化について意識づけることができた。

8/15・23日に計45名の参加を得た。献立の作成と解説は岡嶋隆司氏（メルパルク岡山）に依頼した。献立は江戸時代の文献から復元した「藻貝の夏大根鉄砲和え」「ひらのなます」など耳にも目にも目新しい献立が並んだ。参加者からも様々な質問が飛び出し、終始和やかな雰囲気企画となった。

c. アンケート結果

アンケート回収率は21%（466枚）である。年齢（図38-1）をみると、60代以上と、20代がそれぞれ2割、

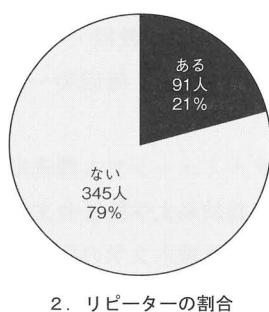
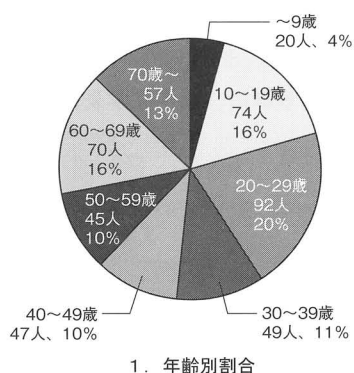


図38 アンケート結果

めくられた。新納教授は「環境にはぐくまれた人びとの躍動」と題し、遺跡から発見される災害の痕跡を題材に環境と人びとの暮らしぶりを浮き彫りにした。また岡山県の地形的な特徴とこの地に展開した人間の営みについて、現在取り組まれている弥生時代から古墳時代の最新の研究の一端を紹介した。

千葉学長による特別講演「水・森・人」では、水の惑星・地球の特質から生命の誕生という大きなスケールの話にはじまり、生産者・消費者・分解者の関係が最も完成さ

れた。これまでの展示会では40～50代の比率が極端に低下する傾向がみられたが、今回のテーマが様々な分野を総合的に展示した幅の広いものであったことや、会場の利便性が来場者の年代構成にも影響したと考えられる。

またいつも高い比率となるリピーターの割合（図38-2）は、今回は21%と、初めての来場者の比率が高かった。これは環境問題に対する関心の高さが、新たにリピーターを得るきっかけとなったと評価したい。

d. まとめ

今回のテーマは考古学からみると取り組みにくい内容であった。しかし多分野を総合した岡山大学ならではの取り組みは、展示内容に深みを増したことは確かである。企画段階では他分野の研究成果とのすりあわせ等が難しい部分もあったが、あえてそれを積極的に試みず、それぞれの研究のレベルの高さをアピールした展示は予想以上の反響を得た。今回は水と環境問題を主としたが、こうした異分野とのコラボレーションから生み出される課題は無限にあり、それを今後の研究や公開にも活かしつつ、新たな取り組みを考えていきたい。

（岩崎）

2. 資料・施設等の利活用

a. 教育機関への支援（授業などの受け入れ）

①博物館実習：8月4～11日、9月25日（補講）

例年通り、岡山大学文学部が開講している学芸員資格取得のための講義（博物館実習）の受け入れを行った。期間は8月4～11日で、そのなかの8日間である。受講生全体を1班10名前後とする4班に分けて、各班2日間の受講日程を組んだ。

実習1日目は、同期間中に実施していた津島岡大遺跡第32次調査現場における発掘調査の体験である。これは、博物館における一次資料の収集に相当する部分の学習を目的としたものである。2日目は、考古資料の取り扱いに関する専門的知識の修得を目指した構成とした。例年は、基礎的な整理作業である土器・石器の洗浄、注記、接合作業あるいは木製品の保存処理などを組み込んだ内容を設定しているが、本年度は、実習期間が本センターの特別展示会開催期間内である上に、会場が学外の岡山市デジタルミュージアムであったため、実施不可能な洗浄・保存処理の作業を博物館のバックヤードや展示の見学に変更した。その結果、土器の注記・接合作業によって遺物の取り扱いや観察方法を、また、貝塚出土の貝を仕分ける作業によって有機遺物の取り扱い方法を習得してもらい、展示などの見学によって博物館での具体的業務に関する基礎的知識を身につけるという実習内容となった。昨年度に続いて本年度も、実習のまとめとして受講生による報告会の時間を最後に設けた。3グループに分かれての発表を行ったが、こうした発表内容からも、展示会開催中の博物館の場を有効に利用できたことが窺われた。

担当教員は、山本悦世（教授）・岩崎志保（助教）・光本順（助教）・池田晋（助教）である。また、1日目の受講が困難であった学生1名に対して、9月25日に発掘調査の補講を行った。

②中学生の職場体験：岡山市立竜操中学校（5月19～21日、生徒2名）

岡山市立高松中学校（11月18～20日、生徒3名）

岡山市立岡北中学校（2010年2月3日～5日、生徒3名）

本年度は、岡山市内の中学校3校から「中学生の職場体験」の受け入れ依頼があった。期間は各校とも3日間で、計8名の生徒が本センターで職場体験を行った。

作業内容は、遺物の洗浄・注記・復元、土器と礫の仕分けなどの最も基本的な整理作業に加えて、木器の保存処理や木材のサンプリングあるいは種子の顕微鏡撮影など、研究・分析的な仕事の体験も組み込み、大学ならではの内容作りに努めた。また、1校については、職場体験の期間に鹿田遺跡で発掘調査がされていたため、調査に参加する機会を設けた。最後に簡単な反省会を行い、感想等を述べてもらったが、想像とは違う作業内容作りに驚くと同時に、多様な仕事が多くの人たちによって進められ、一つの事業が達成されていく点には、特に感銘をうけたようなコメントも出された。

③岡山大学内の授業などの受け入れ 津島岡大遺跡第32次調査の発掘調査現場では、本学の文学部・理学部・教育学部が行っている講義の一貫としての現地見学が行われた。

④2009年度非常勤講師への委嘱依頼 岡山大学文学部長より、表7の要領にて博物館実習における非常勤講師への委嘱依頼を受け（2009年3月16日）、承諾した。

⑤その他

展示室等の見学・視察

- ・花園大学 高橋克壽ほか9名の学生（2009年4月）
- ・津島小学校 6年18名（2009年4月）

表6 2009年度非常勤講師への委嘱依頼内容

職名	氏 名	担当科目	委託期間	備考
教 授	山 本 悦 世	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助 教	岩 崎 志 保	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助 教	野 崎 貴 博	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助 教	光 本 順	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助 教	池 田 晋	博物館実習	平成21年4月1日～平成22年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）

b. 調査・研究への支援

①資料調査および見学・視察

- ・津島岡大遺跡の石器観察：山口県埋文センター 小南祐一（2009年10月）
- ・鹿田遺跡第1次調査ガラス滓調査：韓国国立扶余文化財研究所 田庸昊（2009年12月）
- ・鹿田遺跡第1次調査弥生土器：広島大学大学院 辻村哲農（2009年12月）
- ・津島岡大遺跡第6・9次調査縄文後期～弥生前期土器の種子圧痕調査（科学研究費基盤研究Aに基づく）：
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 山本悦世（2009年10月～2010年2月）

②機器・図書 協力

赤外線カメラ使用による資料分析

- ・岡山市教育委員会 草原孝典（2010年1月）：岡山市大供本町遺跡、近世木簡に残る墨痕の観察
- ・岡山市教育委員会 西田和浩（2010年2月）：岡山城本丸、墨書土器の観察

図書の外部貸出：64件（岡山大学文学部学生ほか）

c. 資料の提供・貸し出し

①出版物等への資料提供

- ・『岡山の戦跡』（仮題）岡山県教職員組合教育運動推進センター：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 No36掲載の「駐屯地内の施設配置と各部隊の配置」図（2009年8月）
- ・『図説 岡山・玉野の歴史』郷土出版<2010年2月刊行>：津島岡大遺跡水田関連写真、鹿田遺跡平安時代遺構・遺物の写真（2009年12月）

②展示に関する遺物貸し出し・資料提供

- ・岡山県立博物館「大地からの便り2009－県内の発掘調査報告展－」7月24日～9月6日岡山県立博物館開催：鹿田遺跡第19次調査出土弥生土器・調査関連の写真（2009年7月）
- ・独立行政法人産業技術総合研究所、「地質情報展おかやま2009」9月5・6日岡山市デジタルミュージアム開催：津島岡大遺跡15次調査土坑1サヌカイト集積状況の写真（2009年7月）

d. マスメディアへの公開

- ・山陽新聞：6件
展示会関連記事（7～9月）4件。津島岡大遺跡第31次調査状況（10月）。鹿田遺跡第20次調査状況（1月）。
- ・岡山日日新聞：6件
コラム「岡大構内遺跡の一品」の連載：5月…縄文の櫛、7月…貯蔵穴、10月…石器、11月…猿形木製品。
鹿田遺跡第19次調査風景写真提供（2009年7月）。展示会紹介（7月）。
- ・NHKプラネット四国より：鹿田遺跡第1次調査井戸1出土の雑草メロン
四国スペシャル『四国謎解き行脚 秋編』9月4日20時総合テレビで放送（四国向け）

（山本）

第3節 2009年度調査研究員の個別研究活動

1. 科学研究費採択状況

- 山本悦世：基盤研究A「レプリカ・セム法による極東地域先史時代の植物栽培化過程の実証的研究」
（研究代表者：小畑弘己）研究分担者
- 野崎貴博：若手研究B「吉備地域における群小墳の展開過程からみた古墳時代社会構造の研究」研究代表者
基盤研究A「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」
（研究代表者：新納 泉）研究分担者
- 光本 順：若手研究B「人物埴輪からみた古墳時代のジェンダー構造に関する実証的研究」研究代表者
基盤研究A「造山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時空間研究の刷新」
（研究代表者：新納 泉）研究分担者

2. 論文・資料報告

- 山本悦世：「邑久古窯跡群における須恵器生産とその背景」『考古学研究会例会シンポジウム記録6』
- 岩崎志保：「津島岡大遺跡第31次調査（福利厚生施設東棟新営）」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』（編著）
- 野崎貴博：「2008年度陵墓調査限定公開・立入り観察報告」『考古学研究』第56巻第1号（共著）
「発掘調査制度を比較する」『考古学研究』第56巻第3号（共著）
- 光本 順：「徳島地域における前期古墳の副葬品配置」『一山典還暦記念 論集 考古学と地域文化』
「クィア考古学の可能性」『論叢クィア』Vol. 2

3. 研究発表など

- 光本 順：「身体表現と地域社会—特に分銅形土製品を例に—」考古学研究会岡山例会第14回シンポジウム・
吉備弥生社会の新実像（岡山大学、1月9日）
「異性愛規範を問題化する—クィア考古学の試み—」近江貝塚研究会第196回例会
（滋賀県埋蔵文化財センター、2月27日）
- 池田 晋：「岡山地域の打製石器石材利用の様相」中四国縄文研究会20周年記念大会（広島大学、6月27日）

4. 講演など

- 山本悦世：「邑久古窯跡群から備前焼へ」備前陶器窯跡国指定シンポジウム（備前市、8月29日）
「考古学から探る中世の鹿田庄」吉備路郷土館歴史講座（総社市、2月14日）
- 野崎貴博：「鹿田遺跡」大地からの便り2009—県内の発掘調査報告会—（岡山県立博物館、8月22日）

5. 資料収集・実態調査

- 山本悦世：縄文後期～弥生前期の土器圧痕調査（岡山市）：津島岡大遺跡・百間川沢田遺跡・百間川原尾島遺跡・上東中嶋遺跡
大学博物館の実態調査（愛媛大学）
中近世陶磁器生産地における遺物および生産遺跡の調査（岐阜県）
- 岩崎志保：構内遺跡出土資料関連調査（岐阜県・大阪府）
大学博物館の実態調査（愛媛大学）
- 野崎貴博：後期古墳・群小墳の踏査（千葉県・大阪府・福岡県）
埴輪棺の実見（愛知県岩場古墳）
- 光本 順：科学研究費課題に基づく人物埴輪に関する資料見学（千葉県・栃木県・東京都・愛知県）
科学研究費課題に基づく古墳時代石棺に関する資料見学（大阪府・群馬県）
弥生時代分銅形土製品に関する資料見学（鳥取県）
- 池田 晋：縄文時代打製石器の資料収集（中四国地方）
岡山平野の条里遺構の資料収集

第4章 2009年度における調査・研究のまとめ

調査 2009年度は、ほぼ年間を通じて何らかの発掘調査が実施された年度であったといえる。津島地区で1件、鹿田地区で2件、合計3件の発掘調査を実施した。津島岡大遺跡第32次調査（教育学部剣道場新営）を2009年7～10月に、鹿田遺跡第20次調査A地点（中央診療棟新営：共同溝地点）を2009年6～8月に、同20次調査B地点（中央診療棟新営：本体工事地点）を2009年10月～2010年3月にそれぞれ実施した。一部の発掘調査については同時並行で実施することとなった。

津島岡大遺跡の発掘では、縄文時代後期の河道際の貯蔵穴群が見つかった点、および当時の旧地形について既往の調査と照らし合わせていっそう明らかとなった点、そして弥生時代前期の水田畦畔を確認した点が注目すべき成果といえる。

一方、鹿田遺跡の発掘では、A・B両地点とも、既存の建物基礎により多くの包含層が失われていたにもかかわらず、建設による破壊を免れた部分の調査によって豊富な遺構・遺物を確認しえた。特に、これまで実態が明らかでなかった室町～戦国時代の遺構・遺物がB地点において確認された点は、鹿田遺跡の集落史を考える上で重要な成果となった。

こうした発掘調査に加え、津島と鹿田の両地区で、3件の試掘・確認調査と68件の立会調査を実施し、両地区における細やかなデータ蓄積を継続した一年であったといえよう。

研究 2009年度の刊行物として、紀要1冊（『紀要2008』）、そしてセンター報2冊（『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報42号』『同43号』）を刊行した。発掘調査報告書の刊行こそなかったものの、『紀要2008』において津島岡大遺跡第31次発掘調査に関する正式報告を行った。あわせて、2010年度前半刊行に向けた鹿田遺跡第13・15次発掘調査報告書の作成作業を精力的に進めた。

公開・教育 複数の調査が進行するなか、2009年8月に行った展示会は、当センターで毎年行ってきたキャンパス発掘成果展の規模を大きく上回るものとなった。岡山大学創立60周年事業の一環として実施の企画展『水と人の環境史—岡山平野の五千年—』（於 岡山市デジタルミュージアム）は、学内の異分野融合による展示企画であり、講演会や出張講義、食事会など、多くの企画を盛り込んだものとなった。テーマと内容が、やや専門的で難解ではないかと心配したものの、見学者にはその難解さが良い意味で刺激をもって受け止められた面もあったようである。今後も、こうした異分野連携企画による展示・公開活動についても模索していきたい。

教育機関への支援として、博物館実習や中学生の職場体験を受け入れた。博物館実習では、実習時期の要因もあり、発掘実習の他、上記展示会の場を活用した実習の試みを行った。中学生の職場体験は、例年より1件多い3件を受け入れた。また、津島岡大遺跡第33次調査および鹿田遺跡第20次調査B地点の現地説明会を開催し、多くの参加者を得た。

まとめ 2009年度は3件の発掘調査を実施し、調査研究員の全員が発掘調査に携わるなかで、他の業務・室内整理を並行して進めていくこととなった。特に年度前半に実施した異分野融合による展示会は、その学術的意義の重要性の反面、業務の多忙さに拍車をかけた面もあった。複数の業務が並行して進行する過程において、調査研究委員にはいっそうの作業の効率化、および明確な目的意識をもった取り組みが求められるものと考えられる。

一方、発掘調査によって資料がさらに蓄積されることとなったが、膨大となった資料の保管スペースの問題が、いよいよ切実なものとなってきた一年でもあった。文化財の保管場所を適切に確保することは、今後の資料の利活用に資するとともに、通常業務の円滑な遂行にとっても不可欠なものとなる。今後、有効な対策を講じていく必要がある。

（光本）

付 編

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

(平成16年4月1日)
(岡大規程第93号)

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大規則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

(自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

(教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

(副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

(2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規

〔平成16年4月1日〕
〔学 長 裁 定〕

(趣旨)

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長
- 三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名
- 四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人
- 五 センターの調査研究室長
- 六 施設企画部長

2 前項第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(事務)

第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

Ⅱ. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等

- 1) 安全で機能的な服装にする。
- 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
- 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
- 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
- 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

2. 掘削

1) のり面の角度

造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。

2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業

- 1) 作業中には安全帯を使用する。
- 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
- 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。

4. 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベアー・ポンプ等）

- 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
- 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
- 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないように措置をする。
- 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
- 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

- 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
- 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
- 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。

5. 健康管理

- 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

Ⅲ. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付 表

付表1 1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地 区 名	種類	所属	調 査 名 称	調 査 組 織	調査面積 (㎡)	文献	備 考
1980	鹿 田		立会 歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島南	BD26	〃 農	寄宿舍新営	〃			
	津島北		〃 文法	合併処理槽施設	〃			
	津島北		〃 文法経	合併処理槽施設	〃			
	津島南	BD09、 BC09～11	〃	基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南	BD～BE04～ 07	〃	陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿 田		〃 医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃		〃 〃	動物実験棟新営	岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査の依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面等の調査を実施
	〃		〃 〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
1982	〃		〃 医	運動場改修	〃			
	津 島	AV06・10、 AW05・14、 AX08、BD07、 BE10	試掘	排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第1次調査へ
	津島北	AW14	発掘 法文	排水集中槽（NP-1）埋設	岡山大学	24.0	3	小橋法目黒遺跡：津島岡大第1次調査
	津島南		試掘 学	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北	AY15・16	〃 法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿 田		〃 医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃		〃 医病	外来診療棟新営	岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃		立会 医	動物実験施設関連排水・ガス管理設	岡山県教育委員会		1	
	鹿 田	AE～AN22、 AE22～26	〃 歯	電話ケーブル埋設	岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

文献
1. 光永真一 1983「岡山大学医学部附属病院動物施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
2. 河本 清 1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
3. 古留秀敏 1985「岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学埋蔵文化財調査室

付表2 2008年度以前の構内主要調査（1983～2008年度）

* 凡例								
・総合番号：調査の地区別通し番号（立会調査は選択的に保存）								
・津島岡大遺跡第1次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※1として区別している。								
・発掘調査には番号に○を付している。								
・確認調査のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に（ ）を付している。								
・立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査 ②明確な遺構・遺物を確認した調査								
・番号：年度別報告番号								
・文献：付表4・5の番号に対応する。								

付表2－(1) 発掘調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
*1	1982	－	AW14	文	小橋法目黒遺跡（津島岡大遺跡第1次調査） ：排水集中槽（NP-1）埋設	82.10.28～11.24	24	弥生時代中期・古代溝	3
①	1983	11	BE14・18、 BF17・18、BG14 BH14・15	農	津島岡大遺跡第2次調査 ：排水管理設	84.1.9～3.5	265	弥生時代早～前期集落	4
②	1983	12	BH13	農	津島岡大遺跡第2次調査 ：合併処理槽埋設	11.14～11.22 84.1.9～3.5	276	弥生時代早～前期水田関連遺構（溝他）	4
⑮	1986 1987	2 1	AV00、AW00-01	学	津島岡大遺跡第3次調査 ：男子学生寮	12.1～87.6.18、 8.24～9.5	1550	縄文時代後期～弥生時代早期の貯蔵穴と 河道および集落、弥生時代の前期～近代 の水田・溝、古代の条里関連溝	19
⑯	1986	3	BF・BG09	学	津島岡大遺跡第4次調査 ：屋内運動場	87.1.19～1.22	70	弥生時代前期の溝、中世河道	6
⑳	1988	1	AY06～08、 AZ06-07	大自	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟	6.27～89.3.19	1537	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と 河道・弥生時代末～近世の水田関連遺構	27

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
㉔	1988 1989	2 1	AV・AW04・05	工	津島岡大遺跡第6次調査 ：生物応用工学科棟	9.20～89.5.31	600	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、古代条里 関連溝、弥生時代前期～近世の水田・溝	35
㉕	1988	3	AV・AW05・06	工	津島岡大遺跡第7次調査 ：情報工学科棟	10.12～89.3.31	800	縄文後期集落、弥生時代前期～近世水田	35
㉖	1990	1	AY・AZ08	大自	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟	4.3～4.21	90	古墳時代後期の溝	27
㉗	1991	2	BD18・19	農・薬	津島岡大遺跡第8次調査（A地点） ：遺伝子実験施設	7.23～12.25	650	縄文時代の土坑、弥生時代～近世の溝	32
㉘	1991	3	BH13	農・薬	津島岡大遺跡第8次調査（B地点） ：合併処理槽	7.23～12.2	140	弥生時代溝、古代～近世水田	32
㉙	1992	1	AU～AW04	工	津島岡大遺跡第9次調査 ：生体機能応用工学科棟	7.1～93.1.29	650	縄文時代後期の貯蔵穴と河道、弥生時代 ～近世の水田址	47
㉚	1992 1993	2 1	BB～BC10～11	保	津島岡大遺跡第10次調査 ：健康管理センター	93.2.1～3.31、 4.17～7.31	400	弥生時代後期～古墳時代集落、近世耕作 関連遺構	64
㉛	1993	2	AV～AW11～12	情	津島岡大遺跡第11次調査 ：総合情報処理センター	9.14～94.1.11	640	縄文後期遺構	36
㉜	1993 1994	3 1	AV～AW13～14	図	津島岡大遺跡第12次調査 ：図書館	94.2.9～3.31、 4.1～11.30	1472	弥生時代前期水田、弥生時代中期～古墳 時代溝、古代～近世溝（条里関連）	64
㉝	1994 1995	2 1	AW～AX11～12	事	津島岡大遺跡第13次調査 ：福利厚生施設北棟	10.6～11.30、 95.7.10～10.4	816	縄文時代後期ピット、弥生時代水田、弥 生～古墳時代溝、近代耕作面	41
㉞	1995	2	BB～BC12・13	事	津島岡大遺跡第14次調査 ：福利厚生施設南棟	10.25～96.2.14	856	弥生時代前期水田、弥生～古墳時代の溝	46
㉟	1995 1996	3 1	AW00・01	サ	津島岡大遺跡第15次調査 ：サテライトベンチャービジネス ラボラトリー	96.1.16～4.25	1600	縄文時代後期・弥生時代早期の貯蔵穴と 河道、縄文時代後期集落、弥生時代前期 水田、古墳～中世水田・溝	38 72
㊱	1996	2	BD19～20	農 薬	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物実験棟新営	96.5.7～15	30.3	A地点：縄文時代と古墳時代の土坑、 B地点：中世の溝、古代の柱穴列、弥生 時代の水田	44
㊲	1996	3	AW02～04	環	津島岡大遺跡第17次調査 ：環境理工学部新営	96.5.21～1.9	1451	縄文時代後期の集落、弥生時代の溝・水 田、古代の水田	44
㊳	1998	2	BB11	事	津島岡大遺跡第18次調査 ：福利施設（南）新営に伴うポン プ槽取設	98.4.7～4.10	16	古代の溝状遺構	53
㊴	1998	3	AZ09・10	理	津島岡大遺跡第19次調査 ：コラポレーションセンター	98.7.27～99.2.18	1019	縄文後期遺構、弥生前期の河道、古墳時 代・中世の溝、近世道路状遺構・溝	65
㊵	1998	5	AY07	環	津島岡大遺跡第20次調査 ：校舎（Ⅰ期）新営に伴うポンプ 槽取設	98.10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
㊶	1998	6	AX09	工	津島岡大遺跡第21次調査 ：エレベーター設置	98.11.6～24	30.2	縄文時代中期土坑、弥生時代早期～前期 溝、古代土坑・溝	65
㊷	1998 1999	8 2	AW02・03	環	津島岡大遺跡第22次調査 ：校舎（Ⅱ期）	99.3.1～7.12	773.5	縄文後期河道・集落、弥生時代河道・水 田畦畔、古墳時代溝、古代～近世溝（条 里関連）・水田畦畔	53
㊸	1999 2000	5 1	AZ15・BA14	大文	津島岡大遺跡第23次調査 ：総合研究棟	00.2.3～7.28	1339	縄文時代後期河道・杭列、弥生前期河道・ 堀・溝、弥生中期～近世溝	56
㊹	2000	3	AZ14	大文	津島岡大遺跡第24次調査 ：総合研究棟渡り廊下建設	00.12.5～14	34.2	縄文時代後期河道・杭列	61
㊺	2000	4	BA15	農	津島岡大遺跡第25次調査 ：散水施設設置	01.1.29～31	20.0	中世～近世の溝・杭	61
㊻	2000 2001	5 1	BC～BD14～15	事	津島岡大遺跡第26次調査 ：事務局	01.3.26～9.30	1550	縄文～弥生時代の河道・貯蔵穴・土坑・ 炉、近世の溝・堀	56 61
㊼	2001 2002	2 1	BB～BC14～15	－	津島岡大遺跡第27次調査 ：創立50周年記念会館	02.2.1～6.24	1648	縄文時代後期の炉、弥生時代・古墳時代 の溝、中世の畦畔（条里関連）	66 68
㊽	2002	2	AW～AY06～08	大自	津島岡大遺跡第28次調査 ：自然科学系総合研究棟	4.30～9.20、 11.28～03.1.15	1798	弥生時代前期の畦畔、中世～古代の畝・ 溝	71
㊾	2002	4	BF16	農	津島岡大遺跡第29次調査 ：共同溝	02.9.18～10.3	62.6	弥生～古墳時代の溝・ピット	71
㊿	2007	1	BC19・20	イ	津島岡大遺跡第30次調査 ：岡山大インキュベータ	8.1～12.17	1035.4	縄文～近代の遺構・遺物、古代の道路状 遺構、弥生～古墳の溝	93
㊱	2008	1	AX04	生協	津島岡大遺跡第31次調査 ：岡山大学生協東福利施設	6.17～8.22	212.0	弥生時代前期の畦畔、古代の道路状遺構、 縄文～近世の遺物	95

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
①	1983 1984	9	AU～BD28～40	医病	鹿田遺跡第1次調査：外来診療棟	7.27～11.22 84.1.9～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世集落	7
②	1983	10	BG～BH18～21	医病	鹿田遺跡第2次調査：NMR-CT室	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落	7
⑩	1986	1	CN～CU27・28、 CT～CY19～27、 CX～DD16～25、 DD～DG22・23	医短	鹿田遺跡第3次調査：校舎	6.2～11.29	2390	中世の集落、古代の河道と橋脚	10

付 表

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
⑫	1987	3	DD~DF25、 DG~DI27・28	医短	鹿田遺跡第4次調査 ：校舎周辺の配管	11.2~11.21	30	古代の河道	10
⑬	1987	2	BB~BH35~42	医病	鹿田遺跡第5次調査：管理棟	10.6~88.3.2 88.3.23~3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落	24
⑯	1990 1991	2 1	BW~CC67~71	ア	鹿田遺跡第6次調査 ：アイソトープ総合センター	11.20~91.6.30	690	弥生～古墳時代の集落、中世集落	40
⑮	1997 1998	4 1	BR55~BX61、 BY56~57	医	鹿田遺跡第7次調査：基礎医学棟	98.2.27~8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落、近世の水田・溝	50 53
⑳	1998	4	BP~BS30~32	医病	鹿田遺跡第8次調査：R1治療室	98.7.28~9.1	165	古墳時代溝・中世溝	53
㉑	1998 1999	7 1	CD33~37、 CE~CF28~37、 CG~CJ20~37、 CK~CL25~37	医病	鹿田遺跡第9次調査：病棟	98.11.27~99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中世～近世集落	53
㉒	1999	3	CD~CE10~12、 DD~DF16~22	医病	鹿田遺跡第10次調査：共同溝関連	99.5.7~10.14	244.1	古代の杭列（河道内）、弥生時代ピット、近世溝	56
㉓	1999	4	CD~CM19~42	医病	鹿田遺跡第11次調査：病棟	99.8.19~12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代池状遺構、中世～近世集落	56
㉔	2000 2001	2 -	CO~CV35~44、 CN~CM38~41、 CN28~38	医病	鹿田遺跡第12次調査 ：エネルギーセンター	00.10.2~01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代・中世集落、近世土坑・溝	56 61
㉕	2002	3	BL~BR46~51	大医 歯	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教育研究棟	02.4.30~10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝中世の集落、近世土坑群	71
㉖	2003	1	CD~CM12~20	医病	鹿田遺跡第14次調査 ：病棟（Ⅱ期）	03.7.31~12.17	1331	弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の井戸・土坑・溝、近世のため池・土坑	71
㉗	2003	2	BQ~BS45・46	大医 歯	鹿田遺跡第15次調査 ：総合教育研究棟外構工事	03.10.16~10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸・溝、中世溝群	71
㉘	2004	1	AH~AI6・7 AF12・13、 AN~AO4	医病	鹿田遺跡第16次調査 ：立体駐車場新営工事	04.10.21~11.8	49.15	近世～近代の畦畔・溝・畝・土坑、中世の土坑、弥生～古墳の河道	81
㉙	2006	1	BR~BY60~64	医病	鹿田遺跡第17次調査 ：総合研究棟（医学系）	06.7.10~11.14	642	古墳時代住居址、古代溝状遺構、中世井戸・溝・建物、近世土坑・溝	88
㉚	2007	1a	BT13~BY20	医病	鹿田遺跡第18次調査 ：中央診療棟	10.10~08.3.14	872.2	弥生時代後期～近世の集落、井戸・溝	92
㉛	2007	1b	CG~CI9・10	医病	鹿田遺跡第18次調査 ：防火水槽	10.16~11.1	43.2	古代後半井戸、近世入江状遺構・護岸施設	92
㉜	2007	1c	CM~CN9・10、 CO10・11	医病	鹿田遺跡第18次調査 ：用水路改修	12.27~08.1.16	56	弥生時代土坑・溝	92
㉝	2008	1	AW~AY22~23	医病	鹿田遺跡第18次調査 ：歯学部渡り廊下	6.26~9.12	80	弥生時代後期の「方形高まり」・貝塚・壺棺・土坑・溝、古墳時代土坑・溝、古代ピット、近世土坑	95

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	調 査 期 間	面積 (㎡)	概 要	文献
①	1997	1・2	-	固	福呂遺跡第1次調査：実験研究棟	97.5.10~20、 7.28~31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世集落	55
②	1997	3	-	固	福呂遺跡第2次調査：実験研究棟 新営に伴う工事スロープ部分	97.11.25~12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

付表2-(2) 試掘・確認調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(3)	1983	1	BH13	農	合併処理槽予定地	2.5	-	→津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	2	BF17	農	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5	-	-	1
5	1983	3	BE~BG14、 BE~BH15、BE18、 BF16~18、BC18	農	排水管理設予定地	2.0	-	29ヶ所で試掘→津島岡大第2次調査：1983年度	1
6	1983	4	BF22・23	農	農場畜舎新営予定地	2.0~3.0	0.6	2ヶ所、土器片<1987年度工事立会>	1
(7)	1983	5	BC~BD15	事	大学事務局新営予定地	2.0~3.0	0.9	2ヶ所、→津島岡大第26次調査：2000年度	1
(8)	1983	6	BB10	保	保健管理センター新営予定地	2.0~3.0	0.8	→津島岡大第10次調査：1999年度	1
9	1983	7	BI16	事	津島宿舎新営予定地	0.9	0.9	土器片<1987年度工事立会>	1
10	1983	8	AW05	工	校舎新営予定地	3.0	1	土器片	1
12	1985	1	BE08	教養	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構など未確認<1986年度工事立会>	5
13	1985	2	AX02	教育	研究棟予定地	2.6~3.4	1.2	3ヶ所、縄文～弥生土器出土	5
14	1985	3	AV・AW99~01	学	男子学生寮新営予定地	2.0~3.0	1	→津島岡大第3次調査：1986年度	5
(17)	1986	3	BF~BG09	学	屋内運動場新営予定地	2.4、1.2~1.7	1.1	→津島岡大第4次調査：1986年度	6

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(18)	1986	4	AY・AZ07	大自	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	0.6～0.8	→津島岡大第5次調査：1988年度	6
22	1987	4	AP02 (土生地区)	事	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8	—	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	8
(23)	1987	5	AV11	情	総合情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	8
24	1987	6	AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	約1.0	中世・近世の遺物、古代・中世の水田 <継続して調査>	8
25	1987	7	BD09	教養	身体障害者用エレベーター建設予定地	2.5	0.7	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器 <継続して調査>	8
29	1988	17	AX04・06、AW04	工	校舎建設予定地	2.0～3.5	—	→津島岡大第6・7次調査：1988年度	11
30	1988	19	BD18・19	農・薬	動物実験飼育施設・遺伝子実験施設	2.3	1.1～1.2	→津島岡大第8次調査：1991年度	11
31	1988	20	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	中世・近世の遺物出土 <1988年度工事立会>	11
33	1989	2	AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後期・弥生時代早期の落込み、 縄文時代後期～中世土器片 <継続して調査、面積38.5㎡>	14
34	1989	3	AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	1.6～2.0	中世～明治の水田の畦畔・溝 <1989年度工事立会>	14
35	1989	4	BD02	学	学生宿所予定地	2.0～3.2	1	弥生時代早・前期の畦畔 <1989年度工事立会>	14
(36)	1989	5	AV・AW13	図	図書館新営予定地	3.0	1.4～1.6	→津島岡大第12次調査：1993年度	14
40	1990	3	BC02	学	学生宿所ポンプ槽予定地	2.5	1.1	弥生時代前期畦畔、中世土器片	18
41	1990	6	AW・AX11	事	福利厚生施設予定地	3.9	1.4～1.6	→津島岡大第13次調査：1994年度	18
56	1993	3	BE～BF22～23	農	農学部汎用耕地実験実習施設	1.5	—	中～近世耕作土	30
65	1994	3	BD20	農・薬	動物実験施設	2.0	0.9	GL～1.4mで黒色土、縄文土器1点出土 <盛り土保存>	33
71	1995	4	BE26	事	国際交流会館新営予定地	4.1・2.4	1.6	明治～中世の土層確認、以下は湿地状態、 遺構・遺物無し（明治畝のみ） <工事立会>	38
72	1995	5	AW02・03	環	環境理工学部新営	2.4	1.2	→津島岡大第17次調査：1996年度	38
73	1995	6	BF07	学	ボクシング部ボックス移設	3.0	3	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝 2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う試掘調査	2.7～3.4	1.3	→津島岡大第19次調査：1998年度	53
(91)	1998	10	AW02・03	環	校舎（Ⅱ期）新営に伴う調査	4.5	1.2	→津島岡大第22次調査：1998年度	53
92	1998	13	AW04	工	システム工学科棟新営に伴う調査	2.8	1.0	GL～1.8mで黒色土、縄文後期の遺構	53
93	1998	14	AU02・03・06、 AV03	事	遺跡保護区整備に伴う調査	2.4～3.8	0.8～1.6	5ヶ所、TP1・3・5：微高地状、TP2・4 は低湿地状、TP1で弥生溝、TP3で弥生 溝・ピット、TP4で中世溝	53
(105)	1999	6	AZ15、BA14	文・法・経	総合校舎新営に伴う調査	2.7、3.5	0.8、1.1	→津島岡大第23次調査：1999年度	56
106	1999	7	AV08	工	電波暗室新営に伴う調査	1.2	0.2	現表土以下、基盤となる岩盤層	56
114	2000	6	AV00、 AX00・02・03、 AZ06、AW08	—	縄文～弥生時代における環境復元 に伴う調査	2.6～3.2	1.7～0.9	6ヶ所掘削、縄文・弥生時代の微高地、 古代溝を確認	61
115	2000	7	BB14	—	創立50周年記念館新営に伴う調査	2	0.8	→津島岡大第27次調査：2001年度	61
129	2002	5	BD15	事	事務局旧本部棟移転に伴う調査	2.1	—	黒色土の落ち検出	71

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
(4)	1984	1	BU30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5～0.7	中世土器・包含層確認<盛土保存>	2
(5)	1984	2	CT・CU25、 CZ19・20・23・24	医短	医療短期大学部校舎新営予定地	2.7	0.8～1.0	→鹿田第3次調査：1986年度	2
6	1985	4	AJ33、AI40、 AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ 範囲確認調査	2.2～3.0	0.9～1.4	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	BY・BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2～1.3	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	BT57	医	基礎医学棟	2.2	0.9	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	CF・CG43・44、 CH25・26、 CK35・36、CK15	医病	病棟新営に伴う調査	2.0～2.4	1.0	→鹿田第9次調査：1998年度	53

＜倉敷地区＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1990	4	—	資生研	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以降の土器片	18
2	1998	12	—	資生研	バイオ実験棟新営工事に伴う調査	1.5	0.4	近世干拓地内、遺構未確認	53

付 表

<東山地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	2006	1	—	教育	附属小学校校舎建替え工事に伴う調査	3.0	0.3~0.5	4ヶ所、近世・近代溝3条、中世?畦畔	88

<三朝地区：福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	1997	5・6	—	固	実験研究棟新営工事に伴う試掘調査	1.66~2.1	0.8	2ヶ所→福呂第2次調査：1997年度	50
5	2004	1	—	固	三朝宿泊所増築工事に伴う試掘・確認調査	1.3	0.5~0.9	3ヶ所、遺構・遺物・遺物包含層確認されず	81
6	2004	2	—	固	高圧線・電話線切替工事	1.0	0.85	1ヶ所、河床礫、段丘礫層確認	81

付表2-(3) 立会調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
11	1984	20	BI15~17	事	南宿舍合併処理槽関係配水管埋設	1.0~2.2	1.0	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19	1986	12	BE08・09	教養	校舎新営	2.3	1.3	中・近世の溝・土器	6
20	1986	21	BG08	学	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	6
21	1986	26	BF07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	0.9	中世包含層	6
32	1988	17	BG10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2	1.5	GL-約2mで黒色土、西に向かう落ちを推定	11
37	1989	8	AZ08	大白	自然科学研究科棟新営 ：工事用道路	1.4		弥生時代後期水田・溝	14
38	1989	10	AU05	工	校舎新営に伴う電柱架設	1.9	1.0	黒色土確認	14
42	1990	16 19	AV04~10	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う 補償工事Ⅰ：電柱移設	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヶ所、黒色土、桑里南北溝	18
43	1990	20	BC02~04、 BD03・04	事	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う 補償工事Ⅰ ：学生合宿所給排水管設置	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土	18
46	1991	9	BC18	農・薬	防火用水撤去	2.0	0.8	基盤層まで掘削、石鍬出土	21
47	1991	17	BB16	事	津島地区基幹整備（電気） ：ハンドホール・アース板	1.7~1.8	0.5	2ヶ所、明治層～淡灰色粘土層	21
48	1991	19	BD15	事	津島地区基幹整備（電気） ：アース板	1.7	1.0	GL-1.5mで黒色土	21
49	1991	40	BC・BE・BF12	事	南北道路街灯設置	1.5		3ヶ所、GL-1.4mで古代層	21
52	1992	15	BD18	農・薬	遺伝子実験施設ハンドホール設置	1.5	0.75~ 1.1	縄文後期層まで掘削、溝2本	25
53	1992	34	AV12	事	附属図書館北側駐車場整備	3	1.7	造成土以下は粘土層	25
57	1993	17	BB~BC10~12	保	保健管理センター新営に伴う外構 工事ほか：電気配線	1.8	0.6~0.7	保健管理センター本調査と同じ層序、黒 褐色土はGL-1.15~1.7m、その直下に基 盤層	30
58	1993	19	BB11	保	保健管理センター新営に伴う旧棟 改修：電気配線	1.1	0.8	弥生土器片、工法変更	30
59	1993	23	BA07	事	津島地区基幹整備：RⅠ共同利用 施設排水処理施設他設置	3.2	—	明治~中世層・暗褐色土層、古代溝?、 縄文晩期?土器片	30
60	1993	28	BD~BE13	事	津島地区環境整備：南北道路沿水 路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	近世~中世層を確認	30
61	1993	33	BB~BG12~13	事	津島地区環境整備：水銀灯設置	1.8	0.5~1.2	10ヶ所、近世~中世層まで掘削、一部で 暗褐色土層を確認	30
62	1993	34	BD~BE12・13	事	津島地区環境整備：信号機設置	1.6	1.0	近世から中世層、一部で暗褐色土層	30
63	1993	39~ 41	BB05~07、 BC05・41	学	野球場バックネット・防球ネット 改修	2.0~3.2	1.0	GL-1.2~2.0m付近で黒色土、以下は黄 色砂~青灰色粘土	30
66	1994	9	BD・BE・BF04~07	事	陸上競技場照明灯設置	2	0.96	オーガー掘削（径80cm・深さ10m）、GL -1.92~2.0mで黒色土	33
67	1994	13	AV10、AW10、 AU11	情	総合情報処理センター新営電気工 事	2.2	1.5	近世2面、中世（近世か?）1面、GL- 1.7mで黒色土、近世溝	33
68	1994	20	BD20	農	焼却場	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土	33
76	1996	4	BC18	農・薬	動物実験棟新営に伴う造成土取り	2.2	1.9	黒色土層付近まで掘削	44
77	1996	5	BD16~19	農・薬	動物実験棟新営に伴うハンドホー ル設置工事	1.3	—	4ヶ所、造成土以下に5層確認	44
78	1996	12	AV02、AV03、 AV04、AV99、 AW02、AW04	サ	サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー新営：外灯設置工事	1.0~1.5	0.76~ 1.1	6ヶ所、明治層2面・近世層2面・中世 層?1面・弥生層?1面	44
79	1996	13	AV03~AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー新営：配管設置工事	2	0.95	弥生時代層まで掘削、古墳時代前期の遺 構・遺物	44
80	1996	18	AW03	環	校舎新営予定地電柱移設工事	2	—	黒色土まで掘削	44

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
81	1996	25	AV13	図	附属図書館新営 ：雨水樹・外構工事	1.3	1.0	造成土以下に青灰色粘質土・黄褐色粘質 土・灰褐色粘質土	44
82	1997	16	BB13～BH13	事	南北道路ガス管理設工事	1.5	－	中世層まで掘削	50
83	1997	19	AW11～BA13	事	南北道路ガス管理設工事	1.5	－	中世層	50
84	1997	24	BC12	事	福利厚生施設新営に伴う共同溝新 設工事	2.0	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代～近世の溝	50
94	1998	15	BA09	事	構内外灯設置工事	1.47	1.0	GL-1.42mで黒色土	53
95	1998	22	AZ09、BA09	理	コラボレーションセンター支障配 管布設替工事	1.4	1.0	GL-1.4mで黒色土	53
96	1998	24	BB12、BC12	事	南福利街灯設置工事	1.4	0.95	中世層まで掘削	53
97	1998	31	AY06	環	校舎新営に伴うガス管理設工事	1.2～1.4	0.65～ 0.95	中世層まで掘削、10ヶ所	53
98	1998	34	BC10	事	学生会館改修に伴うトラップ枳撤 去工事	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土層、GL-2.2m まで青灰色粘土層	53
99	1998	35	BA00	事	NTT電柱移設工事	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土	53
100	1998	41	AX03～AY07	環	実験排水管理設工事	1.4	0.6～1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代 層、1地点で古墳時代層まで掘削	53
101	1998	42	AU02	環	馬場移設に伴う樹木移植	2.2	1.1～1.3	GL-2mで弥生後期層、GL-2.2mで縄文 基盤層	53
102	1998	44	AV03、AW03	環	校舎新営に伴う生活排水枳設置工 事	1.97	1.4	古墳時代層まで掘削、須恵器・土師器	53
103	1998	48	AW03	環	校舎新営に伴うガス管理設工事	1.45	1.0	中世層まで掘削	53
107	1999	8	AY00、AZ01・03	施	構内外灯設置工事	1.15～1.35	0.5～1.2	3ヶ所で黒色土（GL-0.85～1m）確認	56
108	1999	12	AZ08・09	理	コラボレーションセンター新営工 事に伴うハンドホール	1.48～2.1	1.03～ 1.16	2ヶ所、1ヶ所で古墳時代層まで掘削	56
109	1999	13	AW02	環	校舎（Ⅱ期）新営に伴うスロープ 設置工事	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで調査、近 代土坑・古代溝・縄文後期ピット	56
110	1999	42	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に 伴う排水枳	1.0～1.2	0.8～1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで掘削	56
116	2000	17	BA12	事	津島地区電柱工事	1.6	1.0	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土 層	61
117	2000	23	AY09	理	校舎改修工事 ：理学部本館基礎補強工事	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・ 灰色粘質土	61
118	2000	28	AX10、AY10	理	校舎改修機械設備工事：電気	0.85～1.60	0.8～1.1	南側ハンドホールはGL-1.6mまで掘削、 GL-1.52mで中世溝（南東から北西方向 に向かって走行）	61
119	2000	42	AW08、AX08	工	精密応用化学科棟都市ガス改修工 事	1.6～2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土（中世?）	61
120	2000	44	BA16	大文	総合研究棟仮設電柱建柱工事	1.5～1.7	1.0	GL-1.4mで中世層?、軍庭園の築山、 土塁を一部掘削	61
122	2001	4	AZ10	理	校舎改修電気設備工事	1.6	1.0～1.2	ハンドホール部分で中世溝	66
123	2001	11	BB～BC16	事	本部棟電柱設置工事	1.5～2.1	1.2～1.4	2ヶ所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1 mまで谷部か?	66
124	2001	27	BB・BC13	事	本部棟車庫移設工事	0.5～1.6	1.0	2ヶ所、中世層まで掘削	66
125	2001	30	BB14	事	本部棟樹木移植	1.6	0.65～ 0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層（古代）を確 認	66
126	2001	31	BB14	事	本部棟車庫移設工事に伴う旧変電 室基礎解体工事	1.05	0.45～ 0.75	12ヶ所掘削、中世層まで掘削	66
130	2002	29	BE15	農	校舎改修電気設備工事	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで掘削	71
131	2002	34	BC13～15	事	本部棟新設工事：排水枳・管路	1.2～2.5	0.7～1.2	突帯文土器・石器がまとまって出土、近 世溝・弥生溝	71
132	2002	51	BB13	事	本部棟新営その他工事 ：雨水排水枳・管路	1.57	0.8	中世層と古代・古墳層を確認	71
133	2002	54	BB13・BD14	事	本部棟新営その他工事：外灯	0.95～1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで掘削、GL -1.3mで黒色土	71
134	2002	55	BC07・09	教養	一般教育棟B棟外灯設置工事	1.0～1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで掘削	71
135	2002	57	BB～BC14～15	事	創立五十周年記念館新築工事 ：汚水排水	1.0～2.3	0.85～ 1.0	一部黒色土上面まで掘削	71
136	2003	1	BB13～15	五十	創立五十周年記念館新築に伴う掘 削（雨水排水枳・管理設工事）	1.3	0.7～0.8	中世層まで掘削	74
137	2003	4	AX06	工	総合研究棟新営機械設備工事 （ガス配管理設工事）	1.4	0.9	古代層?まで掘削	74
138	2003	6	BC15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文基 盤層確認	74
139	2003	7	BB,BC18	農	農学部総合研究棟改修電気設備工 事（仮設電力・電話引き込み建柱 工事）	1.7	0.7	径0.5m、GL-1.2m前後で黒色土層、GL -1.5～1.6m前後で縄文後期基盤層確認	74
140	2003	8	AX06～BA06	工	総合研究棟新営その他工事 （雨水排水）	1.7	0.7～0.8	標高33～3.4mで黒色土、弥生～古代の東 西溝多数、近世・近代の東西溝・畦畔	74
141	2003	14	AW,AX06,07	工	総合研究棟新営電気設備工事 （外灯）	1.4	－	中世層まで掘削	74

付 表

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
142	2003	15	AW～AX06～07	工	総合研究棟新営その他工事（排水）	0.5～2.5	1.6	樹で縄文基盤層まで掘削した箇所あり、弥生溝	74
143	2003	17	BC～BD15	事	旧事務局庁舎改修電気設備工事 （外部給水・消火配管）	2.75	1.1	樹で、縄文基盤層確認	74
144	2003	21-1	BG～BH13	事	公共下水樹接続工事No.1区間 農学部合併処理槽	1.8	0.9	縄文基盤層まで掘削	74
145	2003	21-2	BE～BG10	事	公共下水樹接続工事No.2区間 体育館東～武道場西	1.95～2.25	0.8～0.9	樹で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで掘削、弥生溝・縄文土坑	74
146	2003	21-4	AZ16	事	公共下水樹接続工事No.4区間 文・法・経2号館西	2.45	1.5	縄文基盤層まで掘削、弥生溝確認	74
147	2003	21-5	BA10	事	公共下水樹接続工事No.5区間 理学部	1.9	0.7	中世頃の座主川を確認	74
148	2003	21-6	BG22	事	公共下水樹接続工事No.6区間 農学部4号館東	1.5～1.9	0.9～1.4	縄文基盤層まで掘削、弥生～古墳初頭ビット、近代畦畔状遺構	74
149	2003	21-7	BI16	事	公共下水樹接続工事No.7区間 津島宿泊所	1.15～1.3	0.8	中世層まで掘削	74
150	2003	21-8	BI15	事	公共下水樹接続工事No.8区間 南宿舎	2.0～2.45	1.1	縄文基盤層まで掘削	74
151	2004	1	BB～BD26	事	公共下水樹接続工事 留学生等宿泊施設	1.22～1.68	1.0	中世層まで掘削	81
152	2004	6	BB9・10	事	津島キャンパス環境整備留学生センター西	0.5～1.15	0.4～0.6	弥生後期包含層・遺構・礫層確認	81
153	2005	3	AV08	工	工学部総合研究棟改修工事 （仮設電柱掘削取り付け）	8.5	1.5	GL-0.9mまで造成土、以下、青灰～白灰色の粘質土3層を確認、「黒色土層」は確認されず	83
154	2005	5	AW09	工	工学部総合研究棟改修電気設備工事 （アース板設置）	1.8	-	基盤層～黒色土～明治の土層堆積確認	83
155	2005	9	BE02、BG07	事	キャンパス環境整備（門扉改修等）工事	1.0～1.3	0.7	東07地点：GL-0.7mで明治耕土と畦畔・溝、-1mで中世層確認、東08地点：近世畦畔、中世層確認	83
156	2005	13	BC～BE03、BB・BC02	事	プール改修（排水管改修）工事	0.75～2.4	0.8～1.3	縄文基盤層～近代層の堆積確認、「黒色土」確認、弥生～古墳の溝多数、近世土坑、近代大畦畔・溝	83
157	2005	14	BB・BC04	事	サッカー場防球ネット設置工事	2.0～2.2	-	オーガーによる掘削、一部で「黒色土」確認	83
158	2006	2	AX10	工	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事 ：耐震工事に伴う支障物撤去・PC耐震柱基礎掘削	8.18～21.98	1.8	近代耕作土層以下、中世層まで5枚の層を確認。近世面で南北方向の溝	88
159	2006	3	AZ～BA02～04	教育	教育学部公共下水樹接続工事	9.4～21	2.3	樹1箇所、深さ2.3m。配管、深さ1.05～1.92m。黒色土層あるいは基盤層まで掘削。東西方向の溝	88
160	2006	5	BA・BB02、BC02	事	プール改修配管接続工事	9.28～10.3	1.7	黒色土層あるいは基盤層まで。古墳時代頃の溝状遺構	88
161	2006	11	AX08～09	工	工学部総合研究棟Ⅱ期改修工事 ：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削	12.25～27	1.8	古墳～弥生層	88
162	2006	12	BF16	農	農学部2号館南電柱移設	07.223	2	中世層まで	88
164	2007	4	BA12	理他	公共下水道接続工事（理学部他）	2.0	0.8～0.9	GL-1.6mで黒色土確認、弥生時代の溝	92
165	2007	8	AV・AX07・08	工	総合研究棟Ⅲ期改修 ：電気設備・外灯基礎及び管路掘削工事	1.4～1.7	1.2	近世～中世層確認	92
166	2007	10	AW07・08	工	総合研究棟Ⅲ期改修 ：外構樹・配管（東半部）	1.1～1.4	0.9	近世層確認、土坑1基	92
167	2007	13	BA～BC20	イ	インキュベーション施設外構配管工事	1.2～1.4	0.6～0.8	縄文時代～近代土層確認、中世、近代の溝	92
169	2008	7	AZ09	理	理学部ヘリウム液化装置基礎工事 ：基礎杭設置	7.2	4.0	黒色土なし、GL-4m以下で礫層を確認	95
170	2008	21	AY03・AZ03・BA03	教	総合研究棟（教育系）改修電気設備工事 ：建柱掘削	8.1	2.0	3地点掘削し、北地点では黒色土みられず	95
171	2008	22	AY04	教	総合研究棟（教育系）改修電気設備工事 ：接地極埋設	10.23	1.7～1.78	古代層下に溝もしくは河道の埋土とみられる砂層を確認	95
172	2008	26	AZ03	教	総合研究棟（教育系）改修機械設備工事 ：都市ガス設備	12.25	1.2	GL-0.95mで黒色土を確認	95
173	2008	28	BB12	KDDI	KDDI無線基地局新設工事 ：建柱	9.22・24・25	1.8	灰褐色砂質土層まで確認、黒色土未確認	95
174	2008	32	BB04	事	プール系統水道メーターボックス取設工事	11.7	0.9～1.5	中世層（？）まで確認	95
175	2008	33	BJ17	事	南宿舎電柱設置工事	12.1	2.0	およそGL-1.2～1.5mで黒色土確認	95
176	2008	39	AX04	生協	大学生協東福利施設新築工事 ：ガス管	2.18	0.85～1.21	中世層まで確認	95
177	2008	40	AX05	生協	大学生協東福利施設新築工事 ：外灯移設	3.5	1.1～1.2	2地点掘削し、古代層まで確認	95
178	2008	42	AW00～01	事	新技術センター公共下水道接続工事	2.2～4	0.85～1.75	中世～近代の里境を示すとみられる南北溝4条を検出 黒色土上面まで確認	95

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
179	2008	43	AY01	教	教育学部体育館他耐震改修工事： 動物室	2.16～17	0.85	黒色土上面で弥生～古墳時代の水田畦畔 を確認	95
180	2008	44	AY03 BA03	教	教育学部体育館他改修機械設備工 事：仮電柱設置	2.3	1.2～1.7	2地点掘削し、北地点では中世層まで、 南地点では東西溝の埋土を確認	95
181	2008	49	AY02	教	教育学部体育館他改修電気設備工 事：接地極埋設	3.5・16	0.3～1.7	古代層まで確認	95
182	2008	52	BB10～11	事	大学会館他改修工事：一般教育講 義棟ガス設備	3.2～3	0.7～1.2	GL-1.0m以下で礫層、土坑1基、溝？1 条を確認	95
183	2008	53	AV04～06 AW04	工	工学部屋外ガス配管改修工事	3.16～19	0.8～ 1.48	一部で中世層まで確認	95

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	1983	23	AO～AW22	医病	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	－	弥生時代後期土器・分銅形土製品、貝集 積	1
7	1985	6	AW～BH23、 BH・BI24	医病	外来診療棟関係屋外排水管理設	1.3～1.7	0.7～1.3	中世・弥生の遺構・遺物	5
8	1985	12	AG31、AG24、 AF23	医病	基幹環境整備緑化工事 ：電気配線ハンドホール掘削	1.2～1.7	0.9～1.3	3ヶ所、中世包含層・ピット	5
9	1986	9	BI～BN4	医病	記念館東側汚水管改修工事	0.8～1.3	0.8	中世包含層、土器出土	6
11	1986	24	CL～CR12、CR～ CX13、CX～DA14	医短	護岸及び囲障工事	2	0.8～1.0	中世包含層	6
14	1987	8	BC37	医病	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5		弥生時代包含層・遺構	8
15	1989	46	CE30・37・44、 CJ・CK45、 CL28・29	医病	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎	1.2～1.5	0.7～1.0	2ヶ所、中世層を確認	14
18	1992	29	BW71	ア	アイントープセンターL形側溝・ 集水枥	1.4～1.5	0.9	中世溝1条	25
19	1992	41	CI73	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器1点	25
20	1994	5	DH60～62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	近世層以下はすべて遺構埋土の可能性あ り、溝3条・ピット9基	33
21	1995	11	BG・BI18	医病	鹿田地区基幹整備 ：附属病院連絡通路新設	1.5	1.0	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、 遺物なし	38
22	1995	14	CD07・08	医病	鹿田地区基幹整備 ：液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世2面確認、溝3条、溝内から中世・ 古代の土師器出土	38
23	1995	17	CD08～CC11	医病	鹿田地区基幹整備：附属病院液酸 タンクU字溝埋設工事	1.23	0.85	包含層確認、中世土器細片、既設管・工 事基礎などで区間全長の1／2程度は破 壊	38
24	1995	23	DF56～67	医	防球ネット取設工事	3	0.8	径60cmを12ヶ所、その内4ヶ所で土器 片・石器出土、調査区西寄りには、GL-2 m以下は旧河道か。	38
30	1998	36	BV73、CN78	医	校舎新営に伴う仮設電柱工事	1.2	1.0	中世層まで掘削	53
33	1999	15	BV65～71	医	研究棟新営に伴う給排水枥・管路	1.2～1.4	0.9	中世層まで掘削	56
34	1999	18	BU65	医	研究棟新営に伴う検水槽	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世溝・ピット	56
35	1999	27	BY42・43、 BI43・44	医病	基幹整備（電気設備）：地中配管	1.25～1.45	0.45～ 0.5	2ヶ所、中世層まで掘削、時期不明の遺 構	56
36	1999	41	CF21～28、 CF～CL28、 CD～CF28～33	医病	病棟新営に伴う共同溝解体	1.7	－	面積18㎡、鹿田11次調査3区南側部分で 中世ピット	56
37	1999	46	CN46～DE49	医病	病棟新営に伴う汚水枥・管路	2.3	1.2	古墳時代の井戸1基・土坑1基・中世溝 等	56
38	1999	47	CM・CN・CP・ CR・CT58、CV・ DA・DC・DD・ DF59	医	グラウンド防球ネットポール	2.0～2.3	－	11ヶ所、南側6ヶ所は河道、7～10ヶ 所付近は微高地、最北端は河道	56
39	1999	48	BT51	医病	病棟新営に伴う汚水検水枥	2	1	造成土以下7層確認、古墳時代層まで掘 削か。	56
41	2000	25	CD41～CN45	医病	病棟新営その他工事 ：管路・雨水枥	1.6～1.8	－	溝と思われる遺構など確認	61
42	2000	26	CN15・21・27、 CO31・42、CS45、 DV45	医	電柱及び外灯の埋設工事	1.6	－	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・ 暗褐色砂質土層を確認、微高地部か。	61
43	2000	29	DI27	医	医学部ガス配管切り離し用バルブ 取付工事	0.8～1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土	61
44	2000	47	DG～DJ28～67	医病	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修	2.1～2.3	1.3～1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道	61
45	2001	37	BR～CA43、CA43 ～55、CA44～ CL45、BR～CA55	医	総合教育研究棟埋蔵文化財発掘調 査に伴う機械設置工事	1.65	0.7～0.9	中世層まで掘削、中世土器が多数出土し た地点あり。	66
47	2002	10	CH11～CN22	医	鹿田団地ガス配管埋設工事	1.0～1.3	0.87	中世層まで掘削	71
48	2002	19	BT・BU11	医病	鹿田団地ガス配管埋設工事	0.5～1.8	－	2ヶ所、GL-1.22mまで掘削した地点で 中世または古代層確認	71

付 表

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
49	2002	22	CQ41～42	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事：共同溝排水管	1.5	－	1ヶ所、包含層まで掘削	71
50	2002	25	CG41、CO34、 CF43、CO38	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事：外灯	1.47～1.66	－	4ヶ所、中世層まで掘削	71
51	2002	27	CV36～45	医病	エネルギーセンター棟新営その他 工事：外溝	0.9～1.9	0.9	中世の井戸・柱穴・溝	71
52	2002	36	BI～BS45～53	大医 歯	総合教育研究棟新営その他工事	1.85～2.0	0.8～1.0	5ヶ所、中世層まで掘削	71
53	2002	52	DC67	事	本部棟新営その他工事：植採移植	1.25	－	中世層	71
54	2002	56	BG18	医病	旧混合病棟グリーストラップ改修	1.68	－	底面で弥生～古墳層、土器小片	71
55	2003	5	BS～BZ45、CA～ CO46、CO45	医	総合教育研究棟新営その他工事 (屋外排水)	1.7	0.7～1.0	弥生中期?包含層まで掘削、近世土坑・中 世ビット多数、低地部確認	74
56	2003	9	BL～BS45～53	医	総合教育研究棟外構工事 (雨水・汚水・実験排水)	0.8～1.75	0.7～0.9	弥生中期包含層まで掘削した箇所あり、 古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等を確認	74
57	2003	10	BR～BS50～54	医	総合教育研究棟給水管配管埋設工事	1.33	0.8	一部で中世層確認	74
58	2003	13	BR53、BL54	医	総合教育研究棟外構工事（外灯）	1.4	0.8	中世層まで掘削	74
60	2004	3	AF16、AF～ AJ17、AJ9～16	医病	医病構内支障ガス配管替工事	1.0～1.9	0.7～0.8	接続部で近世～近代の水田層、中世の畦 畔を確認。弥生～古墳の河道と推定され る砂層を確認。	81
61	2004	5	AE4～16、AF～ AI16、AI9～15、 AJ～AO09	医病	医病構内支障給水管配管替工事	0.9～1.9	0.85	樹で中世?～近代の畦畔確認。弥生～古 墳の河道と推定される砂層を確認。	81
62	2005	3	DH～DJ18、DJ19	医	医学部変電所ビット周辺高圧ケー ブル設置工事	1.1～2.5	0.7～1.1	一部で弥生～近代層確認	83
63	2006	6	CT～CU45	医病	エネルギーセンター棟新営に伴う 工事	2.5	0.9	施田第12次調査地点と重複、同様の状況	88
67	2007	4	CC13～20、 CD13～20	医病	基幹環境整備（道路等）工事	1.2～2.2	0.9～1.2	基盤層まで掘削、中世東西・南北溝確認	92
68	2007	5	AS03～07、AV～ AX07、AY・BB09	医病	中診療屋上防水改修その他工事	0.6～0.9、1.4、1.8	0.7	ガス管1：GL-1.8m、中世東西溝、古墳 時代南北溝確認	92
69	2007	7	BT11	医病	中央診療棟新営工事 ：ガス管切断工事	1.28	0.5	中世溝埋土確認	92
70	2007	10	CO42、CV36	医病	基幹整備（電気設備）工事	1.3～1.65	1.3	中世層まで掘削、遺構埋土確認	92
71	2007	11	CG08、CF09・10、 CG・CH11、CI11	医病	環境整備（道路等）工事 ：ガス配管1	0.85～1.3	0.9	GL-0.85～1.3m、中世井戸（または墓）・ ビットなど確認、GL-1.0～1.3m、中世 溝・ビット確認	92
72	2007	17	CL12、CM13、 CN14・15	医病	環境整備（道路等）工事 ：ガス配管2	1.0～1.2	0.4	中世層、中世遺構埋土確認	92
73	2007	27	BT・BU65	医	総合研究棟（医学系）新営その他 工事	1.35	1.0	中世層確認	92
74	2007	28	CJ7～CP12	医病	用水路改修工事	1.7～2.0	0.6～0.8	包含層及び枝川東側で微高地確認	92
75	2007	30	BE33	医病	高エネルギー治療室改修工事	1.4	0.6～0.7	中世～近代の畦畔・溝確認、弥生後期土 器出土	92
77	2008	5	BT24～25	医病	基幹整備（西病棟とりこわし他） 工事：現場打ち排水枡	11.10・14・19	0.98～ 1.4	弥生基盤層を確認	95
78	2008	6	BQ24 BR24	医病	基幹整備（西病棟とりこわし他） 工事：ライトコート	11.17～18	0.75	湿地性堆積層を確認	95
79	2008	7	AO53～54 AL54 ～AO54 AL54～ 61 AL62～AP65	医病	基礎医学棟一部とりこわしに伴う 支障ガス配管移設工事	11.10～14	0.76～ 1.0	近世層まで確認、土坑2基	95

<東山地区>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1983	13	－	教育	附属中学校新営	4.0～5.0	－	シルト層中	1
2	1997	29	－	教育	附属小・中学校他団障改修工事	1.2	0.79	GL-1.1mで近世水田層、溝1条	50

<三朝地区：福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	構内座標	所属	調 査 名 称	掘 削 深 度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
4	1997	18	－	国	実験研究棟新営に伴う電気埋設管 路工事	1.0	－	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい上 昇	50

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要(2009年度現在)

所属	種類	調査名・地区名	箱 数 (1箱:約30リットル)							備考 (主要時期・特殊遺物)	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
医病	発掘	鹿田第1次調査(外来診療棟)	601	536	15.5	20	0.5	1	28	弥生中期～中・近世、木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓等	7
〃	〃	鹿田第2次調査(NMR-CT室)	108.4	99	0.4	4.5	0.5		4	弥生後期～中世、田舟・木簡等	〃
医短	〃	鹿田第3次調査(校舎)	64.6	41	0.3	18	0.3		5	古代～中世、石帯	10
〃	〃	鹿田第4次調査(配管)	4	2	0.3	0.5	0.2		1	古代、鹿角製品	〃
医病	〃	鹿田第5次調査(管理棟)	117	88	2.5	6	1.5		19	弥生後期～中・近世	24
ア	〃	鹿田第6次調査 (アイソトープ総合センター)	62	59	0.5	1	1.5			中世、青銅製椀	40
医	〃	鹿田第7次調査(基礎医学棟)	78.3	72		1.3		1	4	弥生～近世、猿形木製品	53
医	〃	鹿田第8次調査(RI治療棟)	10	10						弥生～中世	53
医病	〃	鹿田第9次調査(病棟1期)	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生～近世、木簡3点	56
医病	〃	鹿田第10次調査(共同溝)	2	2						古代～近世	56
医病	〃	鹿田第11次調査(病棟1期)	74	66		4		2	2	弥生～近世、木簡1点	56
医	〃	鹿田第12次調査 (エネルギーセンター)	147	77	1	54			15	弥生～近世、櫛	61
医病	〃	鹿田第13次調査(総合教育研究棟)	317	255	24	10			28	弥生～近世	71
医病	〃	鹿田第14次調査(病棟Ⅱ期)	66	54		3			9	中世～近世	74
医	〃	鹿田第15次調査 (総合教育研究棟関連)	3	3						古墳初頭・中世	74
医病	〃	鹿田第16次調査 (立体駐車場エレベーター他)	1	1						弥生～近世	81
医	〃	鹿田第17次調査 (総合研究棟(医学系))	111	68	4	8		1	30	弥生～近世	87
医病	〃	鹿田第18次調査(中央診療棟関連)	184	116	19	18			31	弥生～近世	92
医病	〃	鹿田第19次調査(歯学部渡り廊下)	375	136	1	4			234	弥生後期～近世、壺棺、線刻土器、蹄髻硯	95
医病	〃	鹿田第20次調査 (中央診療棟・共同溝)	300	149	65	64		4	18	弥生後期～近世、木簡、曲物	本紀要
全	〃	津島岡大第1次調査(NP-1)	5	0.5	0.5	4				弥生中期～古代	3
農	〃	津島岡大第2次調査 (農学部合併処理槽・配管)	20.5	15	1.5				4	弥生早期～弥生前期	4
学生	〃	津島岡大第3次調査(男子学生寮)	73	55	1.5	2	4.5		10	縄文後期～古墳初頭、古代～近世 石製指輪、蛇頭状土器片	19
〃	〃	津島岡大第4次調査(屋内運動場)	1	1						弥生早期～弥生前期<試掘調査遺物を含む>	6
大自	〃	津島岡大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	89	75	3	1	8		2	縄文後期～古墳、古代～近世、耳 栓・木製櫛(縄文)、堅果類	27
工	〃	津島岡大第6次調査 (生物応用工学科棟)	54	38	1	9	6			縄文後期～近世、人形木器、アン ペラ、人形土製品	35
工	〃	津島岡大第7次調査 (情報工学科棟)	42.5	21	0.5	1			20	縄文後期～近世	35
全	〃	津島岡大第8次調査 (遺伝子実験施設)	12.5	11	0.5				1	縄文後期～近世	32
工	〃	津島岡大第9次調査 (生体機能応用工学科)	57.5	37	2.5	3			15	縄文後期～近世	47
全	〃	津島岡大第10次調査 (保健管理センター)	89	80		7			2	弥生前期～近世	65
〃	〃	津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター)	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	36
〃	〃	津島岡大第12次調査(図書館)	72	41	1	20			10	縄文後期～近世	65
〃	〃	津島岡大第13次調査 (福利厚生施設北)	12.5	12	0.5					縄文後期・古墳前期・中世	41
〃	〃	津島岡大第14次調査 (福利厚生施設南)	13	12					1	弥生～古墳	46
〃	〃	津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャービジネスラ ボラトリー)	68	14	10	20			24	縄文後期～中世、縄文後期・弥生 早期遺物、アンペラ、堅果類	72
農薬	〃	津島岡大第16次調査(動物実験棟)	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	44
環	〃	津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎1期)	85	62	11				12	縄文後期～近世	77
全	〃	津島岡大第18次調査 (南篠利ポンプ槽)	1	1						縄文後期～近世	53
理	〃	津島岡大第19次調査 (コラボレーション・センター)	34	24	1	4		2	3	縄文後期～近世	64
環	〃	津島岡大第20次調査 (環境理工学部ポンプ槽)	1	1						縄文後期～近世	53
工	〃	津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター)	7	5	2					縄文中期～近世	64

付 表

所属	種類	調査名・地区名	箱 数 (1箱:約30リットル)							備 考 (主要時期・特殊遺物)	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
環	発掘	津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎Ⅱ期)	38	27	4	3		1	3	縄文後期～近世、古代塚部材、曲げ物	77
文法経	〃	津島岡大第23次調査 (総合研究棟)	95.5	25	0.5	60	2		8	縄文後期～近世、杭 (縄文)、石棒	80
文法経	〃	津島岡大第24次調査 (総合研究棟渡り廊下)	2.1	1	0.1	1				縄文後期～近世、杭 (縄文)	80
農	〃	津島岡大第25次調査 (農学部散水施設)	0.3	0.1		0.2				中・近世	61
事	〃	津島岡大遺跡第26次調査 (事務局本部棟)	34	18		5		1	10	縄文後期～近世	76
事	〃	津島岡大遺跡第27次調査 (創立五十周年記念館)	15	14	1					縄文中期～近世	68
工	〃	津島岡大遺跡第28次調査 (自然科学系総合研究棟)	17	15	2					縄文後期～近世	71
農	〃	津島岡大遺跡第29次調査 (農学部共同溝)	2.1	2	0.1					縄文後期～近世	71
イ	〃	津島岡大遺跡第30次調査 (岡山大インキュベータ)	37.2	16	0.1	18			4.1	縄文後期～近世	93
生	〃	津島岡大第31次調査 (福利厚生施設東棟)	8	7	1				1	縄文後期～近世	95
教育	〃	津島岡大第32次調査 (教育学部創造場)	62	14	3				45	縄文後期～近世	本紀要
固	〃	福呂遺跡第1次調査 (実験研究棟)	10	9					1	縄文早期・弥生中期・中世	55
固	〃	福呂遺跡第2次調査 (実験研究棟スロープ)	2.1	2				0.1		中世～近世	55
医病	試掘 確認	鹿田 (駐車場)	1	1						弥生～中世	5
学生	〃	津島北 (男子学生寮)	1	0.7	0.3					縄文後期～弥生前期	〃
大白	〃	津島北 (自然科学研究科棟)	1	1						縄文後期～弥生前期	6
事	〃	津島生 (外国人宿舍)	1	1						縄文～中世	8
理	〃	津島北 (身障者用エレベーター)	0.3	0.3						中・近世	〃
教養	〃	津島南 (身障者用エレベーター)	0.7	0.7						縄文・中世	〃
工	〃	津島北 (校舎)	1	1						縄文～近世	11
農業	〃	津島南 (動物・遺伝子実験施設)	0.7	0.7						縄文～弥生、中・近世	〃
事	〃	津島南 (国際交流会館)	0.3	0.3						中世	〃
大自	〃	津島北 (合併処理槽)	0.2	0.2						中・近世	14
学生	〃	津島南 (学生合宿所)	0.4	0.2					0.2	中世	〃
教育	〃	津島北 (身障者用エレベーター)	0.3	0.3						縄文	〃
図	〃	津島北 (図書館)	0.8	0.8						古墳～中世	〃
学生	〃	津島南 (学生合宿所ポンプ槽)	0.4	0.4						縄文～中世	18
資生	〃	倉敷 (資源生物科学研究所)	0.1	0.1						近世	〃
ア	〃	鹿田 (アイソトープ総合センター)	1	1						中世～近世	〃
事	〃	津島北 (福利厚生施設)	0.5	0.5						弥生?～中世	〃
農	〃	津島南 (動物実験施設)	0.1	0.1						縄文?～近世	33
環	〃	津島北 (環境理工Ⅱ期)	0.1	0.1						—	53
工	〃	津島北 (システム工学科棟)	0.1	0.1						—	53
教育	〃	東山 (附属小学校校舎)	1.1	0.1					1		87
全	立会	83年度	2	2						分銅形土製品	1
〃	〃	84年度	1	1						—	2
〃	〃	85年度	1	1						—	3
〃	〃	86年度	0.5	0.5						—	6
〃	〃	87年度	0.5	0.5						—	8
	分布	89年度三朝・本島	0.3	0.3						—	14
全	立会	91年度92年度	0.3	0.3						—	21・25
〃	〃	93年度～99年度	0.8	0.8						—	30・33・ 38・44・ 50・53・ 56
〃	〃	00年度	3	3						—	61
〃	〃	02年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礫石	71
〃	〃	03年度	2	2						—	74
〃	〃	04年度	1	1						—	81
〃	〃	05年度	1.1	0.1					1	—	83
〃	〃	06年度	1.1	0.1					1	—	87
〃	〃	07年度	0.5	0.5						—	92
〃	〃	08年度	1	1						—	95
〃	〃	09年度	0.2	0.2						—	本紀要
総 箱 数			3848.9	2616.3	188.7	387.5	25	22.1	611.3		

付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

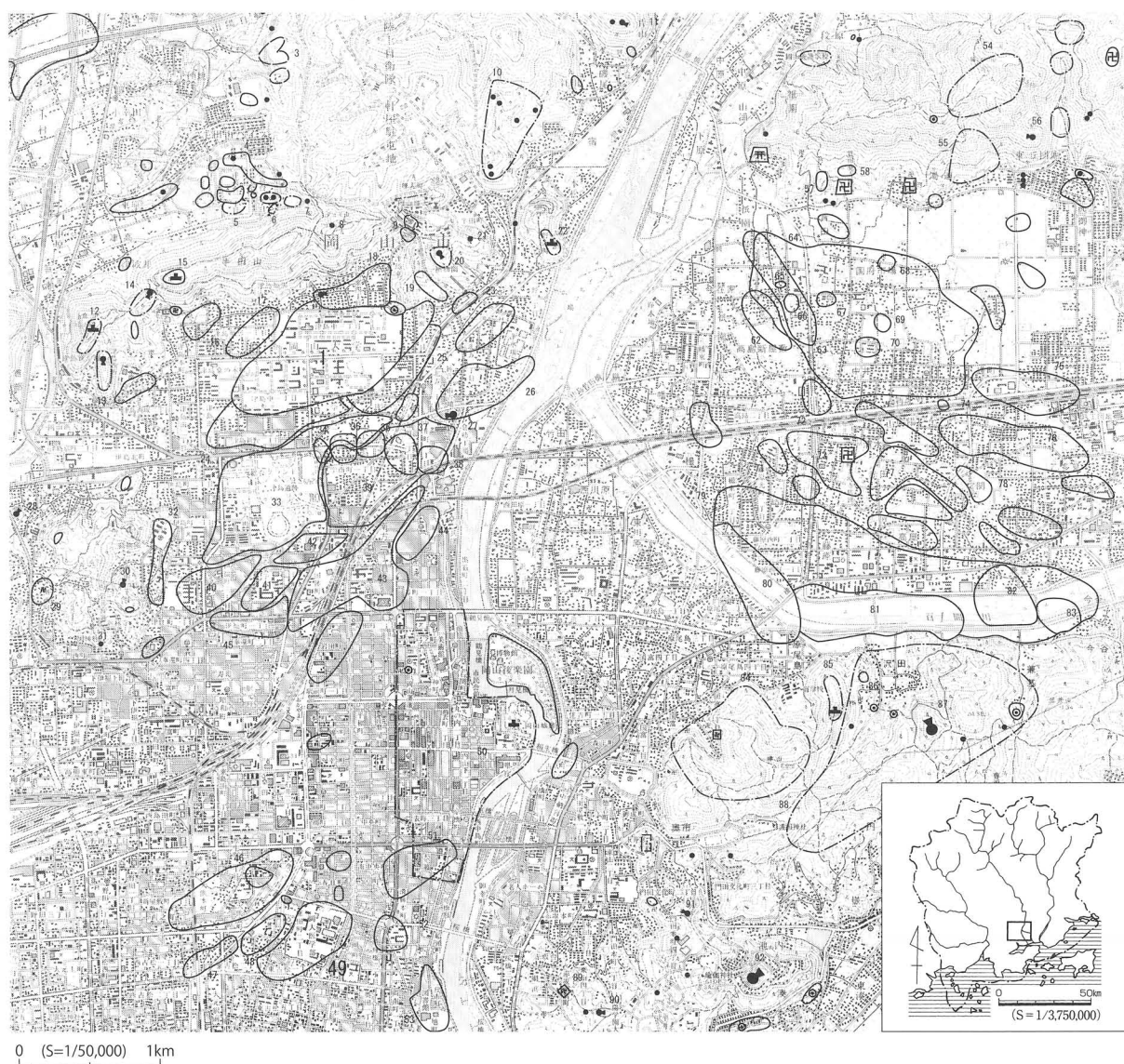
番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報 2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡 (AW14区) の発掘調査	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ (農学部構内BH13区他)	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報 3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報 4	1986年度	1987年10月

付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2010年3月末まで)

番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報 5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報 6	1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報 7	1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報 8	1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報 9	1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報 10	1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報 11	1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報 12	1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月
36	津島岡大遺跡7	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報 13	1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊	1997年3月
41	津島岡大遺跡8	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報 14	1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊	1997年12月
47	津島岡大遺跡10	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月

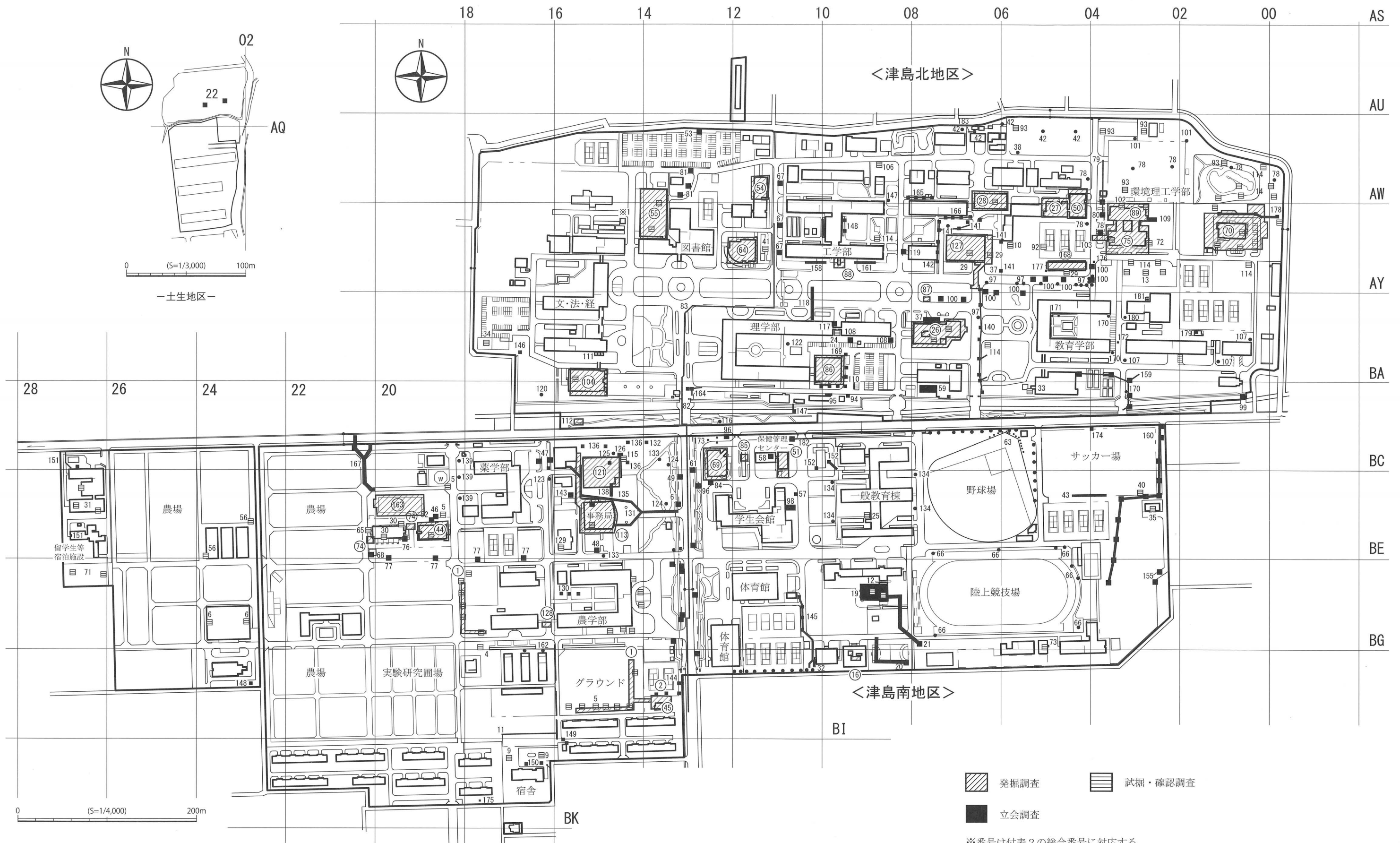
付 表

番号	名 称	発行年月日
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報 15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第15冊	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第17冊	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第22冊	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年3月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第23冊	2007年3月
86	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第24冊	2008年3月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年3月
89	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 - 自然と人間、地中に埋もれた命の対話 -	2008年3月
90	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第39号	2008年3月
91	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第40号	2008年9月
92	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2007	2008年12月
93	津島岡大遺跡19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第25冊	2009年3月
94	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第41号	2009年3月
95	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2008	2010年2月
96	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第42号	2010年2月
97	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第43号	2010年3月

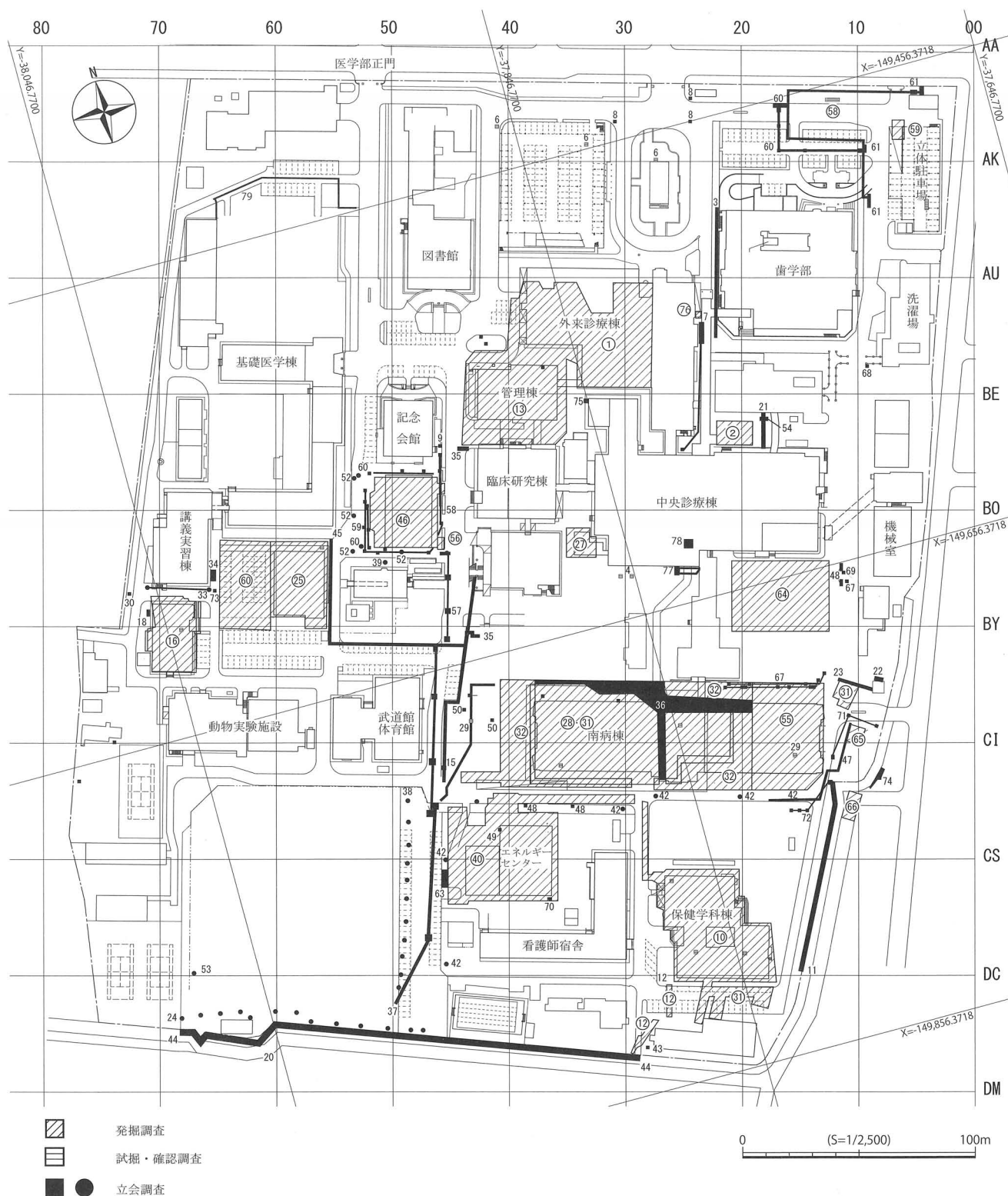


- | | | | | |
|----------------------------------|-------------------------------|------------------------------|-------------------------------|----------------------------|
| 1. 津島岡大遺跡(縄文中期～近世) | 17. お塚(様)古墳(古墳中期) | 37. 北方地蔵遺跡(弥生～近世) | 56. 備前車塚古墳(古墳前期) | 74・75. 雄町遺跡(縄文晩期～平安) |
| 2. 田益田中(国立岡山病院)遺跡
(縄文～近世) | 18. 津島東遺跡(縄文～室町) | 38. 北方蔵ノ内遺跡(弥生～近世) | 57. 唐人塚古墳(古墳後期) | 76. 乙多見遺跡(弥生) |
| 3. 白壁奥遺跡(古墳後期)〈製鉄〉 | 19. 朝寝鼻貝塚(縄文前～後期) | 39. 北方上沼遺跡他(弥生～近世) | 58. 賞田廃寺(飛鳥～室町) | 77. 赤田東遺跡・関遺跡
(弥生～室町) |
| 4. 津高住宅団地内遺跡群(古墳他)
〈製鉄遺跡群を含む〉 | 20. 一本松古墳(古墳中期) | 40. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡
(弥生～近世) | 59. 百間川二の荒手遺跡(近世) | 78. 関遺跡(弥生) |
| 5. 佐良池古墳群(古墳後期) | 21. 不動堂古墳 | 41. 上伊福遺跡(弥生・古墳) | 60. 中島遺跡(中島城跡)
(鎌倉～近世) | 79. 百間川遺跡群(縄文～近世) |
| 6. 稲鉢池古墳群(古墳後期) | 22. 妙見山城跡(戦国) | 42. 絵図遺跡(弥生～平安) | 61. 宮南遺跡(鎌倉～近世) | 80. 百間川原尾島遺跡
(縄文中期末～近世) |
| 7. 奥池古墳群(古墳後期) | 23. 鎌田遺跡(弥生他) | 43. 南方遺跡他(弥生～近世) | 62. 国長遺跡(平安～近世) | 81. 百間川沢田遺跡
(縄文中期～近世) |
| 8. ツイミ山古墳(古墳中期?) | 24. 津島新野遺跡(弥生) | 44. 広瀬遺跡(弥生) | 63. 天神河原遺跡(弥生～室町) | 82. 百間川兼基遺跡(弥生～室町) |
| 9. 津島東3丁目第1地点
(弥生・古墳) | 25. 津島江道遺跡(縄文～近世) | 45. 上伊福(立花)遺跡(弥生～室町) | 64. 備前国府関連遺跡 | 83. 百間川今谷遺跡(弥生～古墳) |
| 10. 宿古墳群(古墳前期・後期) | 26. 北方長田遺跡(弥生～近世) | 46. 大供本町遺跡(古代～近世) | 65. 備前国府跡(奈良～平安) | 84・88. 操山古墳群(古墳後期) |
| 11. 片山古墳(古墳前期) | 27. 神宮寺山古墳(古墳前期) | 47. 鹿田本町遺跡(鎌倉～室町?) | 66. 備前国府推定地(南国長)遺跡
(弥生～鎌倉) | 85. 網浜茶臼山古墳(古墳前期) |
| 12. 烏山城跡(戦国) | 28. 青陵古墳(古墳前期) | 48. 鹿田(県立岡山病院)遺跡
(平安～鎌倉) | 67. 南古市場遺跡(奈良～平安) | 86. 操山219号遺跡(旧石器) |
| 13. 七つ坑墳墓・古墳群
(弥生～古墳) | 29. 石井廃寺(奈良?～室町) | 49. 鹿田遺跡(弥生～近世) | 68. 北口遺跡 | 87. 金蔵山古墳(古墳中期) |
| 14. 都月坂墳墓・古墳群
(弥生～古墳) | 30. 津倉古墳(古墳前期) | 50. 岡山城跡(室町～近世) | 69. ハガ(高島小)遺跡(奈良～室町) | 89. 網浜廃寺(飛鳥～平安) |
| 15. 半田山城(戦国) | 31. 妙林寺遺跡(弥生) | 51. 天瀬遺跡(弥生～近世) | 70. 中井・南三反田遺跡・古墳群
(弥生～室町) | 90. 網浜茶臼山古墳(古墳前期) |
| 16. 津島福居遺跡(古墳～室町) | 32. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡
(弥生～平安) | 52. 新道遺跡(奈良～近世) | 71. 原尾島遺跡(弥生～室町) | 91. 操山103号墳(古墳前期) |
| | 33. 津島遺跡(弥生～近世) | 53. 二日市遺跡(弥生～近世) | 72. 赤田西遺跡(弥生～室町) | 92. 湊茶臼山古墳(古墳前期) |
| | 34. 北方下沼遺跡(弥生～室町) | 54. 竜ノ口山頂古墳群(古墳後期) | 73. 幡多廃寺(飛鳥～平安) | |
| | 35. 北方横田遺跡(弥生～室町) | 55. 湯迫古墳群(古墳前期) | | |
| | 36. 北方中溝遺跡(弥生～室町) | | | |

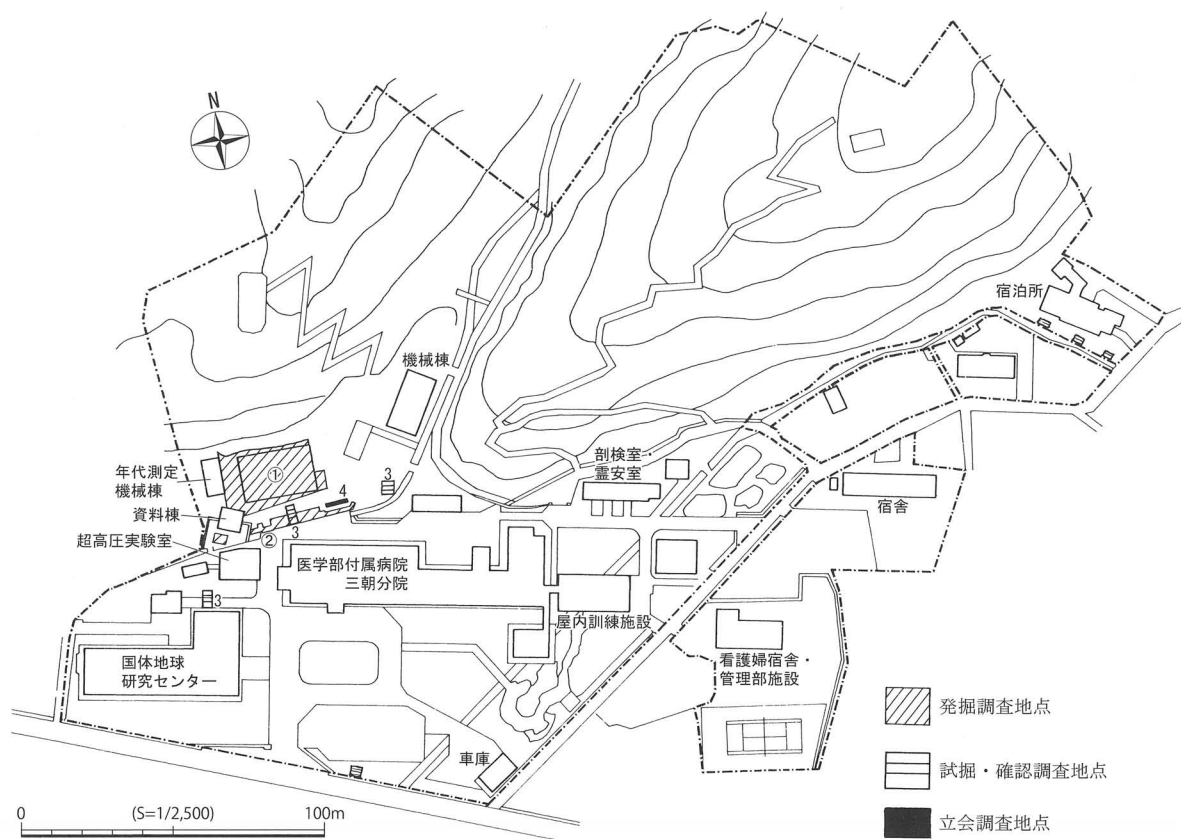
付図1 津島岡大遺跡・鹿田遺跡とその周辺の遺跡



付図2 2008年度までの調査地点【1】—津島地区—

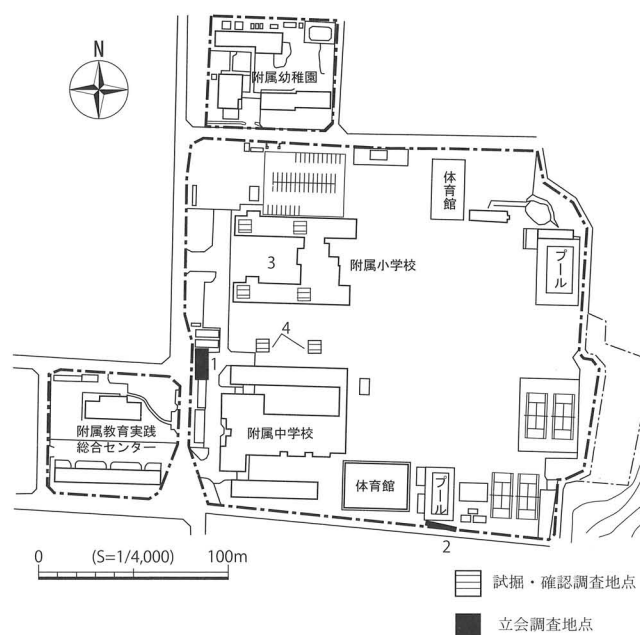


付図3 2008年度までの調査地点【2】－鹿田地区－



付図4 2008年度までの調査地点【3】

—三朝地区—



付図5 2008年度までの調査地点【4】

—東山地区—



付図6 2008年度までの調査地点【5】

—倉敷地区—

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

2011年3月23日 印刷

2011年3月23日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2009

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山市北区津島中三丁目1番1号

(086) 251-7290

印刷 友野印刷株式会社



**BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2009**

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Kita-ku Okayama-city, 700-8530 Japan
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>